

『ファインマン物理学I力学』

リチャード・P・ファインマン、ロバート・B・レイトン、マシュー・サンズ著、坪井忠二訳／岩波書店

紹介しておいて言うのも何だが、この本を読んでも大学の物理学の演習問題や試験問題がスラスラ解けるようになるとは思えない。少なくとも私はその一人だった。問題を解くにはやはり練習（演習）が必要なのである。では何故私がこの本を皆さんに紹介するのか、それは、物理学や力学の根本的な考え方を学ぶことができると思うからだ。もちろん試験問題が解けるに越したことはないが、それよりも物事の本質を理解して、物理学や工学の問題に対して適切なモデルを考えることの方が科学者やエンジニアにとって大切な素養なのである。

本書「力学」は、リチャード・P・ファインマン先生（1965年ノーベル物理学賞）がカリフォルニア工科大学で学部1、2年生対象に行った講義を基にした「ファインマン物理学」日本語訳全5巻（原著は全3巻）の第1巻である。普通の物理学のテキストとは異なり、語りかけるような文章で数式も少なく（皆無ではない）、あたかもエッセイを読んでいるような気分になる。数式や物理現象の意味を丁寧に平易な言葉で説明している。例えば、私が持っている力学のテキストでは運動量は「質量（ m ）と速度（ v ）の積（ mv ）を運動量と定義する」と1、2行の記述しかないが、本書では力や運動方程式との関係も含めて2ページ半ほど使って運動量の意味を説明しているのである（数式は3本だけ）。

私が本書を購入したのは大学に編入学した約25年前である。だが、偉そうなことを書いたものの、実は私がこの本の本当の良さを認識したのは教員になってからだ。講義をするには数式や物理現象の意味を深く理解しなければならないが、本書を読むと自分の理解の浅さや新たな見方に気づく。そのような訳で、物理学（力学）の講義を一通り受講した人に特にお勧めしたい。図書館や書店でぜひ本書を手にとって、どのページでも良いので読んでみてほしい。物理学が得意だと思っている人も苦手で挫折した人も、きっと物理学の奥深さや美しさに気づくはずである。

執筆者紹介

武田 雅敏

機械創造工学専攻教授。専門領域は、材料物性学、エネルギー変換材料・デバイスの開発。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『ファインマン物理学 I 力学』 リチャード・P・ファインマン、ロバート・B・レイトン、マシュー・サンズ著 坪井忠二訳 岩波書店 1986年 3,672円

[ブックガイド目次へ](#)

『ダーウィン以来：進化論への招待』

Stephen Jay Gould 著、浦本昌紀、寺田鴻訳／早川書房

地球上の生命は40億年という途方もない時間をかけて、単細胞生物から恐竜を経て人類に“進化”してきた事を疑う科学者はほとんどいない。しかしその“進化”がどのように行われて来たかは未だに議論がある。ラマルクの「獲得形質遺伝説」は、ネズミのしっぽを実験的に何代にも渡って切っても、しっぽのないネズミは生まれて来なかったという残酷な実験によって否定された。これに対してダーウィンの「自然淘汰説」は、否定する事のできない二つの事実とそれから導き出される一つの帰結とからなる明瞭さで多数説となっている。その二つの事実とは、①「生物には変異があり、それは少なくとも部分的にはその子に受け継がれる」、そして②「生物は生き残れる以上に多くの子や卵を産む」というものであり、そこからの一つの帰結とは、③「平均すればその環境によって好ましいとされる方向に最も良く変異している子孫が生き残って繁殖し、その好ましい変異は自然淘汰によって個体群の中に蓄積されて行く」というものである。ただこの三つの言明によっては、自然淘汰が不適格者の死刑執行人となることは理解できても、新しい環境に適する者を創造する理由にはならない。

人体は父親からもらったただ一つの精子と母親の体内の卵子が受精する事によって生まれた、ただ一個の受精卵が分裂・分化・増殖を重ねて64兆個の種々の細胞からなる器官の有機的統合体として一人の個体に成長したものである。その設計図はノーベル医学生理学賞受賞者のワトソンとクリックによって、細胞核に格納されているDNAの中に記載されていることが明らかにされた。しかし一級建築士が設計図を描いただけでは、高層ビルが現実に出来上がらない様に、DNAに格納された一次元情報だけで人間が発生してくる訳ではない。

例えば人間の顎二腹筋（がくにふくきん: musculus digastricus）は舌骨に繋がる頸部の筋肉の一つであるが（Fig.1）、細長い形で中間の腱を挟み、前腹と後腹に分かれた舌骨上筋である。前腹はオトガイ舌骨筋と共に舌骨を前上方に引き上げる作用を、後腹は茎突舌骨筋と共に後上方へ挙上し、舌骨固定時には下顎骨を後下方に引き下げる作用を持つ。これは一つの筋として命名されているが、この前腹と後腹では発生学的な由来がまったく異なる。たとえば前腹は第一鰓弓に由来して三叉神経の枝である顎舌骨筋神経に支配されているが、後腹は第二鰓弓に由

来して顔面神経に通常支配されている。つまり顎二腹筋を構成する二種類の筋細胞は、二つの全く由来の異なる筋細胞のそれぞれが自分の行き先（舌骨）を“自覚”して“歩いて”行き、舌骨という“空中に浮かんでいる（=どこの骨とも関節でつながっていない）骨”に空いている穴の中で繋がるという曲芸をしていることになる。これは熟練した裁縫師や外科医ですら困難な高等技術であるが、すべての母体の中で毎回間違いなく繰り返されている現象である。このように精緻かつ合目的な生体の構造を見ると、単なる“自然淘汰”で人類が進化して来たとはとても思われぬ。まさに“神の意志”、“神の手”がなした技である。忠実なダーウィニストであるゲールドはこの疑問に、自ら提唱した“断続平衡説”で答えようとしている。



Fig.1 顎二腹筋（下顎と頭蓋骨から発した二つの筋肉が舌骨で繋がっている!!）

ステファレ・ジェイ・ゲールド（Stephen Jay Gould, 1941～）はハンガリー系ユダヤ人移民の三代目として1941年ニューヨークに生まれ、1967年コロンビア大学で古生物学の博士号を取得し、26歳の若さでハーバード大学助教授に就任、1973年には教授に昇格した。カンブリア紀の奇妙な化石動物群を巡る意欲作「ワンダフル・ライフ（1989）」は日米でベストセラーとなった。彼を自然史に目覚めさせたのは、5歳の時に父親に連れて行かれたアメリカ自然史博物館で、ティラノサウルスの骨格標本を見ている時に、誰かのくしゃみで大音響が聞こえたがそれを恐竜の咆哮と錯覚した瞬間だった。その代表的著書である『ダーウィン以来』は、

単に進化論史の紹介に留まらず、進化学・科学史と科学論・科学と社会の考察にまで及び、特に自然科学者の自然観は社会に影響され、逆に社会もまた自然科学観に影響される相対的な存在である事を示している。筆者もこれまで科学の一学究徒として「自然は絶対的な存在で、人間の考え方などには影響されない」と固く信じていた。「科学も生身の人間の所為」である以上、政治や文化の影響から自由ではないと気づかせてくれた本書は、若い理科系学生諸君に是非一読を勧めたい良書であると思う。

『ダーウィン以来』抜書き

*「ダーウィン進化論の登場以来、われわれの生命観は劇的に変わった。だがその一方で、ダーウィンの説ほど誤解され、誤用されて来た理論もない。それはなぜなのか。現代進化生物学の旗手ゲールドは、ダーウィンの原理を出発点としながら科学と社会、文化全般のありように新たな光をあてる。生命への限りない愛情と人類の未来への希望を巧みな語り口で綴る、クルド進化論の原点というべきエッセイシリーズ第一作、待望の登場。」第二刷はしがき

*「我々人間は、ずば抜けて学習する動物である。我々は特に強いとか、素早いとか、設計が良いとか、ということはない。繁殖率も低い。我々の長所は、経験から学ぶ素晴らしい能力をもっているその脳にある。性成熟と共に独立への若者らしいあこがれが芽生えてくるが、ヒトは自分たちの学習を強化するために、その性成熟を遅らせて幼児期を引き延ばしたのである。」(P104)

*「近来の動物行動学は進化生物学にとって非常に重要な一つの刺激的概念を生み出した。つまり、以前には真の武器であるとか雌に見せびらかすための装置であると解釈されていた多くの器官は、実際には雄同士の間での“儀式化された闘い”に使われるためのものだったという考えである。その機能は、雄にはすぐに認める事ができ、簡単に従うことのできる優劣の順位を定める事によって、実際の戦闘（その結果、傷を負ったり生命を失うにいたる）を避けることにあった。」(P132)

「科学は“体系化された常識”ではない。科学が最も我々を興奮させる側面とは、それが我々が“直感”と呼ぶ古来からの人間中心的な偏見に対して強力な理論を対

峙させ、この世界についての見方を全く変えさせてしまうところにあるのである。」
(P136)

*「我々は、精妙な形態上の調整を犠牲にして生殖の努力を最大にするような進化の圧力をr淘汰と呼ぶ。そのように適応した生物がr戦略家である。これに対して、安定した環境にすむ種は、その環境が支えうる最大限の個体群密度に近づく。その際には、環境にうまく適応していない子孫を大量に生み出しても何も得るところはないであろう。数は少なくとも、うまく適応した子孫を育てる方が良いのである。そのような種はK戦略家と呼ばれる。」(P141)

*「科学上のうまい仮説というものは、しばしば思いもかけなかったようなことに着目することで生まれる。仮説が得られるのは、しばしば問題を少しばかり組み替えることによってであって、古い思考の枠組みの中で新しい情報を熱心に収集することによってではない。」(P161)

*「常識は科学上の洞察にとっては、非常にへたくそな案内人にすぎない。なぜなら、常識は、裸の王様を前にした小さな子供の生まれつきの正直さを反映するよりも、文化的な偏見を表現していることのほうが多いからである。」(P165)「太陽は静止し、世界はその周囲を巡ると最初に言われたときには、人類の常識はそれを誤りであると宣言した。だが“民の声は神の声 (Vox populi, vox Dei)”という古いことわざは、哲学者なら誰も知っている様に、科学では信ずる事はできない。(種の起原 (中) 八杉龍一訳、岩波文庫p179) p165」

*「けれども、科学における創造的な思考とはまさにこのようなものであって、事実を偏見、洞察などがかわり合う一つの複雑な過程である。科学が最良の姿をとるとき、科学はそのとるべきすべての手続きに人間の判断と創意とを介在させる。科学とは結局、人間によって実践されるものなのである。」(P189)

*「宗教と科学との実際の関係は、もっとはるかに複雑で込み入っている。宗教はしばしば積極的に科学を奨励して来た。科学にとって執拗な敵があるとするれば、それは宗教ではなくて、非合理的なものの考え方である。」(P214)

*「ダーウィニズムが新しい正統思想としてヨーロッパ中を席卷していた19世紀後半に、それに対する最も先鋭な反対者であった老齢の発生学者カール・エルンスト・

フォン・ベーア（1792～1876）は、勝ち残った全ての理論は三つの段階をたどるものだと、鋭い皮肉をこめて喝破した。つまり、最初は正しくないとして退けられ、次いで宗教に反するものとして拒否され、最後にドグマとして受け入れられ、科学者達はそれぞれ自分は前々からその正しさを理解していたと主張する、と言うのである。」(P243)

*「古い理論の指導のもとに古い方法で収集された事実は、思想を本質的に修正するようになることはめったにない。事実が“自らを語る”ことはない。それは理論の光のもとで解説されるのである。創造的思考は、芸術におけるがごとく、科学においても、意見を変えるための原動力である。科学は本質的に人間の活動であって、論理の法則によって不可避的な解釈にゆきつくというような、客観的情報の機械化されたロボットの集積ではない。」(P246)

*「この実際の大きさの、期待された脳の大きさに対する比を“脳化指数”と呼ぶ事ができよう。1より大きな値は平均的な脳より大きい事を示し、1より小さな値は平均より小さい脳を表す。」(P282)「草食獣も肉食獣も、ともにその進化の間に脳の大きさが連続的に増大しているが、どの時代においても肉食獣の方が常に先行している。すばやく動いている獲物を捕らえて生計を立てている動物の方が、草を食べるものたちより大きな脳を必要としているように見える。そして草食獣の脳が大きくなってゆくと、肉食獣もまたこの差異を維持してゆくためにより大きな脳を進化させた。」(P286)

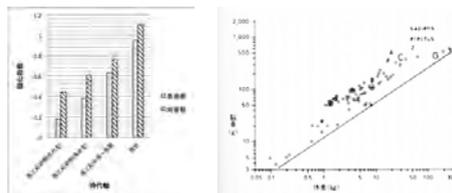


Fig.2 脳化指数 (p276右およびp286左より改変)

*「科学の本領はものごとの統合にある。パスカルはかつて惑星の比喩を使って、知識とは空間における球体のごときものである、といった。我々は学べば学ぶほど、

つまり球体が大きくなればなるほど、我々の未知のものとの接触（惑星の表面積）が大きくなるというのだ。だが、表面積と体積の原理を忘れるなかれ！ 球体が大きければ大きいほど、未知のもの（表面積）に対する既知のもの（体積）の比率は大きいのだ。絶対的に増大する無知が、相対的に増大する知識と共に繁栄し続けます様に。」(P298)

*「我々は互いに助け合わなければならない。そうしないと、皆別々に破滅する事になる（ベンジャミン・フランクリン）。」(P386)

*「文化への不満においてジークムント・フロイドは、人間の社会生活がもつ苦しみに満ちたジレンマを次の様に検討する。我々は生まれつき利己的で攻撃的である。けれども、成功した文化はどれでも、動物的な性向を抑圧し、全体の善と調和のために利他的に行動する事を我々に要求している。文化がますます複雑になり「モダン」になるに従って、我々はますます生来の自我を断念しなければならない。だが我々にはそれがうまくできないために、やましさと苦痛と困難を伴う。文化の代償は個人的な苦痛である。」(P393)

執筆者紹介

福本 一郎

生物機能工学専攻教授（平成27年3月退職）。専門領域は、医用生体工学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ダーウィン以来：進化論への招待』 Stephen Jay Gould著 浦本昌紀・寺田鴻訳
早川書房（ハヤカワ文庫NF）2012年 1,037円

『Ever since Darwin：Reflections in Natural History』 Stephen Jay Gould著
Norton & company 2007年 1,931円

ブックガイド目次へ

『ボーパール午前零時五分 上・下』

Dominique Lapierre、Javier Moro 著、長谷泰訳／河出書房新社

人々に希望をもたらすはずが時として人々を絶望のどん底に突き落とすことがある。それは人為的によるものが多い。本書は、世界最悪の化学工場事故の状況を克明に描いたものである。

1984年12月2日の深夜から3日未明にかけて、インド大陸のほぼ中央に位置する都市ボーパールにあるアメリカの企業ユニオン・カーバイド社の農薬製造工場から有毒な農薬原料のイソシアン酸メチル（MIC）が漏れ出し、一挙にボーパールの住民を襲い、多数の死者を出した。

正確な死者の数は分かっていないが、本書によると事故のあった夜とその後の2日間で少なくとも8千人の死者が、最終的には1万6千人から3万人の死者が出たと推定されている。また、約50万人もの人々が様々な後遺症にその後も苦しめられている。ただし、これらの数値には住所不定の移住生活労働者などは含まれておらず、実際にはもっと多数の人が被害にあったと考えられている。

なぜこのような悲惨な大惨事が起こってしまったのだろうか。この事故の直接的な原因は、作業上のミスによりMIC貯蔵タンクに水が入り込んだことである。水の混入による発熱反応によりMICが気化し、タンク内の圧力が急上昇、安全バルブが破壊されMICがタンクより漏れ出したと考えられている。しかし本書より、この事故の背景には安全よりも利益を重視した企業体質に問題があったことが見て取れる。

事故発生当時、ライバル会社から安くてより安全な農薬が売り出されたこともあり、ユニオン・カーバイド社の農薬は販売不振となり業績は悪化した。そのため、人員が削減され、設備の保守・点検や従業員の安全教育もおざりにされ、従業員の危険性に対する意識やモラルが著しく低下した。また、最後の砦（とりで）となる安全装置もコスト削減のため全て停止中で動作しなかった。さらに、非常に有毒な化学物質が利用され、多量に貯蔵されていることは住民に秘密にされ、安全対策や危険を知らせる手段も講じなかった。

このような状況から、ユニオン・カーバイド社の事故責任は自明のものと思われたが、事故は従業員が故意にタンクに水を流し込んだことが原因であるとし、自社に責任はないと主張した。事故発生から1年経ても当社から犠牲者に実質的

な援助はなく、4年経てようやく補償金4億7千万ドル（当時の為替レートで約600億円）を支払うことで和解した。しかし、当初想定されていたものよりも非常に少ない額の補償金しか被害者には支払われなかったことは想像に難くない。

この事故の後、アメリカを代表する化学企業であったユニオン・カーバイド社は、ダウ・ケミカルの子会社となり世界の表舞台から去った。替わって、アメリカの化学企業モンサント社が新たな農薬と遺伝子組み換え作物を手にもインドに進出し、新たな問題をまた引き起こすことになる。

事故発生から30年が過ぎたが、工場はまだボーパールの街に荒れ果てた姿で残っているらしい。周囲にはいまだ多くの方が住んでいるが、飲み水として用いられている井戸からは許容量をはるかに上まわる濃度の各種化学物質が検出されており、今もなお工場による健康被害が進んでいる。

本書は、研究者、技術者や経営者としてだけでなく人として何が大切なことなのか、どのように行動しなければならないかを深く考えさせてくれる。本書の冒頭に記されたアインシュタインの言葉「人とその安全は、あらゆる技術的冒険の第一の関心事でなければならない。そのことは、作図や方程式に沈潜しているときにも、けっして忘れてはならない」をしっかり心の中に刻みつけて行動しなければならないと強く思った。

執筆者紹介

高橋 祥司

生物機能工学専攻准教授。専門領域は、分子生物学、応用生物化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ボーパール午前零時五分 上・下』 Dominique Lapierre, Javier Moro著 長谷泰
訳 河出書房新社 2002年 各1,944円

ブックガイド目次へ

『感性と独創力』

技術教育国際フォーラム協議会、日本工業大学編／丸善

本書は、技術教育における感性の重要性について、大川陽康先生（技術教育国際フォーラム協議会・日本工業大学理事長）が開催された、第1回技術教育国際フォーラム「感性と工学」の講演・パネルディスカッションの記録を取り纏めたものである。その中では、感性と工学、感性とベンチャー、感性と教育、感性とモノづくり、感性と独創力の5テーマについて、各学会を代表する有識者による議論が詳細に記されている。その中で、技術者教育における感性の涵養の必然性・重要性に関する議論は、技術者教育に携わる者としてだけでなく、技術を志す若者（学生諸氏）には有意義であろう。とりわけ、感性とモノづくりの中で、西澤潤一先生が述べられている、“技術”と“科学”のそれぞれの意義と相互関係については、技術科学教育に携わるものとして、大事な糧となっており、日々の教育で活かせればと考えている。本書は、21世紀の技術・科学を担う学生諸氏に、是非、一読をお勧めしたい一冊である。

執筆 者 紹 介

中川 匡弘

電気電子情報工学専攻教授。専門領域は、カオス工学、フラクタル工学、感性情報・脳機能計測工学。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『感性と独創力』技術教育国際フォーラム協議会、日本工業大学編 丸善 2003年
1,296円

[ブックガイド目次へ](#)

『天然ゴムの歴史 ヘベア樹の世界一周オデッセイから「交通化社会」へ』
こうじや信三著／京都大学学術出版会

現代社会は合成高分子の存在無しには成り立たない。多くの合成高分子が天然素材の代替品として開発され、場合によっては天然物をはるかに凌駕する性能を示すものもある。そのような中であって、天然ゴムは農産物でありながら未だ合成品（合成ゴム）では発現できない性能を有している。もっとも身近なところでは航空機やバス・トラック用など負荷の大きな用途に用いられるタイヤには天然ゴムが不可欠である。本書の中でも述べられているが、東南アジアで大規模プランテーションにより生産されている天然ゴムは、農産物であるが故に運が悪ければ病害により壊滅する可能性がある。冷害による不作で食糧危機が誘発される、というのはイメージしやすいかも知れないが、仮に天然ゴムが病害で生産されなくなったとしたら、現在社会では物流が大きな影響を受けて生活が成り立たなくなることも自覚しておいた方がよい。

ところで、南米アマゾンの熱帯雨林に自生していた天然ゴムが、いかにして地球を半周廻った東南アジアで生産されるようになったかをご存じだろうか。本書ではいかにしてアマゾンから天然ゴムの種子が持ち出され、それが全く別の地で栽培されたか（plant introduction）が描かれている。それもただ単に歴史的な事実を述べるのではなく、膨大な資料を元に筆者が行った調査に基づき、アマゾンから世紀をまたいでゴムが地球を巡る様を、それにかかわった人物の生業と共に描いている。本書に登場する人物の中で特に重要なのが2人のヘンリー（ヘンリー・ウィッカム と ヘンリー・フォード）である。前者はアマゾンから苦労の末天然ゴムの種子を持ち出して東南アジアで商業栽培するまでにした人物、後者は言うまでもなく米国フォード社のリーダーとして現代社会をモータリゼーションの時代へと導いた人物である。本書の副題は「ヘベア樹の世界一周オデッセイから『交通化社会』へ」となっているが、実際には世界一周（南米-欧州-アジア-南米）はなされていない。この理由についても本書に詳しく述べられている。

現代社会において、動植物の国際間の移動は検疫の観点から厳しい制限がある。天然ゴムのプラントイントロダクションはそんなものが無い時代の話であるが、一つ間違えば天然ゴムに頼っている生活がいかに危ういものであるかを考えさせてくれる一冊であると思う。

執筆者紹介

竹中 克彦

物質材料工学専攻教授。専門領域は、高分子合成。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『天然ゴムの歴史：ヘベア樹の世界一周オデッセイから「交通化社会」へ』 こうじや信三著 京都大学学術出版会 2013年 2,376円

[ブックガイド目次へ](#)

『ナショナルジオグラフィック』

ナショナルジオグラフィック協会編／日経ナショナルジオグラフィック社

ブックガイドなのに雑誌の紹介をしてよいものかと迷ったが、今の生活の傍らにあるのは新聞とこれなので、あまり背伸びせずに身近なものからと考えた。内向きな性格だったためか、読書は小さい頃からその想像の世界に入ることが何となく好きだったが、熟成し完成したのは高校時代の満員に近い通学電車の中だった。それが今では電車の中でも読書できずにパソコンに向かってしまう。読書を渴望すると同時に、余裕がなさ過ぎて情けなくなる。この雑誌の良いところは、こんな私にとっては第一に定期購読で手元に強制的に届き忙しくとも見てしまうところであるが、バラッとめくる、おお！と驚く、美しい！と写真そのものに感動する、へえなるほどと深く記事を読み込む、いずれの形態でも読むことができる自由度にあると思う。表紙写真に何度か掲載されたアフガニスタンの少女の写真はあまりにも有名で、薄汚れたボロの中にあるあの美しい瞳は一度見たら忘れられない。思い起こせば、ナショナルジオグラフィックとの付き合いは大学時代の英語版の頃からで、大学でのデザートのようなものであった。今は毎月上の子とは記事について、下の子どもたちとは鮮烈な写真について、わいわいと会話している。

最新号の内容をご紹介すると、日本の植物であるクズがアメリカで大繁殖し環境問題となっている記事、ハワイ波と生きるではサーフィンの歴史や苦難の歴史を背負った日系人の写真、ダニの奇妙な世界 ダニがチーズ作りに一役買い、水をはじく分泌物を出しているとは、爆風の衝撃に苦しむ帰還兵では、芸術療法で制作された仮面に胸を衝かれる、と同時に爆風が脳そのものに与える影響の科学的調査が進んでいることを知る。続く記事は対照的にアルプスの自然の極上写真が、最後の米国汚染地に暮らすでは、実際の無機物、有機汚染物質、核に汚染された地域の写真とともに1980年に成立したスーパーファンド法（廃棄物による汚染浄化のための法律）での浄化実績がグラフで示されている。このように、自然、社会問題、環境問題、サイエンス、探検、考古学、宗教、…と多彩で、現場の写真と共に豊富なデータやグラフが記事の信頼度を高めている。

名前通り、もともとは地理知識の普及をめざす学術誌としてナショナルジオグラフィック協会から発行されたものであったが、発行部数が伸びずに方針転換し、

人間とのかかわりという視点から未知の世界をわかりやすく伝える、地理学を超えた雑誌となったそう。しかも同協会は、自然、探検、歴史、地球環境、宇宙などの調査・探検研究（約8,000件も）を100年以上にわたって支援したとのこと、タイタニック号の発見、故植村直己氏の犬ぞりでの北極点単独踏破、アルプス氷河で発見された5000年前のミイラ“アイスマン”の研究は御存じの方も多いのでは。雑誌購読料がこれらの活動を支え、人類の英知に貢献している。

掲載写真のレベルが高く、大変美しいことはどの号を見ても一目瞭然である。過去を新たな視点から再発見し、現代をvividな描写で切り取り、未来を冷静に判断する、ブライトリー・イエローを是非一度手に取ってみて下さい。

執筆者紹介

高橋由紀子

物質材料工学専攻准教授。専門領域は、ナノ材料化学、分析化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

【雑誌】『National geographic = ナショナルジオグラフィック』日経ナショナルジオグラフィック社

[ブックガイド目次へ](#)

『イラストレイテッド 光の科学』

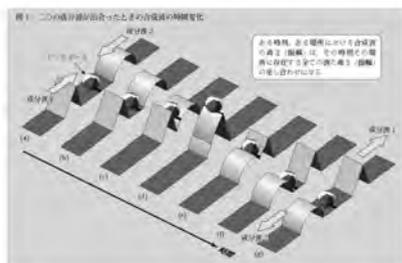
大津元一監修、田所利康、石川謙著／朝倉書店

私たちの周りは、知っているし存在は確かでおおよその性質は小学生の頃から学んでいるけれども、実は良く分からないものに満ちあふれている。「光」もそうしたものの一つではないだろうか。「光」があるからこそ、目で物が見えることは今さら言うまでもないだろうが、中学校の理科で学ぶレンズや屈折現象はあまり良く分からなかったという人も少なくないでしょう。まして「どうして“色”が見えるのだろう？」という話を始めると、そう簡単には説明できない。「空がなぜ青いの？」と訊かれてつい「それは海が青いからさ」などと気取って答えたとしても「そんな冗談言って。あなた理系でしょう？」と突っ込まれるのがオチ。技学を学ぶ皆さんには、身の回りの自然現象についてある程度は理解しておいて欲しい。とはいえ、光を学ぶ機会といえば「物理」の授業でしょう。物理と聞いただけで「難しいから無理！」と逃げ腰になってしまう人も多いのでは？ その理由の一つは、法則や知識を頭に詰め込むことでいっぱいいっぱいになってしまうからかもしれません。しかし、光が醸し出す世界はとても美しく魅力に溢れています。その美しさを感じて頂くのに好適な本が最近出版されたので、ご紹介したいと思います。

本のタイトルの通り、この本は全ページがイラストや写真です。物理の教科書の多くは白黒の図版と数式で占められていますが、この本は美しく鮮やかなカラー印刷で、光のさまざまな現象を絵で表現しています。数式を用いずに、巧みな絵で説明されていますので、光に関わるさまざまな現象が容易にイメージできること請け合いです。この本の「刊行にあたって」には「いわば絵と写真で謎解きをしていく『光の絵本』です」と紹介されていますが、まさしく「光の図鑑」です。白黒図版では容易に表現できなかった物理現象を、フルカラーの立体的イラストで巧みに表現しています。光学の教科書と併せて読んで頂ければ、これまで難解に感じていた光学現象が、生き活きと頭の中にイメージできると思います。

著者の趣味はカメラというだけあって、「光の干渉」の例を示した昆虫の写真一つとっても芸術的な美しさです。このような美的センスの高い著者は、カラーイラスト（作図）においてもそのセンスを存分に発揮しています。Adobe社のIllustratorという描画ソフトで描かれていますが、物理現象を図解するお手本とし

でも大変に参考になります。光学以外の分野に携わっている方々にも、「絵を描くためのデザイン参考書」としてもご活用頂けるのではないかと思います。「この現象の説明には、この表現法があったのか！」というような新しい発見があるかもしれません。



執筆者紹介

木村 宗弘

電気電子情報工学専攻准教授。専門領域は、液晶ディスプレイに関する物性評価や新しい駆動法の開発。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『イラストレイテッド光の科学』 田所利康、石川謙著 朝倉書店 2014年 3,240円

ブックガイド目次へ

『キュリー夫人の玉手箱 科学は素敵がいっぱい』

吉祥瑞枝著／東京書籍

この本を読んだきっかけは著者である吉祥瑞枝先生に頂いたからです。吉祥先生とは電気化学会の男女共同参画推進委員会主催の交流昼食会を通じて知り合いました。長年、キュリー夫人について研究されており、サイエンス スタジオ・マリーを主宰されています。サイエンス スタジオ・マリーは、アートとサイエンスの融合を掲げて、お子さんや若い女性、お母さん方に科学・技術に気軽に親しみ、楽しんでもらおうと2002年に結成され、日本伝統の“紙芝居”の手法をベースに絵、音楽、映像を加えて“実験ショー”という構成で関東圏を中心に地方でも公演を重ねられています。

本の主人公であるキュリー夫人は、“ラジウムウーマン (The Radium Woman)”と呼ばれ、放射能という言葉の名付け親です。女性で初めてノーベル賞を、しかも2回受賞しました。1903年にノーベル物理学賞を、アンリ・ベクレル、および夫ピエール・キュリーと共に「放射能の研究」で受賞。1911年には2度目のノーベル賞として、ノーベル化学賞を「ラジウムおよびポロニウムの発見とラジウムの性質およびその化合物の研究」で受賞しています。キュリー夫人の教育者としての成果が、研究仲間と行っていた“キュリー夫人の理科教室”です。娘イレーヌを含む10人くらいの子供たちに自主的な共同授業を行いました。後年、この授業を受けた子供たちの中からは、ノーベル賞受賞者(娘イレーヌ)や女性初の化学技術者(イザベル・シャヴァンヌ)が出ています。

キュリー夫人は、世界の科学者の中でも、最も有名な女性科学者であり、知名度は高いですが、実際の姿や業績について知る機会は少ないかもしれません。この本の中には、キュリー夫人の言葉がたくさん詰まっており、キュリー夫人をより身近に感じることができるようになっていきます。また、夫ピエール・キュリー、娘イレーヌの言葉やキュリー夫人へ送られたアインシュタインや新渡戸稲造などの著名人の言葉も掲載されていて、キュリー夫人の素顔を垣間見ることができる一冊です。ポーランドのワルシャワに生まれ、勉強するためにパリに出て、長年過ごしたパリの街には、キュリー夫人ゆかりの場所が多く残っています。パリを訪れる楽しみの一つになればと思います紹介させて頂きました。

執筆者紹介

白仁田沙代子

物質材料工学専攻助教。専門領域は、電気化学、触媒化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『キュリー夫人の玉手箱：科学は素敵がいっぱい』 吉祥瑞枝著 東京書籍 2012年
品切

[ブックガイド目次へ](#)

『宇宙のたくらみ』

J. D. バロー著、菅谷暁訳／みすず書房

理系の人間は、因果関係が好きだ。通信ネットワークを専門とする僕も、当然理系の人間であり、原因と結果を見比べて、そこに潜む仕掛けを発見すると感動を覚える。空はなぜ青いのか、火はなぜ熱いのか。現象自体よりもその理由や仕組みがどうしても気になる。ここで紹介する『宇宙のたくらみ』は、そんな仕掛けマニアな理系の人々におすすめの一冊である。

本著では、宇宙論学者 J. D. バローが、我々人類の中に組み込まれた壮大な仕掛け(=宇宙のたくらみ)を様々な面から解き明かしており、当時大学院生だった僕は、一節読み終わる毎に「なるほど」と頷かされた。なかでも印象に残るのは、クラシック音楽の芸術性に関するくだりだ。芸術家は自由な発想のもとに音楽を紡ぎますが、多くのクラシック音楽の旋律には、1/f ゆらぎと呼ばれる一定の法則性がある。この1/f ゆらぎは、次の音が適度に予測可能であることを意味するのだが、おどろくべきことにこの法則性は、小川のせせらぎや林を駆け抜ける風の音と共通なのである。我々人類の祖先がまだ樹上生活を営んでいた頃、小川のせせらぎは命をつなぐ水の存在を示し、風の音は身を隠す木々の存在を示していた。1/f のゆらぎの旋律は、人類にとって安全を示す旋律であり、この旋律を心地良いと感じない種は自然淘汰の過程で減ってきたのであろう。見方を変えれば、我々がクラシック音楽を美しいと感じることは、クラシック音楽が生まれるはるか以前から仕組まれていたということである。

クラシック音楽の例に限らず、本著では宇宙によって仕組まれた仕掛けが多数登場する。我々人類を規定する体格、ライフスタイル、風習、社会性といった様々なものは、宇宙が生まれた時から決められた法則によって支配され、さらに感性や美的感覚といった主観的なものとされるものでさえ、多くの部分が実は制限されている。本著を読んだ後は、壮大な仕掛けの中の人類という存在を改めて認識して、不思議な感覚になる。

理系の巣窟たる技大には、数多くの仕掛けマニアが潜在していることと思う。ぜひ本著を手にして、宇宙によって仕組まれた壮大な仕掛けに触れてほしい。

執筆者紹介

渡部 康平

電気電子情報工学専攻助教。専門領域は、通信ネットワーク、ネットワーク計測。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『宇宙のたくらみ』 J. D. Barrow著 菅谷暁訳 みすず書房 2003年 6,480円

[ブックガイド目次へ](#)

『たまたま』

レナード・ムロディナウ著、田中三彦訳／ダイヤモンド社

本書は「偶然」がいかに私達の生活や思考に関わっているかについて、科学的に説明することをテーマにしている。

確率に関しては、全く記号というものを使わず、かなり高度な話題までしている。例えば、二人の子供がいる時、両方共女の子である確率は $1/4$ である。更に、どちらか一方が女の子であることが分かっているとき、もう一方も女の子である確率は幾つか？「女か男かどっちかなんだから $1/2$ 」とするのは間違いで、正解は $1/3$ である。ここまではよく聞く話。では、更にどちらか一方がフロリダ（珍しい女の子の名前）であるとき、もう一方が女の子である確率は幾つだろうか？本書はそれが、ほぼ $1/2$ であることを数式を全く使わずに説明する。

博打にその起源を見る確率論と統計学は、常にそれぞれの時代の課題を解決しようとした科学者たちによって発展して来た。カルダーノ、ガリレオ、パスカル、フェルマー、ベルヌーイ、ファラデー、ベイズ、ケトレー、ポアンカレ、フィッシャー、ピアソン、ゴルトン達のエピソードは、確率論と統計学の歴史を教えてくれる。「平均値」を今日的な意味でデータの指標として初めて使ったのは、あのニュートンだったらしい。

確率について要点だけを知りたい人には、本書は向かないかもしれない。しかし、野球、株式、ハリウッド映画、カジノ、など様々な実例、それも歴史的に有名な実例が、ユーモアを交えて紹介されるので、ちょっと題材がアメリカン(?)だが、楽しい本である。

条件付き確率についての原因-結果の錯誤は、現代においてもしばしば見られ、例えば殺人事件の裁判に影響を与えた例があげられる。

初等的な確率の教科書にはあまり書かれていない、かなり新しい概念も紹介されていて、少数の法則、可用性バイアス、確証バイアス、平均回帰、ホットハンド誤謬、ノーマル・アクシデント理論などが実例を踏まえてこれも数式なしに説明されている。

本書のクライマックスは最後の2章だろう。第9章「パターンの錯覚と錯覚のパターン」では、人がいかにランダムな過程に意味を読み取ってしまうかを明らかにする。また、完全にランダムなシーケンスに極端に好調あるいは低調な時期

が現れるという現象を、アメフトの勝敗から連続11年間市場の動向を正しく予測したケースなどの事例で説明している。ここでの結論は、「偶然がパターンを生み出すことが思ったより良くあるという知識を持つべきだ」ということだ。

第10章「ドランカーズ・ウォーク」では、「あと知恵」という錯覚がいかにか人を欺くかを説明する。例えば、ファンドのマネージャーたちの成功・不成功のパターンは、ランダムネスから生成されていて、過去の成績は未来へ影響がないことが示される。そして、社会心理学的見地から、人がランダムな過程の中に、いかにパターンあるいは必然性という幻影を見るか例をあげる。私達は、有名な企業の創業者・CEOを過剰に評価してしまいがちだが、彼らの成功はしばしば偶然の連鎖の結果である。

私達の心は、何らかの目立つ結果があるとその理由を探してしまい、「原因-結果」という思考の鑄型に事実を流し込む。何か事件や事故が起こった場合に、「ああ、それは偶然だ」とはなかなか思えない。システムが、ポジティブ・フィードバック回路を含有すれば、全く意味を持たないランダムな初期値が、予想もつかない極端な結果を生むことがある。そのときにその初期値に意味を持たせようとすることは不合理なのである。

ランダムネスといかにつきあっていくべきだろうか。著者の主張を要約してしまえば、ランダムネスとはあくまでシステムの外部にあり、解釈できないということがその本質である。偶然を偶然と認める事、その全面降伏こそ最も誠実な態度である。ただし、失敗する回数を減らそうとすれば、成功する回数も減るであろう。

本書の最後の「必然性という幻想を超えて」で、著者の出自が、ある歴史的悲劇と家族の愛情の「たまたま」によっている事が明かされる。かつて、ナチスの強制収容所において、著者の母の姉のある行いが、自らの死を招いた。妹は生き延びたが、それは、原因-結果の関係にあるのではない。「未来を予測できるとかコントロールできるとか安易に思わないように。」驚くべきことに、これは母の教えでもあった。

執筆者紹介

原 信一郎

基盤共通教育部教授。専門領域は、代数的位相幾何学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『たまたま：日常に潜む「偶然」を科学する』 Leonard Mlodinow著 田中三彦訳
ダイヤモンド社 2009年 2,160円

[ブックガイド目次へ](#)

『ゾウの時間 ネズミの時間』

本川達雄著／中央公論社

言わずと知れた中公新書のロングセラー『ゾウの時間ネズミの時間』。この本との出会いは今から〇年前、私が高校受験を終えた直後であった。当時通っていた塾の理科の先生（工学部に通っていた大学院生で、ちょっとイケメンだった）に、高校合格おめでとう！と手渡された本だった。

当時、小説ばかりを読んでいた中学生の私には、新書は大人が読む本というイメージがあり、黄色いシンプルな表紙の難しそうな本を面白いから読んでみてと薦めてくる先生は“クールで知的な大人”という感じがしてドキドキしたのを覚えている。

家に帰りベッドの中でその本を開いてみると・・・・・・・・面白い。

私が持っていた“時間”の感覚がどんどん崩れていく。1秒、2秒ではなく心臓の鼓動を基準にすると、大きなゾウも小さなネズミも、みんな同じだけの寿命を持っているというのだ。人間を基準に作った時間は人間だけのもので、ゾウにはゾウの時間、ネズミにはネズミの時間があるのだ。私の思っている時間は、この世界の誰もが共通のものではないのだ。

私はすっかり、そこに広がる理系ワールドに嵌ってしまった。たった一つの“気づき”で、世の中の見え方がガラッと変わってしまうのだ。

なにこれ、研究者ってこんな面白いことを勉強しているんだ！

理科の先生が生き生きとして楽しそうな理由が、この本を読んで分かった気がした。

もし私がこの本に出合わなかったら、もし先生がイケメンじゃなかったら、私はこうやって大学の先生をやっていることはなかったかもしれない。

執筆者紹介

吉武裕美子

機械創造工学専攻助教。専門領域は、ソフトマテリアルの表面物性、流体力学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ゾウの時間 ネズミの時間』 本川達雄著 中央公論社（中公新書）1992年 734円

[ブックガイド目次へ](#)

『女の一生の「性」の教科書』

河野美香著／講談社

長岡技大で長らく図書館員をやっている。なにを隠そう、高専出身である。

高専を出て、なんで図書館員？と言われることがあるが、この仕事をしていて高専卒でよかったと思うことは意外にけっこうある。特に図書担当になったこの数年そう思うことが多い。

図書担当になってから、日々返却される本をながめ、よく利用される本や本の傷み具合をチェックして、図書の購入案を考える。試験時期に「電子物性」やら「半導体工学」といった本がよく借りられているのを見ると、自分の学生時代を思い出し、“みんながんばってるなあ”とひそかにエールを送る。自分が赤点ばかり取っていた「有限要素法」だの「電磁気学」に関連する本は、新刊が出るとついつい買いたくなってしまう。もちろん(?)詳しい内容は全然覚えていない。でも、工学分野(の一部)の内容が多少でもわかるのは、技大図書館で図書館員をやるのに少しは役に立っているかなと勝手に思っている。

よく言われるように、高専出身者の強みはなんといっても専門知識の豊富さだろう。中学を卒業してからずっと工学系の勉強をしているのはやっぱり大きい。でもその反面、専門知識以外の一般教養的な部分が弱いなあ、というのも否定できない。

自分自身、高専を出てから、“知らないことが多いなあ”と痛感することがしばしばある。たとえば、私がいた高専では生物の授業がなかったので、私の生物学の知識レベルは中学生止まり。なので、血液型の遺伝ルールを知らない。何型と何型の両親からは何型の子供が産まれるのか、といったことがわからないので、子供ができたとき、周りがそういう話をしていてもついていけなかった。そして、この話題は世間話の中でもわりとよく出てくるので、内心あせる…。

今は、わからないことがあったらググって適当にネットの情報を読めば、大体のことはわかって事足りてしまう。でも、「よくわからない、でもちょっと興味がある」というテーマについては、ぜひ「新書」を読むことをおすすめしたい。

「新書」というのはいわゆる新書サイズの本で、それほど大きくも、厚くもないので、読みやすくてとっかかりやすい。持ち歩くにも軽くてかさばらないので、就活や帰省の移動時間に読むのにもちょうどいい。新書には『バカの壁』とか『聞

く力』とかベストセラーになったものも多いし、テレビなどでおなじみの池上彰さんや将棋の羽生名人など、著名人が書いたものもたくさんある。旬なトピックやちょっと気になるテーマについてひととおり知りたいときにはなかなか便利である。かたっぱしから読んで、雑学を仕入れておくのも悪くない。いろんな出版社からいろんなレーベル（シリーズみたいなもの）の新書が出版されているが、中でも講談社のブルーバックスシリーズは、科学・工学分野のトピックを中心に扱っているので、本学の学生には手にとりやすそうだ。

せっかくなので、おすすめの新書を1冊あげておこう。ブルーバックスシリーズから『女の一生の「性」の教科書』という新書が出ている。これはぜひとも女子学生に読んでほしい。女性が社会でますます活躍するであろうこれからの時代、妊娠・出産に限らず、一生を通じた「女性」という「性」について、若いうちに正しく理解しておく、これからのキャリアを考えるのにきっと役に立つはずだ。

ここ数年、図書館には新しい新書が次々と入荷している。ぜひ一度新書コーナーをぶらぶらしてみしてほしい。きっと1冊くらいは、ちょっと気になるタイトル、おもしろそうなタイトルの本が見つかると思う。

ちなみに新書コーナーの場所は、図書館2階フロアの真ん中あたり。ご不明な点は、いつでもお気軽に図書館カウンターまで！

執筆者紹介

深澤百合子

本学学術情報課情報サービス係長。担当事務は、利用者サービス全般、図書館資料の受入、管理、分類等。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『女の一生の「性」の教科書』河野美香著 講談社（ブルーバックス）2012年 1,015円

『バカの壁』養老孟司著 新潮社 新潮新書 2003年 734円

『聞く力ー心をひらく35のヒント』阿川佐和子著 文藝春秋（文春新書）2012年 864円

『聞く力2ー叱られる力』阿川佐和子著 文藝春秋（文春新書）2014年 864円

[ブックガイド目次へ](#)

『努力する人間になってはいけない：学校と仕事と社会の新人論』

芦田宏直著／ロゼッタストーン

著者は専門学校校長、大学の学長を歴任した教育者で、本書は入学式や卒業式のあいさつの言葉を編集したものである。その教育者が何という事を書くのか?!と思わせるような題名で、「努力しないで〇〇を得る方法」とか「簡単に〇〇に成功する方法」といった安物のビジネス書の様な印象であるが、かなり立派な内容である。

そもそも論であるが、「努力は買ってでもしろ」「努力に勝る天才はなし」と「努力」に関する日本語のことわざは数多くある。それどころか「努力すらしなくせに」という言葉が象徴するように、日本では「努力」が重視され、尊ばれる文化に住んでいる。

本書の題名では「努力」をしてはいけないというが、はどういう事か？
著者がいうには、世の中には次のような人がいる。

- 1つ目は、怠け者だけれども目標を達成する人
- 2つ目は、がんばり屋で目標を達成する人
- 3つ目は、がんばり屋で目標を達成できない人
- 4つ目は、怠け者で目標を達成できない人

世間では4番目が一番ダメな奴とレッテルを張られ、1番目が最も嫌われると言ったところだろうか。

しかし、良く考えてみよう。給料を払う側から見れば、どうか考えてみれば一目瞭然である。努力しようがしまいが、目標を達成する人が望ましい。なぜならば期待した結果が得られなければ、企業は成り立たない。例えば、1000万円の投資で2000万円の利益が上がったか、それとも1000万円の赤字になったかを比較すれば明らかである。努力したかしなかったかに拘わらず、利益を出した方が優れている。たとえ上司は許してくれたとしても、株主や銀行は容赦しないだろう。

では、一番困る存在は誰か？ここで著者は言う。これは3番目である。「結果でなくプロセスが重要」といっても、結果につながらないプロセスは価値がなく、目標達成を偶然にせず、継続的なものにすることが重要である。さらに著者は続ける。

「こういう人は上長や周辺の人言うことを聞きません。なぜか。怠けるつもり

もないし、他の社員が遊んでいるときも仕事をしているし・・・」最後には、「これ以上がんばることなどできない。」こういう人は、努力が足りないから目標達成していないと思い込んでいる。だから、達成につながらない努力をすることになる。これはある意味、エンジンは強力だがハンドルがついてない車に乗っているようなものである。努力というアクセルを踏み続けることで、同じところをぐるぐると回りながらタイヤから煙もくもくとドリフトし続けている。にもかかわらず、目標に近づいていると思っているのは本人だけで、そのうち評価されないと絶望感に陥る。

この無意識の努力評価主義は実に厄介で、様々なところに現れてくる。成績にも口を挟んでくることがある。努力点をください、レポートを提出したのだから成績がつくのは当たり前だという感覚である。(本当に努力したのか疑問が残るものが大半だが。)

この努力論批判に続き、就職活動への心構え、就職してからどのように仕事を覚えていくか、原点の学校教育論へと続いていく。

私が学生のときに、こういう説教を聞いたかったな。

執筆者紹介

綿引 宣道

情報・経営システム工学専攻准教授。専門領域は、経営学、経営社会学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『努力する人間になってはいけない：学校と仕事と社会の新人論』 芦田宏直著 ロゼッタストーン 2013年 3,024円

[ブックガイド目次へ](#)

『理系のトップはなぜダメなのか』

諒純也著／阪急コミュニケーションズ

本学が行っている教育の方向性の1つに「指導的技術者の育成」というのがある。一般的に解釈すれば、技術者としてリーダーシップが執れることが重要な要素という感じだろう。本学の出身者である私にとっては、学生の頃から、「リーダーとか向いてないしね」と思っていた話である。その気持ちはあまり変わっていないのが正直なところである。

さて、リーダーシップはなかなか教えて身に付くものでもないと思う一方、リーダーシップ教育の重要性や必要性は大学教員として強く感じている。ビジネスではリーダーシップの育成というのはもはや常識になっていて、企業の研修やビジネススクールでは普通に行われている。それらは、一定の成果も上げているように見える。

先に記したように、指導的技術者を育成する本学では、様々な教育プログラムでリーダーシップの育成を進めている。うまくいっているかどうかは別に、足下を見てみたくなった。というのも、他大学のある年配の工学部教授から興味深いことを伺った。「まじめに勉強していて成績が良かった学生で出世したのは大学の先生になったものだけで、学生時代に先生から怒られ、まじめに研究なんかしなかったタイプが会社では偉くなっている。同級生でもそうだな」とよく聞く話であるが、ここにリーダーシップを考える上で何かあるのではないかと思った。

今回、紹介するのは、そんなことを考えている頃、見つけた本である。「理系のトップはなぜダメなのか」とタイトルだけを見ると何とも言えない本だが、中身は非常に示唆に富んでいる。この本の著者は理系出身であり、某大手材料メーカーで15年ほど技術者生活を送った後、自ら開発した商品とともに営業部に移動したそうである。現在は新規事業の立ち上げの責任者を務めているそうである。ご自身も理系上りのトップである。そういう立場で、理系出身者が陥りがちなリーダーとしての失敗を述べている。その上で、理系出身者としてリーダーシップを執れるようになるための教育に関する処方箋を提言している。

この本に書かれている内容は、自分自身に照らし合わせれば何とも辛い内容であり、知り合いの顔を思い浮かべれば非常に愉快である。最近のお笑い風言えば、理系出身トップの「あるあるネタ」である。もっとも笑っていられる話ではない

のであるが...

私たち教員にとってはいかに指導的技術者を育成すべきかという観点で読んで欲しい本であるが、修士や博士の学生にも是非とも読んで欲しいと思う。というのは、この本を読んで私自身自覚していなかったことが幾つも発見できたのである。技術者としてリーダーシップを発揮する場面において、必ずしも部下やパートナーは同じ理系とは限らない。財務担当者、デザイナー、一般市民など、私たち理系の常識を知らず、私たちがキチンと説明しようとすればするほど、私たちの話を聞きたくなくなる方たちである。それでも、チームで仕事をしていかなくちゃならないし、チームを纏めていかなくちゃならない。投げたり、キレたりしても、何も始まらないし、何も解決できない。チームが大きくなって個々の顔が見えないレベルのポジションになれば、相手の反応もわからずに話をするのである。指導的技術者には何が必要かを考えるためにも学生にぜひ読んで欲しいのである。

もちろん理系出身者の全てがリーダーに向いていないわけではない。理系出身の優れたビジネスリーダーは日本にも多く存在する。文系出身者の方がもっと問題だという意見もあるだろう。しかし、そう言ってみても何も得ることはない。本学の社会的役割が、技術者として優れた能力を身につけ、リーダーとして高い能力を発揮する人間を「より多く」輩出することとするなら、特別な人だけを取り上げて賞賛しても仕方がない。そういった優れた指導的技術者が持つコンピテンシーを把握して、それをいかに育てる教育を行うかが重要なのである。そういう観点で読んで欲しい本である。

執筆者紹介

南口 誠

機械創造工学専攻准教授。専門領域は、材料工学、高温物理化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『理系のトップはなぜダメなのか』 諒純也著 阪急コミュニケーションズ 2012年
1,620円

[ブックガイド目次へ](#)

『7つの習慣：成功には原則があった!』

Stephen R. Covey 著、James J. Skinner、川西茂訳／キング・ペアー出版

これまでの研究教育生活を振り返ると素晴らしい人たちに出会ったことを思い出す。高度な講義内容をよく勉強し理解してくれた人たち、そして研究で素晴らしい能力を発揮してくれた人たち、これらの人たちにお別れの時にはいつも、新しい人生で夢を実現するために役立つ重要なことを話しておきたいと思う。その第一は学生の頃に新聞の投書欄で見つけた話だ。

「私」は実に平凡な中学生か高校生。クラスメートの中に国体に出た一流の水泳選手がおり、彼がいつもクラスでちやほやされることに反感を持っていた。ある日「私」はその日のホームワークに必要な資料を教室に置き忘れてきたことに気がつき、夜なのにどうしても学校に戻る必要が出てきた。学校の門の近くまで来ると、真っ暗な構内で屋内プールだけに明かりがついている。はてなと思って中を覗いてみると、そこではクラスメートのあの水泳選手がただ一人、黙々と水泳の練習をしていた。それを見た時「私」には「一流である」ということがどのような事なのか、誰にも解説されることなく一瞬にして理解できた。

我々が自分の人生における夢を実現しようという時、是非知っておくべきいくつかの重要事項がある。これらの事項は特別な時には他人に説明されなくても理解できるのかもしれない。しかし入学、研究室への配属、就職などの転機には、夢の実現のために新しい計画を立てておきたい。この計画のためにはこれら重要事項の理解が必要不可欠となる。

書店に行くとたくさんの啓蒙書が積まれている。これらを通読してみるといくつかの事項はどの啓蒙書にも共通して紹介されていることに気づくかもしれない。これらの重要事項にはルーツがあるのだ。啓蒙書の多くの著者は後述するような、いくつかの既にスタンダードとなっている啓蒙書の古典から着想を得ている。

ここに紹介する『7つの習慣』はそれらの古典的な啓蒙書の一つであり、とても内容の深い本だ。一読するだけではすべての内容を把握するのは困難だが、な

んらかの節目ごとに再読していけば、この本はあなたの人生をととても豊かにしてくれるだろう。

『7つの習慣』におけるすべての指摘は含蓄が深いが、ここでは我々日本人が特に知っておくべき事項をひとつだけ紹介したい。それはwin-winの精神である。これは読んですぐ意味のわかる言葉であり、既にいろいろな所で使われている。しかし著者は、ほとんどの人がこの言葉の本当の意味を理解していないという。この意味を知るためには本書を熟読する必要があるが、それはさておいて以下のようなことを考えてみよう。

我々にとって富士山が「世界遺産」に登録されたのは嬉しいニュースだ。しかしこれが「世界自然遺産」ではなく「世界文化遺産」なのに何人の人が気づいているだろうか。これには理由がある。富士近郊は開発が進みすぎて自然が破壊されているからだ。我が国が素晴らしい国であるのは間違いないが、政府やマスコミがいうように「美しい国」だと感じるためには、残念な事に「愛国心のめがね」を通して景観を見る必要があるのかもしれない。

たとえば三島市内をドライブしていると突然視界が開けて雄大で美しい富士山がぬっと姿を現わす事がある。その美しさにはとても感激するのだが、それに続いて現れるのは黄色や赤のどぎつい色彩の看板だ。富士を見ればどうしても眼に入るようにわざと目立つ色彩でしかも高い位置に掲げられている。これらの醜悪な看板は日本の都市ではありふれた風景だから、ほとんどの人は違和感を感じないのだろう。しかし外国の街と比べると、どうしてもその醜悪さと広告主のエゴを感じてしまう。

このような派手な広告類は外国の多くの都市では景観の保護の目的で規制されている。バーハーバーでは看板自体が芸術的で、街並みととても美しく調和している。コペンハーゲンではマクドナルドやケンタッキーフライドチキンもゴシッ

ク様式のビルの一部として同化している。またタオスやサンタフェではプエブロ・インディアン伝統の土作りの家がマクドナルドの店舗となっていたりする。街全体の調和のとれた美しさは、この街にいつかまた来てみたいという気持ちを強くさせる。

派手な看板を掲げて周辺での競争に勝っても、その利益は一時的なものでしかない。大企業であっても、金もうけしか考えない会社はそのうちに没落への道を歩むことになる。日本では大学受験で人生の多くが決まるから、競争が大事だと考えている人が多い。しかし私自身とても驚いたのだが、世界的にベストセラーとなったビジネス書の多くには「社会への奉仕」が企業の成功の要因としてあげられている。

ここで紹介しているスティーヴン・コヴィー『7つの習慣』に加えて、ピーター・ドラッカー『マネジメント』、『経営者の条件』、ナポレオン・ヒル『思考は現実化する』、本田 健『ユダヤ人大富豪の教え』など。一見して金儲けの仕方を教えているように思えるこれらの本の根底を流れているのは、意外にも「企業の存在意義は社会への奉仕にある」という思想である。

我々はすべてを点数で評価される環境にいるが、ドラッカーは「私は社内評価制度が本当に機能している会社を見たことがない」と言う（『経営者の条件』）。競争が大事なのも確かだが、人生における夢の実現のために、我々の目はもっと大局を見すえていなければならないのではないだろうか。

例えばあなたがある駅前商店街に店を構えるオーナーだと考えてみよう。価格やサービス面で近くの商店と競争するが、なかなか売上げが伸びない。近隣の店舗も閉店するところが目立ってきて、街はシャッター商店街となりつつある。事態を打開するにはどうすればよいか？

そこで商店街全体で解決策を話し合った。その結果、もともと少ない客を各店が奪い合っていた現実が指摘され、まず商店街自体を魅力的にする取り組みが提

案された。花を植えて美観を整え、お客さんが足を運びやすい環境を整えた。商店街全体の行事を魅力的なものとし、またすべての店のサービスを充実させた。その結果、郊外の大規模なモールに移っていた客足が次第に商店街に戻ってきた。

日本でも研究に大規模な予算が投じられることになって久しく、今や中小規模の大学は大規模な大学に太刀打ちすることが困難な状況だ。私たちの大学も内部で競争するのではなく、win-winの精神を持って大学全体をより魅力的にしていくシステムを作っていく必要がある。本学に入学しそして巣立っていく人たちも、自分の人生における夢を実現するためにはこの精神を学んでおく必要があると思う。

『7つの習慣』は高度に成功した人たちが持つ習慣を集大成して解説したものだ。ここに挙げたwin-winの精神を含めて多くの含蓄のある考えを、多くの具体的な例を用いて平易に解説している。これらの重要事項（習慣）が、達成すべき順序に並べられているのも大きな特徴である。研究にその分野の知識の理解が必要であるのと同じように、夢の実現にも重要事項の理解が必須となる。人生の転機に本書を是非熟読して、自らの夢の実現の一助としてほしい。

執筆者紹介

三木 徹

生物機能工学専攻教授（平成27年3月退職）。専門領域は、分子細胞生物学。

-
- 『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『7つの習慣：成功には原則があった！』 Stephen R. Covey著 James J. Skinner,
川西茂訳 キング・ベアー出版 1996年 2,097円
『マネジメント：課題・責任・実践 [全3巻]』 P. F. Drucker著 上田惇生訳 ダイ
ヤモンド社（ドラッカー名著集13-15）2008年 各2,592円
『経営者の条件』 P. F. Drucker著 上田惇生訳 ダイヤモンド社（ドラッカー名著
集1）2006年 1,944円
『思考は現実化する』 Napoleon Hill著 田中孝顕訳 きこ書房 1999年 2,376円
『ユダヤ人大富豪の教え』 本田健著 大和書房 2003年 1,512円

[ブックガイド目次へ](#)

『現代語でさらりと読む茶の古典 - 茶の本 = The Book of Tea』

岡倉天心 [原著]、田中秀隆著 / 淡交社

技大が文部科学省のスーパーグローバル大学に選定されたということはニュース等で取り上げられているので学生の諸君も知っているだろう。また、スーパーグローバル大学のことを考えなくとも、今後（現在でも）、地球規模での展開ができる技術でなければ評価されることはないだろう。したがって、技大の学生諸君にとっての活躍の場は日本に留まることなく、地球全体になる。グローバルに通用する技術は、地球全体どこでも通用するようなものであるが、そこで活躍するであろう技術者は、各々の国の文化を尊重した国際感覚を持ち合わせており、当然、自国の文化を理解し説明できる国際人でなければならないと私は信じている。さて、今回紹介するのは、岡倉天心が明治39年にニューヨークで出版した『The Book of Tea』の最近出版された現代語訳である。岡倉天心は今更紹介するまでも無いが、フェノロサとともに明治の混乱した国際化の中で日本文化を深く理解し、東京美術学校（現在の東京芸大）の設立に係り、ボストン美術館を中心に日本文化の発信に尽力した、真の国際人である。『The Book of Tea』は、欧米人に向けて日本の文化のすばらしさと日本が高度な文化国家であることを知らしめるために書かれたものである。今でも内容は全く色あせていない。『The Book of Tea』は出版後、直ぐに訳され、岩波文庫で昭和4年の訳が最初であり、現在でも岩波文庫で読むことができる。『The Book of Tea』は、『茶の本』として多くの訳本が出ており、特に、ここ数年、多くの新訳が出ている。このブックガイドで薦めているのは、その中の一冊であるが、他のものや英語の原本や対訳本も手に入るので比較してみるのも良い。なお、原本の署名はKakuzo Okakuraと岡倉天心の本名である岡倉覚三と成っているので、訳本も「覚三」とより知られている「天心」の2つの著者がある。

さて、私がこの本と出会ったのは全くの偶然であった。予約していた新幹線の乗車時間に少し時間があつたので本屋で時間をつぶしていたときに見つけたものである。私はよく、文化・歴史・食に関するもの本や雑誌で時間つぶしをしている。『茶の本』は、茶道の紹介のようでそうではなく、ましてや、茶道の所作や手前などを説明したものではない。茶道を通して日本の文化や精神、歴史的な連続性を書いているものである。したがって、茶道に興味のないものであってもお

もしろく読むことができる。もちろん、茶道に関心があるものは、よりおもしろく読むことができるだろう。斯く言う私は、茶道を正式には習ったことはないが、私の生まれ育った地域は日常的に抹茶を飲む習慣があり、今でも好きなように茶をいただいている。ちなみ、茶碗をまわさないことで知られている流派が私の地元では盛んである。

話を、紹介する本に戻そう。紹介した本は、解説が長い。天心の『茶の本』とほぼ同量の解説がある。そして、その解説もおもしろい。それが、この本を紹介する所以である。訳者を少し紹介しておこう。訳者は、茶人としては、田中仙堂として知られている方で、大日本茶道学会の副会長である。大日本茶道学会は、明治時代、当時の茶道に疑問を持った茶人たちが、「茶道本来無流儀」などの標語を掲げて作ったものであり、現在では一つの大きな「流派」に成っている。設立の過程から「流派」と呼ぶのは問題があるかもしれないが。なお、私は大日本茶道学会の回し者でなければ、前述の地元の流派もそれとは異なる。明治時代は茶道にとっても大きな変革の時代で、既存の流派にも大きな変革が行われると共に新たな考え（例えば前述の大日本茶道学会や小林一三に代表される新茶人等による新茶道など）が勃興し、天心の『茶の本』には（新茶道には触れられていないが）、そのような時代背景の中で書かれたものであることも考えて、捉えると別の楽しみ方もあるだろう。この点においても、田中秀隆氏の解説で読むというのは理に合ったものである。また、余談ではあるが、この本は、裏千家の出版社から出ている。天心の本は、流派にとられないものであるが、訳者と出版元が異なる流派であるのも面白いと思っている。

ともあれ、茶道に興味があるもの、あるいは実際に茶道に親しんでいるものでも目から鱗が取れるような切り口で書かれており、一読の価値があり、茶道に興味があるなしにかかわらず、国際化とはなにかを考える一助になるだろう。一度、手にとって読んでみることをお勧めする。

執筆 者 紹 介

鈴木 達也

原子力システム安全工学専攻教授。専門領域は、核燃料サイクル工学、核・放射化学。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『現代語でさらりと読む茶の古典－茶の本＝The Book of Tea』岡倉天心原著、田中秀隆著 淡交社 2013年 1,296円

[ブックガイド目次へ](#)

『震災復興が語る農山村再生—地域づくりの本質』

稲垣文彦他著／コモンズ

いかにも「技術科学大学」の書評としては似つかわしくない本を紹介しようと思う。

10年前の晩秋、2004年10月23日の夕方だった。突然の激しい揺れ。ちょうどこの場所、大学の研究室でパソコンに向かっていた。パソコンは倒れ、壁掛けの時計が落ちてきた。中越地震である。

もちろん都市部でも被害はあったが、地域の存続が危ぶまれるような壊滅的被害を受けたのは豪雪の農山村であった。あちこちの斜面が崩れ落ち、もともといびつな形の農地は原型を無くした。「復興とはなにか」。農地の復旧、産業の再生、人口の回復、それをもって「復興」と呼ぶのだとすれば、「復興する」ことはもはや不可能かと誰もが思った。諦め放置される農地は増え、折からの不況もあって産業も衰退した。そして何よりも旧山古志村を中心に人口は半減した。過疎化と高齢化の時計の針が20年分、強制的に進められたのである。

10万人を超えるボランティアがやってきた。この地域に明るい未来を描けず流出し続けた次世代に変わって、血縁関係の無い若者たちが大挙して支援したいと押し寄せてきた。地元からも復興支援を担う組織が生まれた。中越復興市民会議である。休職中の30代休学中の20代が立ち上げたその組織は、内外に仲間の輪を広げ、被災集落にくさびを打ち込み、社会の主体と被災地の橋渡しをしていった。行政でも住民でもボランティアでもない「中間支援」組織として、信頼と実績を積み上げていった。

60あまりの被災集落、人口減少と高齢化は明らかに進展した。しかし、元来もっていた「山で暮らす者のたくましさ」を活かし、ヨソモノから気づかされた地域の宝を磨き、地域を開き、誇りを取り戻していく。農家レストランが生まれ、農家民宿が生まれ、アルパカ牧場も生まれた。いまや交流人口は震災前に比べ倍どころか桁違いに増えた。移住者を迎えて限界集落から脱却する「奇跡の集落」も生まれた。人口は減ったが、地域の活力は間違いなく復活どころか、急成長した。間違いなく「復興はした」のである。

中間支援組織が地域と一緒に10年間築きあげてきた復興支援の様々な仕組みは、2011年の東北の被災地へ次々と移植されている。悩みながら、走りながら、考え

て行動し続けてきた中間支援者の目線から、「中越復興」を総括し、過疎・人口減少に悩む全国の農村地域へと届けたいメッセージが凝縮された良書である。

社会の課題に気づいた人が「主体的に考え行動すること」の大切さ。結果ばかりを追求するのではなく「プロセスをデザインすること」の大切さ。「たくましさ」を備えた農山村の高齢者と「しなやかさ」を備えた現代の若者たちのコラボレーション。「合意形成ではなく共通認識」。農山村に限らず、閉塞感漂う現代社会のあらゆる場面で役立つ珠玉のメッセージに満ちている。これからのエンジニアにも間違いなく役立つ「知恵」なのではないだろうか。

執筆者紹介

上村 靖司

機械創造工学専攻教授。専門領域は、雪氷工学、災害復興学。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『震災復興が語る農山村再生：地域づくりの本質』 稲垣文彦ほか著 コモンズ
2014年 2,376円

[ブックガイド目次へ](#)

『アカデミック・キャピタリズムを超えて—アメリカの大学と科学研究の現在』

上山隆大著／NTT 出版

現在、大学（university）と呼ばれる制度は中世の欧州に遡ることができる。最古の大学組織とされるのはイタリアのボローニャ大学で、本書の著者によると、学生たちが教授陣に講義内容や学費に関する要求を突きつけるための学生団体（ユニベルシタス、universitas）にその起源がある。すなわち、教授の下に学生たちが集まり、彼らの共同自治組織として形成されていったのだ。日本国憲法第23条にも保障されているいわゆる「学問の自由」が具体的には「教授（教育）の自由」および「研究の自由」「研究発表の自由」を指すゆえんだ。

第12回「読売・吉野作造賞」を受賞した本書は、はしがきでいきなり、次のように一見、“挑戦的”な問いかけで始まる。

本書で扱っているテーマは、大学研究の特許化に代表されるような、知識生産への市場経済の浸透、大学そのものの商業化、大学資源の市場化などである。近年においてこの動きはアメリカにおいて顕在化し、ほとんど普遍的な力を持って、世界中の国々の大学組織へ浸透し始めている。この流れは伝統的な大学の役割を根底から覆してしまうのだろうか？

日本の大学もこうした流れには逆らえず、文部科学省に叱咤激励され、先行するアメリカを「周回遅れ」で追いかけているのが現状ではないだろうか。

それは、見方を変えれば我が国の経済界の要求でもある。先端科学知識を生み出す場としての大学研究への期待と大学への変革を迫る要求は根強い。著者によれば、その背景にはグローバル化する経済の進展がある。1989年11月のベルリンの壁の崩壊に象徴される東西冷戦体制の終焉により始まった世界経済の「大競争時代』において、技術革新（イノベーション）を絶えず引き起こし、他国（の企業）に比べて優位性を保つことは国の消沈がかかる至上命題となっており、大学に寄せる期待は高い。

アメリカの大学は、素朴な古典教養主義から研究大学への変貌を遂げてきた。そうした中で、「研究と教育の一体化」が進められるようになった。

こうした流れの中で、著者はアメリカの大学における産学連携の現状について

も言及している。まず、アカデミアと産業界の関係について誤解があると指摘。そのうえで、次のように述べている。

産学連携は大学の知識を民間に売り渡してしまうことであるとか、大学を単なる私企業へ変化させるとか、企業が自らの活動の一部を大学にアウトソーシングしているにすぎないといった見方は、アメリカの知的風土の歴史を見る限り、一面的に過ぎない。むしろ、アメリカにおけるアカデミアと私的部門のかかわりは、かの国の知的風土の長い歴史の中で培われてきた結果であって、第二次世界大戦後の科学至上主義・研究至上主義の象牙の塔の時代の方が、むしろ一時期の出来事に過ぎなかった。近年の変化はその意味で伝統的なアメリカの知識と社会との関係に戻ったのだといってもいい。その根底には、大学こそが新たな知識や技能を作り出せる機関なのだという強い信念がある。

本書のユニークさは、大学研究の商業化や産業化を「悪」と単純に決めつける反市場主義でも、象牙の塔としての大学批判でも捉えきれない、アメリカの大学の歴史に裏打ちされた、知識を創出する拠点としての力強さを評価している点である。

ハーバード大学（17世紀創立）をはじめとする米国（東部）の大学はもともと英国のオックスフォード大学やケンブリッジ大学で当時行われていたような、幅広い知識をカバーする教養主義的な教育を若者に授け、「ジェントルマン」を育成することを目的に創立された。具体的にはギリシャ語やラテン語、哲学、歴史といった古典的な教育を通じた、豊かな人間形成を大学教育の根幹に据える思想が根付いていた。その後、アメリカでは産業の発展に伴い、工学や農学、医学など実学的な学問を教える大学が増えていった。もともと、アメリカでは素朴なプラグマティズムとその結果としての反知性主義が根付いていたとみられる。これに対して日本でアカデミアが産業化に加担することを嫌悪する大学人は依然として多いようだ。こうした中で、アメリカでは素朴な古典教養主義から研究大学への変貌の大きな流れの中で「研究と教育の一体化」が進められてきた。

著者は、大学とは「基礎研究も応用研究もなく、実学と虚学の違いも存在せず、それぞれの研究者が新しい知識の開拓を目指して集まっている場所である」と位置付け、「その内部での相互関係とネットワークによって、どこかで生まれ出る新たな知識技術を拾い上げていく組織、それが現在の社会における大学に求められている姿である」と主張している。

著者は近年の日本における大学改革の動きに批判的である。例えば、「国立大学が進みつつある市場化の方向は、アカデミアが本来なすべき知識の創造の役割を確認することなく、雑巾を絞るように研究資金を削減するという圧力によって、アカデミアと市場との関係を知識の売却の方向へと向かわせつつある」と手厳しい指摘を行い、それは、市場化が多様性と開放性を生み出すことの期待とは全く異なる結果へと進んでいると嘆いてみせた。

本書は、アメリカにおけるアカデミアの歴史を概観することは、今後の日本における大学の在り方を考える上で一助になりうることを期待させる労作だといえよう。

執筆者紹介

村上 直久

情報・経営システム工学専攻准教授（平成27年3月退職）。専門領域は、国際関係論、メディア英語論。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『アカデミック・キャピタリズムを超えて：アメリカの大学と科学研究の現在』
上山隆大著 NTT出版 2010年 3,456円

[ブックガイド目次へ](#)

『ブルーストとイカ：読書は脳をどのように変えるか？』

Maryanne Wolf 著、小松淳子訳／インターシフト

あなたは今、ブックガイドを読んでいる。しかし、あなたが見つめているものは文字という形になったインクの染みである。にも関わらず、あなたは今、ブックガイドを読んでいると思っている。それでは、読むとはどういうことだろうか。さらに読んで理解するとは、脳の中で何がどのようにになっているのだろうか。

これまでの認知心理学研究の知見では、読むということは大方、以下のように説明されている。まず、印字された文字や図表が視覚情報として脳に送られる。印字されたものが文字であることを認識し、文字と文字の切れ目がわかるのは、予め読み手の知識の中に文字についての記憶があるからである。文字を認識したら、文字と文字を組み合わせた単語を認識する必要がある。アルファベット言語では語と語の間にはスペースを置く決まりになっているが、日本語はそのような決まりはないので、どこからどこまでが1単語であるかを見分け、各語の意味を同定する必要がある。1単語を見分けることができるのは、読み手の記憶の中に心内辞書と呼ばれる語彙の知識があるからで、この心内辞書には語の書字、音韻、意味などの情報が入っていて、人は18歳までに母語の単語を約5万語知っていると言われている。次は、単語と単語の関係を知る必要があり、そのためには文法知識が必要であるが、母語においては、人は学齢期に達するまでに統語知識を獲得していると言われている。このようにして、1文の意味が心内に形成されるが、さらには、文と文の関係を知る必要がある。そのためには接続語の働きについての知識が必要であり、もっと進むと、段落と段落という大きな単位を理解する必要がある。

このようにして、読解はミクロな単位からマクロな単位に進んでいき、最後にテキスト全体でどのようなことを述べているかという首尾一貫した意味を形成する。そして、テキスト全体を理解するには、文字、単語などテキスト内の情報だけでなく、テキスト内容に関連するあらゆる情報を長期記憶の中から検索し、テキスト全体の意味を構築する。

このようなプロセスを経て「読む」ということが成立するのだが、この過程に何らかの障害が生ずるために「読む」ということができない人々もいる。そのような障害はディスレクシア、読字障害と呼ばれるが、本書の著者であるウルフは

読字障害の世界的な研究者である。読字障害とは、知的能力に異常がないにもかかわらず、文字の読み書き学習に著しい困難を抱える障害のことである。人の脳には情報を統合する領域があり、そこで文字を自動処理しているが、読字障害の人々はこの文字処理がスムーズに行えず、通常とは違う脳の働きをしているという。読字障害の人々は文章を見た時に、二重に見えたり、鏡に映ったように逆に見えたり、文字が流れているように見えたりするらしい。そのため、読み書きを始める小学校低学年では大変な苦勞を強いられ、大人になっても自分の名前が書けない人もいるという。著者によれば、人間の脳はそもそも「読む」ことに適しているわけではないそうだ。読字専用の遺伝子というものも存在しないので、読字という新しいスキルを習得するためには、脳の中で視覚と言語用に古くからある構造物を接続する必要がある。人類が読むために必要な認知的発達を遂げるためには2千年もの年月がかかっているそうだが、人間の子どもは生後約2000日で同じレベルに到達することを求められているわけだ。著者のこのような説明を読むと、スムーズな文字の読み書きができない読字障害の人々が異常で、読み書きのできる人が正常だという認識は、これまでとやや異なって見えてくる。

著者は、読字学習は幼児期に親の膝に乗せてもらってお話を読んでもらうところから始まると言う。生後5年間でそのような機会がどれほどあったか、なかったかによって、将来の読字能力が決定し、やがて生涯に渡り読書は脳を発達させていくそうである。

第6章の「熟達した読み手の脳」は本書の中で最も興味深い部分である。文字認識から始まり意味のネットワーク化に至るまでの読みの過程がミリ秒単位で説明されており、あたかもコンピュータ・グラフィックスの映像で説明されているような臨場感がある。認知心理学に興味がない人にも、脳の発達という今日的なテーマは興味深いと思う。本書は読字に関する最優良図書としての賞を受賞した名著であり、小松氏による日本語の翻訳も秀逸であるので、お薦めしたい一書である。

執筆者紹介

柴崎 秀子

基盤共通教育部教授。専門領域は、第二言語習得研究。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『プルーストとイカ：読書は脳をどのように変えるのか?』 Maryanne Wolf著 小松淳子訳 インターシフト 2008年 2,592円

[ブックガイド目次へ](#)

『ミッキーはなぜ口笛を吹くのか：アニメーションの表現史』

細馬宏通著／新潮社

40年以上も前のこと。子供の頃、すぐ近所の千里セルシーというところで視聴者参加型の公開番組をやっていた。司会者は横山プリンとキャッシー。「まいど、おいど、プリン、ハゲー」と横山プリンと視聴者が掛け合いながら番組が始まった。その中に、素人が出てきて口パクと振り付けで物真似をする『パクパクコンテスト』というのがあった。山本リンダの『狙いうち』の「ウツララー、ウツララー、ウラウラでー」に合わせて登場する素人、ブルース・リーの「燃えよドラゴン」のテーマ音楽に合わせ、ヌンチャクを振り回しながら口パクで「アチャー」と怪奇音を上げる素人、大阪のハジケ素人達がそこに集まっていた。誇張された口の動き、顔の表情、体の動き。オリジナルの人物の特徴をつかみ、なおかつ誇張することでオリジナルから逸脱、オリジナルに抱く視聴者の固定概念に亀裂を生みだし、笑いの渦に誘ってくれていた。

こんなことをふと思い出したのは、『ミッキーはなぜ口笛を吹くのかアニメーションの表現史』という本を読んでいたときだった。今日では映像と声同期するのは当たり前のことだが、アニメ創成期における、声のない映像から声のある映像に移行する過渡期において、映像と声の同期をどう図るのが解決すべき困難な課題となっていた。その初期の試みの一つが1928年制作の8分に満たないサウンド・カートゥーン (Sound Cartoon)、ミッキーマウスのアニメ『蒸気船ウィリー Steamboat Willie』だった。ネット上で見てみると、ミッキーマウスは息を吸い、口を大きく膨らませ口笛を吹き、他の動物達の口を主に楽器代わりに演奏している。その音の数々とシンクロする体の様々な動きに当時の観客は魅了されたのだろう。

更に秀逸なのがフライシャー兄弟制作による、これも8分に満たないアニメ『ミニニー・ザ・ムーチャー Minnie the Moocher』(1932)だ。これもネット上で見てみると、冒頭実写で演奏をバックに、マイケル・ジャクソンのような脱力した浮遊感のあるスローテンポな掴みどころのないステップを踏む、偉大なジャズシンガー、キャブ・キャロウェイが登場。その後にアニメに切り替わり、親にがみがみ叱られ、家出をする主人公ベティ・ブープのシーンが流れ、そして彼女が迷い込んだ洞窟に手足の長い、腹の出た薄気味悪いセイウチが現れる。そのセイウチ

は冒頭のキャロウェイと全く同じ体の動きをし、ステップを踏みながら踊り、かつ口を動かし歌うのである。この精巧な脱力系の動き、口と声のシンクロ、リップ・シンクを可能にしたのが、フライシャー兄弟が発明した、人の動きを写し取る技術「ロトスコープ」(1915年)と実写から人の口の動きを写し取る技術だったのだ。ここにアメリカのアニメーションにおける口と声の同期へのこだわりの淵源を技術的に辿ることができる。

現代においてもアニメ「アナと雪の女王 Frozen」の主人公エルサが「Let it go ありのままに」を歌っているときの口の動きと声の正確な同期と、そのパワフルな効果が確認できる。口こそが声の源なのであるから、同期を取るのは当然であろう。だがしかし、アメリカのアニメと見比べると、日本のアニメは口と声の同期が実にいい加減だ。息継ぎのタイミングが合っているだけで、発音と口の形の同期は正確には取られていないのである。アニメ大国の日本であるのに、これは非常に驚くべき雑さである。だが、この雑さを我々は当たり前にも思ってきたのではないか。現に何の違和感もなく見ているではないか。だとすると、この口と声の非同期を基本にして、ある箇所だけ同期させれば、ある種の効果が生み出せると考えてもおかしくない。

例えば、大人気アニメ「妖怪ウォッチ」では主人公のケータが妖怪ムリカベに憑りつかれたため、人に何か頼まれても「ムリ～」と言って断ってしまう場面がある。それまで口と声の完全な同期がなかったのが、この時の「ム」と「リ～」は正確に同期し、しかも「ム」は通常よりも唇の丸めが強く、前に唇が異常に突出、更に「リ～」は日本語の舌尖を歯に当てて弾く発音ではなく、英語の舌尖を歯に当てたまま口を大きく横に開いて発音する1である。その時我々は、その口の形に視線が釘付けとなり、その言い方に非常に嫌味な憎たらしい印象を受けてしまうのである。

それでは、日本のアニメのように口と声の非同期を基本だとすると、逆にアメリカのアニメの口の動きとその正確さに違和感を感じたりはしないだろうか。だとすると、この違和感はロボット工学で問題となる例の、人に似せる過程で逆に何か変ではないかと感じる領域、「不気味の谷」と通ずるものがあるのかもしれない。

さて、このように両国のアニメの表現方法に関する違いについて考えてみるのは非常に興味深いことである。この分野に興味を持つ方には実際に手に取って読んでみることをお勧めする。アニメの持つ表現の魅力を技術的、歴史的、文化的に知るのに恰好な道案内になるのではないかと思う。

執筆者紹介

加納 満

基盤共通教育部准教授。専門領域は、言語学・日本語教育。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ミッキーはなぜ口笛を吹くのか：アニメーションの表現史』細馬宏通著 新潮社
(新潮選書) 2013年 1,728円

【DVD】『アナと雪の女王 = Frozen』クリス・バック、ジェニファー・リー監督
ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン 2013年 3,127円

[ブックガイド目次へ](#)

『羊の歌』

加藤周一著／岩波新書

『続 羊の歌』

加藤周一著／岩波新書

この本の著者である加藤周一の名前を聞いたことのある20代の人はいくつかもいない。副題の「わが回想（すなわち著者の自伝）」がなければ、『羊の歌』だけではどんな本なのかさっぱり検討がつかないと思います。私自身もこの本を読むことがなければ、加藤周一という名前すら知らなかった可能性大です。20代半ばに血液学の専門家として原爆投下後の広島で調査にあたった人物が、その後文筆家（あるいは評論家？作家？）に転向したことを不思議に感じました。この本には、著者が幼少期から旧制高校、大学を経て医学に携わる過程で、どのように考えながら過ごして来たかが書かれています。大学入試を控えていた時に読んだ唯一の本で、それ以降は読み返した記憶がありません。今でも印象深く記憶に残っている本の一冊です。岩波新書というと堅苦しいイメージがありますが、20才前後の多感な時期に一読を勧めたい本です。

岩波新書は日中戦争下の1938年に創刊されました。創刊の辞は、道義の精神に則らない日本の行動を憂慮し、批判的精神と良心的行動の欠如を戒めつつ、現代人の現代的教養を刊行の目的とする、と謳っています（岩波新書のあとがきより）。堅苦しく感じる表現ですが、誰もが困難を覚える今日こそ、意識しなければならぬと強く感じます。

2008年に逝去するまで、加藤周一は朝日新聞に「夕陽妄語」（時事評論）を定期的に掲載していました。この題名は、「せきようもうご」と読むことを最近になって知りました。この評論は時機を得たすぐれた内容と感じました。しかし、自分にとっては悪夢の国語試験を思い起こす難解もしくは周りくどい文章表現に思いました。なぜこのような難解な文章で考え（意見）を表現するのか、私の国語力では残念ながらいまだに理解できません。インターネットで調べたところ、「夕陽妄語」は単行本（朝日選書）になっていました。他にも加藤周一が書いた本は書店で良く見かけます。手軽な文庫本では、「日本人とは何か」（講談社学術文庫）が良く購入されているようです。これらの本は、国語力だけでなく志操も高めることができる良書に思います。私自身もいつかは、ぜひ読みたいと考えています。

執筆者紹介

佐藤 一則

物質材料工学専攻教授。専門領域は、材料工学、無機・金属化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『羊の歌』 加藤周一著 岩波書店（岩波新書）1968年 886円

『続 羊の歌』 加藤周一著 岩波書店（岩波新書）1968年 864円

『夕陽妄語 第1 - 3輯』 加藤周一著 朝日新聞社（朝日選書）1997年 品切

『日本人とは何か』 加藤周一著 講談社（講談社学術文庫）1976年 886円

[ブックガイド目次へ](#)

『哲学入門』

ヤスパース著、草薙正夫訳／新潮社

本書はたとえ平易に書かれた入門書であるとはいえ、その中に語られた思想は著者の多年にわたる思索の結晶であり、エッセンスである。その意味で本書は特に読書が自己の生活の内的経験を呼びさましつつ、著者とともに考え、ともに哲学することによって、はじめてその価値を生むものであることを忘れてはならない。 【解説】（本書271ページ）

上記は、紹介させて頂く本書、ヤスパースの『哲学入門』の訳者、草薙正夫先生の解説の抜粋です。著者のカール・ヤスパース（1883年～1969年）は、20世紀ドイツの精神病理学者であり哲学者です。世界が冷戦に向かい、東西の陣営が核武装競争を深刻化させていた時代、原子力の平和的利用と対話・交わりのために行動した政治評論家でもあります。

わたしが本書に最初に出会ったのは、工業高校から高専へ編入した頃でした。何かのついでに立ち寄った書店の特設コーナーに、地元香川県出身の著書や訳書が並べられていました。そこに、草薙正夫先生の訳された、ヤスパースの「哲学入門」を見つけたのです。当時「ふむふむ、若人たるもの哲学のひとつも知らなくては」とか思ったのでしょうか。薄い文庫本であったこともあり、その本を手に取りました。わたしは、よく小説を選ぶときに巻末のあとがきを読みます。この本の巻末には、草薙先生の解説がありました。解説によるとこの本は、バーゼルで市民向けに12回の講義にわけて行われた、ラジオ講演の全訳とありました。（バーゼルはスイスの北西の都市です。ドイツとフランス、そしてスイスの三国の国境に隣接しています。ヤスパースは晩年をここで過ごし、この市民墓地に眠っています）そして、現代の世界哲学界の最高峰を占めた大家の手になる優れた哲学への入門書である、と記されてありました。「この本なら僕にも読めるかも。毎日、ひとつの講義を読めば、二週間足らずで哲学を知ることができる。なにより薄い（1講義20ページくらい）。」このような気持ちで本書の購入を決めました。

科学が自己の領域において、いなみがたく確実で、一般的に承認される
いろいろな知識を獲得しているのに反して、哲学は数千年の間の努力に

もかわらず、かつてこのような知識に到達したことがないのです。(中略) なるほど完全な哲学は科学と結合しており、またそれぞれの時代において到達された最高の状態にあり科学を前提とするものではありませんが、しかし哲学の意味はそれとは異なったある別の根源をもってあります。哲学はあらゆる科学に先立って、人間が目覚める場合に現れるのであります。 【第一講 哲学とは何ぞや】(本書8、9ページ)

一日目にして挫折しました。

。。実は、本書をはじめて本気で読んだのは、最初に購入してから約10年後、大学で情報リテラシー関連の講義を担当させて頂くことになった頃なのです。今は、社会基盤のひとつといわれるインターネット、その原型とされる分散型コンピュータネットワークは、1969年にアメリカ国防総省が出資して構築されたARPANET(アーパネット)が最初とされています。このネットワークは当時の冷戦時代を反映して、核攻撃下でも司令部と前線の情報が分断されない分散型の情報交換網として開発されました。みなさんが日常的にお使いの、Inter(相互)net(ネットワーク)は、最初は戦争のツールとして開発されたのです。このようなことを、講義資料に起こしておりましたとき、あ、1969年って、ヤスパースが亡くなった年と一緒だなーと、なにか不思議な符合のようなものを感じたのです。

核兵器を用いた戦争を想定したツールとして、ネットワークが産声を上げた年。原子力の平和利用を訴え、対話と交わりの重要性を訴えたヤスパースの没年。そして今、インターネットというツールを包括し、技術として、また、概念や知識として発展しつつある、まさに対話と交わり、コミュニケーションのツールを生みうる情報通信技術 ICT (Information and Communication Technology)。ああ、なにか不思議だなー。「哲学は数千年の間の努力にもかかわらず、かつて科学のような知識に到達したことがない」とヤスパースは言っていたけど、コミュニケーションや共感、そしてそのツールの開発にわたしたちは努力し続けているのかな。と、このようなことを考えました(少し脱線ですが、1万5千年前に始まった農耕の始まりにおいて、主食として食することができる麦を人類が得るまでに、

約千年の期間がかかったそうです。なぜ千年もの間、主食となりえない麦を継続して育てたかということ、その目的が、日常的な主食とするためではなく、祭事での特別なご馳走：お酒として用いることであったとの学説があります。この祭事の目的は、他集団との交わりであり、ご馳走である麦は、他集団（他者）と共感するための（分かち合う）ためのツールであったとする一説です：閑話休題）。そして、もう一度、ヤスパースの『哲学入門』を購入、再入門を試みた次第です。

最後に、本書には、ヤスパース自身によって付録、「はじめて哲学を学ぶ人のために」が付けられています。

「哲学すること」において問題となることは、現実の生活において顕（あらわ）になるところの無制約的なもの、本来的なものであります。人間としての人間はすべて哲学するのであります。しかしこの意味を一貫した思想としてとらえることは、けっして手っ取り早くは行われないので。体系的な哲学的思想は研究を必要とします。このような研究は三つの道を自己のうちに含んでいます。

【哲学の研究について】（本書218ページ）

ヤスパースは上記の三つの道を、次のように示しています。1) 科学的研究への参加、2) 先人に関する研究、3) 日常の良心的な生活態度。そして、この三つの道のどれか一つが欠けても、明晰なそして真実の「哲学すること」に到達することはできないと記しています。さらに、特にすべての若い人びとにとって、どのような形態において、これらの道を進んだらよいかということが問題であることを説明しています。

ああ、まさに、わたくしも入門中であります。

執筆者紹介

永森 正仁

情報・経営システム工学専攻助教。専門領域は、情報システム工学、教育工学、福祉工学。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『哲学入門』 ヤスパース著 草薙正夫訳 新潮社（新潮文庫）1954年 529円

[ブックガイド目次へ](#)

『〈問い〉の読書術』

大澤真幸／朝日新書

ブックガイドで「ブックガイド」を紹介するのはいささか気が引けるのだが、この本はなかなか面白かった。これは、著者がウェブ版の書評コーナーに2014年3月までの3年間ほぼ月一回のペースで掲載した文章から25本をまとめたものである。この書評コーナーの特徴は二つあって、一つは新刊書に限らず好きな本を選んでよいこと、もう一つは字数に制限がないこと。だから、本の選択には現代という時代や時々、の社会情勢を強く意識した面があり、また多くの書評で字数を費やして本の内容を紹介している。これが、この本の面白さのもとにある。その上で著者の批評が展開される。それが書評を通じた社会や思想、文化の批評となっているところがよい。著者の大澤氏は社会学者であるとともに、ジャーナリズムで活躍する言論人でもある。氏の本格的な理論的・思想的著作は読むのになかなか骨が折れるのだが、書評という形は氏の著作を支える考え方や発想をわかりやすく読者に示してくれている。それは必ずや読者に現代社会への〈問い〉をもたらしてくれるはずだ。

例をいくつか挙げてみよう。まず書評の中で興味深かった論点（書評対象本の趣旨からは外れることもある）を示し、次に私の感想を（◆）述べる。

「市場はなぜ道徳を締め出すのか マイケル・サンデル『それをお金で買いますかー市場主義の限界』」（「第1章 経済と規範」より）：われわれが望んでいるのは市場経済なのか、市場社会なのか。市場経済とは、生産活動・交換活動を統制する道具である。市場社会というのは、人間の営みのすべての側面に市場価値が浸透している生活様式である。市場社会では、すべての社会関係のひな型が、市場での取引になる。そこで「市場による道徳の締め出し」（サンデル）という現象が拡がるならば、善さを基準とするわれわれの行動は社会から失われてしまうかもしれない。

◆たとえば、臓器移植は「命のリレー」とも呼ばれるように、提供する側にはそれが相手の命を救う善いこととの思いがある。これに対して移植臓器の売買という行為を想定してみたらよい。それが無償であった時と比べて、そこでは善いことを為すという目的（価値）が損なわれていないだろうか。もし私たちがこのよ

うな売買を不純と感じるとしたら、それはいったい何によるのだろうか（本書に大澤氏の考えがある）。同じことはお金を払うセックスにも言える。私たちが大切にしたい、かけがえのないと感じているものがお金を媒介とする取引によって損なわれる。私たちが市場経済をコントロールできず、その拡がりを放置する（あらゆるものを商品化する）ことで現れる社会がどのようなものなのか。それをリアルに想像することができる。

「米史の中から無念の敗者を叩き起こすとは オリバー・ストーン&ピーター・カズニック『オリバー・ストーンが語る もうひとつのアメリカ』（「第2章 世界史と革命」より）：冷戦は防げたかもしれない。だが、現実の歴史では冷戦が形成され、核兵器の開発競争、軍拡競争を招いた。それはつまり歴史の中に敗者がいたということだ。冷戦そのものを消滅させ得たかも知れない人物がいた、そのような試みがあったのだが、その志を果たすことができず敗北した。少なくとも三つの決定的瞬間があった。分岐点の一。1986年10月、ゴルバチョフ書記長（ソ連）とレーガン大統領（米）によるレイキャビク会談。このとき、ゴルバチョフはきわめて大胆な提案をした。一緒になって核兵器を全廃しようという提案である。しかし、レーガンは、当時「スターウォーズ計画」とも呼ばれた「戦略防衛構想（SDI）」に固執して、研究室内であればSDIの実験をしてもよいとまで譲歩したゴルバチョフの提案を拒否した。レーガンのチームにいた国務長官ジョージ・シュルツ、軍備管理担当特別顧問ポール・ニツツェは受け入れることを主張したが、国防次官補リチャード・パールは反対で、レーガンはパールのアドバイスに従ったのである。最後の会議が終わり会場から車へ歩いていくときまでねばるゴルバチョフにレーガンの返事は否定的なものだった。この時、ゴルバチョフは敗北した。分岐点の二は1963年11月22日、ケネディ大統領が暗殺された瞬間。そして、分岐点の三は1944年7月の民主党シカゴ全国大会でヘンリー・ウォレスが副大統領候補の指名を得られなかったとき。ウォレスは20世紀が「アメリカの世紀」になるのだとすれば、それはダメであり、20世紀は「人々の世紀」にならないというような反帝国主義の見解を公言する人物で、国内外で人気があり、

あらゆる植民地の解放を主張していた。第3期ルーズベルト政権で副大統領を務めていた彼は、ルーズベルトが異例の第4期の大統領を目指すことになったとき、副大統領に就任するのがごく自然であった。また、直前の調査でも民主党選挙人候補の65%がウォレスを推していた。ところが、大会では反対派の有力者たちの画策によって指名が阻止され、ウォレスは敗北した。代わって指名されたのがハリー・トーマン。ルーズベルトが大統領就任後わずか80日余で亡くなったため、45年4月に大統領に昇格し、広島、長崎への原爆投下を決定した人物である。さて、われわれにとって大切なことは、このような歴史の敗者の願望を知ることである。それは現実の歴史が歩んだのとは〈別のルート〉を実現していたかもしれない。そのことを知って、もしその願望がわれわれの心の中に残ることがあるとすれば、それを実現するためにわれわれは行動しなくてはならない。

◆私たちが生きている時代や社会は与えられたものとしてある。私たちは好むと好まざるとにかかわらずその中に生まれてきたのである。しかし、その時代や社会は先人たちによってつくられてきたものでもある。そして、歴史はそれがどのようにつくられてきたのかを記述する。そこでは「もし〇〇であったなら、△△だったであろう」という語り方はない。だから、歴史の現実を形作らなかった人物や試みは次第に忘れ去られてゆく。だが、歴史の中には私たちが生きている「今」とは違う現実を実現しようとする人物も試みもそれこそ無数にあったはずである。それが実際に権力を握り、社会を動かし、現実を変えることのできた政治家やその試みであれば、「今」とは違う「別の現実」がもしかしたらほんとうになっていたかもしれないと思わせる。その志を知ることが、私たちにあらためて政治指導者の役割や政治の重要性を教えてくれるだろう。そして、そこに私たちが政治に関わる意味もある。去年12月14日に行われた衆議院選挙の投票率が戦後最低を記録した(52.66%)ことは、この点からも考えられてよい。私たちはどのようにしたら願望を政治に託せるのか、また、歴史を形作っていけるのかと。

『『KY』の呪縛から逃れられるか 山本七平『空気』の研究』(「第3章 現代社会と人間関係」より):「KY=空気を読まない」などという語を生んだ現在の

日本、本書の出版から40年近くを経た日本では、「空気」はますます猛威をふるっている。「空気」は論理的な推論や客観的な認識からは独立に、そして特定の個人の意思に必ずしも直接には規定されることなく醸成される。太平洋戦争末期に、戦艦大和の沖縄への出撃がデータや根拠から明らかに無謀であると判断されたにもかかわらず、「空気」（「一億特攻の魁（さきがけ）になれ！」）に支配された人々によって決定された。その結果、大方の予想通り、大和は沖縄に到着する前に撃沈され、3千人以上の乗組員が海に散った。このように「空気」に従うことはときに恐ろしい結果を生む。この「空気」の解毒剤は「水」である。沸騰する「空気」に「水を差す」、それはあられもない事実をまさに事実として言うことだ。その「水」= 事実には大方の賛同が得られれば、「空気」は萎（しぼ）む。だが、「空気」の支配とは、その事実を知りながら、しかしあえて……という形で人々が「空気」に順応し、それを維持していることで成り立っている。この時人々が「これしかない」という切迫した状態にあるならば、「水を差す」ことは効果を発揮するどころか、むしろ周囲の怒りを買うだけだ。これに対し、人々がそれは他にもあると思うことができれば、事実の指摘は功を奏する。われわれは、自分自身を、自分の周囲を点検してみる必要がある。「それ」は「空気」によって支配されているだけではないかと。

◆今年1月5日の「朝日新聞」に「養老孟司さんと訪ねる理研」という記事が載っていた。理研（理化学研究所）は去年S T A P細胞騒動を引き起こした一方で、9月にiPS細胞を使った世界初の移植手術を成功させてもいる。その訪問を終えた養老氏の感想が、訪問記事とは別にある。見出しは「日本人に合わぬ決定システム」。以下はそこからの引用。「ごく少数の研究者に予算と権限を与え、裁量を持たせる今の」科学研究システムへの批判である。

「リーダーに決定権を委ねる手法は、日本人には向かない面がある。自己という主体が自由意思に基づいて物事を決める、というのは近代欧米の考え方。日本人は思考方法が根本的に違うため、無理が生じる。／日本社会は、その場の状況に応じて自然と物事を決めていく「状況依存」をよしとしてきた。（略）その結果、最近よく聞く「説明責任を果たせない」ということになる。／しかし、説明責任

とはなんだろうか。その時、その場にいる人たちは、総体として最も妥当で合理的な判断に至ろうとする。強く主張する人もいれば、場に流される人もいるだろうが、多くの人が、与えられた状況下で周りの意思や空気をも尊重し、決断したことこそが、自然であり客観的といえるはずだ。」

日本社会（文化）の特質として大澤氏が否定的にとらえる「空気」が、ここではむしろ肯定的に語られているのがわかるだろう。「空気」のとらえ方が違うのである。大澤氏にとって「空気」はあくまで事実からかけ離れた非合理的なものである。これに対し、養老氏は「空気」を尊重してなされた決断こそが客観的で合理的であるとする。何がこの違いをもたらしているのだろうか。この二つはどちらかが正しい見方で、どちらかが正しくない見方なのであろうか。それこそ、私たちはそれぞれの見方の根拠にさかのぼって、事実に基づいた「空気」のとらえ方を、自分自身で考えねばなるまい。

と、まあこの調子でまだいくつも例をあげたいのだが、さすがにこの文章も長くなってきた。このように、読者が考えさせられる書評が揃っているのがこの本のいいところだ。それは、繰り返しになるが、書評という形で今日的なトピックが論じられ、そのようなトピックを引き出すことのできる、すなわち今の私たちが読んで価値のある本が取り上げられていることによる。「第5章 科学の迷宮」では理系の書物が4冊取り上げられている。アマゾンで「書籍リスト一覧」を見ることができる。

最後に本書の「まえがき」より。

「本をたくさん読む必要はない。(略) / しかし、本を深く読む必要はある。深い読み方に値する本は多くないかもしれない。だが、そうした本は、深く読まねばならない。 / 本を深く読むということは、どういうことか。読むことを通じて、あるいは読むことにおいて、世界への〈問い〉が開かれ、思考が触発される、ということである。(略) / (略)〈問い〉は、不意の来訪者のようなもので、最初はこちらをびっくりさせる。だが、その来訪者と対話することは、つまり、〈問い〉が促すままに思考することは、やがて、この上ない愉悦につながる。自分の世界

が広がるのを実感するからである。」

唐突だが、これに村上春樹の次の言葉を並べてみよう。去年11月、ドイツのウェルト文学賞授賞式でのスピーチの一節である。(注)

「世界には多くの種類の壁があります。民族、宗教、不寛容、原理主義、強欲、そして不安といった壁です。私たちは壁というシステムなしには生きられないのでしょうか。小説家にとって壁は突き破らなければならない障害です。例えて言えば、小説を書くときに現実と非現実、意識と無意識を分ける壁を通り抜けるのです。反対側にある世界を見て自分たちの側に戻り、見たものを作品で詳細に描写する。それが、私たち小説家が日々やっている仕事なのです。

フィクションを読んで深く感動し、興奮するとき、その人は作者と一緒に壁を突破したといえます。本を読み終えても、もちろん基本的には読み始めたときと同じ場所にいます。取り巻く現実是不変で、実際の問題は何も解決していません。それでもはっきりとどこかに行って帰って来たように感じます。ほんの短い距離、10センチか20センチであれ、最初の場所とは違う所に来たという感覚になります。そういう感覚を経験することこそが、読書に最も重要で欠かせないことだと考えてきました。(略)

ジョン・レノンがかつて歌ったように、私たち誰もが想像する力を持っています。暴力的でシニカルな現実を前に、それはか弱く、はかない希望に見えるかもしれませんが、でもくじけずに、より良い、より自由な世界についての物語を語り続ける静かで息の長い努力をすること。一人一人の想像する力は、そこから見いだされるのです。」

本を読み終えたときに世界への〈問い〉が開かれ、思考が触発されて自分の世界が広がるということ。物語を読み終えたとき、たとえわずかでも最初の場所とは違う所に来たという感覚になり、より良い、より自由な世界への想像力が刺激されるということ。この二つは重ならないだろうか。

読書というのは不思議な経験である。その喜びをぜひあなたにも。

(注)「村上春樹さんウェルト文学賞受賞記念スピーチの詳細」、「西日本新聞」2014年11月8日、<http://www.nishinippon.co.jp/nnp/culture/article/125884>、(参照2015-01-08)

執筆者紹介

若林 敦

基盤共通教育部准教授。専門領域は、近・現代日本の文学と思想、言語技術教育。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『〈問い〉の読書術』大澤真幸著 朝日新聞出版（朝日新書）2014年 950円

『それをお金で買いますか：市場主義の限界』Michael Sandel著 鬼澤忍訳 早川書房 2012年 2,263円

『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史1－2つの世界大戦と原爆投下』Oliver Stone, Peter Kuznick著 早川書房 2013年 2,160円

『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史2－ケネディと世界存亡の危機』Oliver Stone, Peter Kuznick著 早川書房 2013年 2,160円

『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史3－帝国の緩やかな黄昏』Oliver Stone, Peter Kuznick著 早川書房 2013年 2,376円

『「空気」の研究』山本七平著 文藝春秋（文春文庫）1983年 540円

[ブックガイド目次へ](#)

『構造と力』

浅田彰著／勁草書房

「浅田彰」、ご存じだろうか？ 池上彰は知っていても、本書の著者である浅田彰の名前は知らない人が多いのではないだろうか。おそらくほとんどの人はその名を聞いたこともないだろう。

彼は唯一無比の頭脳の持ち主である。あるいは、人類史上でもまれに見る、高性能かつ高感度な「頭脳－機械」と言ったほうがいいかもしれない。その「頭脳－機械」の該博な知識と深い教養はほとんど無尽蔵で、おまけに正確無比な批評眼まで備わっている。学問領域では、専門の経済学、社会思想史は言うまでもなく、哲学、文学、歴史といった人文学系、社会科学系、そして数学、物理という理学系にも造詣が深く、さらに芸術全般（音楽、映画、建築、絵画など）についても卓越した批評家として縦横無尽に活躍している。また小説家から長野県知事に転身した田中康夫との対談シリーズ（『憂国呆談』 幻冬舎、1999年、など）では、アカデミズムの閉域を超え、国内・国際情勢あるいは各種マスメディアの情報を迅速かつ的確に分析し、現職の知事だった田中と対等以上の議論を応酬し、はてはサブカルチャー全般の超マイナーな情報を開陳したりと「頭脳－機械」として無敵の性能ぶりを発揮している。

彼の能力を物語る逸話は数え切れない。かつての東大総長で、その界限では「天皇」と呼ばれているとも言われる知的な巨人、蓮實重彦（フランス文学者（というより、世界的な映画批評家として有名）が、かつて翻訳した『マゾッホとサド』（ジル・ドゥルーズ著、晶文社、1973年）について、当時高校生だった浅田少年は300箇所にも及ぶ翻訳の誤りを指摘する注釈の文書をしたため蓮實宛てに送りつけたとか（これ、伝聞です）。

また、雑誌『InterCommunication』（No.33、NTT出版、2000年）の「21世紀に伝えたい本」と題された対談で、「世界のサカモト」こと坂本龍一と編集者の後藤繁雄は、浅田彰をあらゆる情報、書籍の究極のデータベースにして目利きと評して次のように語り合っている。

坂本—— [...] 浅田彰さんは、究極の編集者だよな。

後藤—— そう、必要な本はもってるし、引用部分はバッチリ押さえられるし、

相談すれば、すぐコピーが送られてくる。

坂本——ポイントに線まで引いてある（笑）。検索できて、目利きときてるし、

後藤——あっ、そうか。21世紀には浅田彰を残せばいいってことですか。

坂本——あー、そうだ!! 推薦図書、浅田彰、「一家に一台、浅田彰」。

（前掲雑誌、p. 17）

本書『構造と力』は、そんな彼が弱冠26歳にして上梓した衝撃（笑劇？）のデビュー作である。しかし、これほど高性能な「頭脳－機械」が書いた本だからといって、皆さんは尻込みするには及ばない。自身も述べているように、本書は「明快に、それこそチャート式参考書のように明快に」「軽くスピーディー」（p. 239）に書かれた、スバラシイ現代思想の見取り図だからである。

このブックガイド執筆にあたって、愛読してきた本書を改めて読み直してみたが、32年も前に出版されたにもかかわらず、そこには、まったく色褪せないどころか、混迷する現代の世界においてその洞察の正しさが確証されてきていると思われる、高密度に圧縮された精確無比で付加価値の高い情報が、どこまでも明快に、そして学術論文のうんざりする退屈さとは無縁の軽やかさで、ときに哄笑を誘いつつ展開されている。

本書全体を通底する論理はこう整理できるだろう。一方に、大学という「象牙の塔」に閉じこもって眼を血走らせながら専門の学問に「真面目に」打ち込むという態度を、他方に、日常的な常識から乖離し、タコ壺化してしまった学問の「ばかばかしさ」を外部から斜に構えて否定する「アイロニカル」な態度を置いてみる。このとき、この二つの陣営のいずれかに荷担するのではなく、またこの二つを共に全否定するのではなく、そのどちらの態度に対しても「ノリつつシラケ」「シラケつつノル」こと。あるいは、前者の観点から「対象と深くかわり全面的に没入すると同時に」、後者の観点から「対象を容赦なく突き放し切って捨てる」（p. 6）という終わりなき知性の澁刺な活動を実践すること。

「『明るい豊かな未来』を築くためにひたすら『真理探求の道』に励んでみたり、

企業社会のモラルに自己を同一化させて「奮励努力」してみたり、あるいはまた「革命の大義」とやらに目覚めて「盲目なる大衆」を領導せんとしてみたりするよりは、シラケることによってそうした既成の文脈一切から身を引き離し、一度すべてを相対化してみる方がずっといい。(…) その上であえて言うのだが、ここで「評論家」になってしまうというのはいただけない。(…) 自らは安全な「大所高所」に身を置いて、酒の肴に下界の事どもをあげつらうという態度には、知のダイナミズムなど求むべくもない。要は、自ら「濁れる世」の只中をうろつき、危険に身をさらしつつ、しかも、批判的な姿勢を崩さぬことである。」(pp. 5 - 6)

本書を読み直して驚いたことがもう一つある。それは、これが若き日の浅田が、過去の自分自身に対する反省を込めて(!)これから大学に入学する新入生(今だったら、皆さんのことですね)のために書いた本だということだ。

ここまでこの文章を「シラケつつ」読んできて、でもちょっと「ノれそう」だなあ、と感じた人、早速、図書館で手にとってご一読を。

執筆者紹介

重田 謙

アドバンストコース特任准教授。専門領域は、現代の言語・分析哲学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『構造と力』 浅田彰著 勁草書房 1983年 2,376円

『憂国呆談』 浅田彰、田中康夫著 幻冬舎 1999年 1,944円

『マゾッホとサド』 Gilles Deleuze著 蓮實重彦訳 晶文社 (晶文選書) 1973年 品切

【雑誌】『InterCommunication No.33』 NTT出版 2000年 品切

ブックガイド目次へ

『新 大学教授になる方法』

鷲田小彌太著／ダイヤモンド社

突然ですが皆さんは大学教員の日常生活をご存知ですか。高校までと違ってホームルームなんてものもないし講義くらいしか接点がないから、それ以外の時間に何をやっているかなんて知らない人がほとんどじゃないかと思います。学生時代から多少なりとも大学教員の仕事に興味のあった私でさえそうでした。おまけに教員に対して世間知らずの変わり者なんていうステレオタイプの偏見を抱いていましたから研究室に初めて質問に行ったときは突然発狂されたりしないかとか、そりゃあもう緊張したものです。

本書はそんな謎に包まれた大学教員という職業になる方法について裏話をまじえながらユーモアたっぷりに紹介しています。大学教員を目指しているとか興味のある人はハウツー本として、そんなつもりはないという人も大学教員の日常生活の裏話を読んで十分に楽しむことができると思いますのでお勧めです。

まずは大学教員を目指す人向けのハウツー本としての紹介文を書きましょう。ハウツー本という眉をひそめる方もいるかもしれませんが、本書は大学教員に簡単になるための魔法なんてものを紹介しているわけではなく、研究者としての心構えや気をつけるべきことを丁寧に書いてくれています。タイトルからイメージする以上に真面目な本です。例を挙げると「頭の休息には専門以外の本を読む」や「研究活動のストレス解消は短時間で」などは参考になりましたね。因みに著者は短時間のストレス解消にテレビと酒を用いているようですがこれは私も真似させてもらっています（笑）。ところで本書でも触れていますが、大学に職を得られるのは一般的に30歳前後です。就職活動は1・2年では終わらないケースが多いですから精神的につらくなることもあるでしょう。そんなときこの本を読むと大学に勤めている未来の自分をイメージすることが出来て、安心しましたね。大学教員を目指す方にはそういう精神安定剤としての使い方もお勧めです。

最後に、冒頭でも書きましたが本書のもう一つの魅力は「大学教員の日常生活の裏話」です。むしろこちらがメインと言っても過言ではないかも。もちろん教員は千差万別ですから書いてある全てが当てはまるわけではないですが、教員になった今読んでみても「あるある！」と思う点がしばしばありますから結構当たっていると思います。とかく謎が多くてとっつきにくい人と思われがちな我々の職

業ですが、本書を読んで教員を身近に感じてもらえば質問もしやすくなるかな、なんてことも期待しています。興味を持ったらは是非読んでみてください。

執筆者紹介

山本謙一郎

基盤共通教育部講師。専門領域は、力学系。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『新 大学教授になる方法』 鷺田小彌太著 ダイヤモンド社 2001年 1,944円

[ブックガイド目次へ](#)

『夜と霧』

ヴィクトール・E・フランク著、池田香代子訳／みすず書房

2012年8月NHKテレビ「100分de名著」において、フランクの『夜と霧』が取り上げられた。ウィーンの子科医であったフランク（Viktor Emil Frankl、1905-1997）は、ユダヤ人というだけの理由でナチス・ドイツによって1942年から約三年の間、アウシュビッツなど3カ所の強制収容所に送られ、自らも生き地獄を体験すると同時に、極限状態におかれた人間達を目の当たりにし、父母・妻はじめ妹以外の全家族を失った。その悲劇を風化させてはならないとの使命感に燃えたフランクは、終戦後わずか9日間で『夜と霧』を書き上げた。この本は1947年の発刊以来、世界中で読み継がれ、我国でも1956年に初版が発行された。特に米国では1991年に「私の人生に最も影響を与えた本」のベスト10に入った。この本の中でフランクは、堪え難い状況下の人間は無感動・無感覚・無関心によって「心の装甲」をまとい「文化的休眠」に入っていく事を観察したのみならず、「希望」を持っているかどうかが生死を分けた事も見いだした。フランク自身も書きかけの論文「医師による魂の癒し」を出版するまでは死ねないと願っていたことだけが、自殺によってこの苦しい非人間的な状況から逃れる事を抑止していた。さらに繊細な性質の人の方がしばしば頑丈な身体の人よりも収容所生活をよりよく耐えた事をも発見した。そして彼は自らが若干21歳の時に提唱した「ロゴセラピー」（意味による癒し）のいう人生の三つの価値、つまり「創造価値」「体験価値」「態度価値」の理論を、自分自身で実践する機会が与えられたと考えた。またフランクは収容所の中で、自殺志願の同僚達から「もう人生からは何も期待できない」と相談された時、「人生から何が期待できるかではなく、むしろ人生が何を我々から期待しているかが大事である」として価値の転換を説いた。それは人間の欲望には際限がないため、「もっともっと」と何かを求め続けてしまい、その結果、人は絶えざる欲求不満の状態に追い込まれてしまう。これに対して「人間は生きる意味を求めて人生に問いを發つるのではなく、人生からの問いに答えなければならない。そしてその答えは、人生からの具体的な問いかけに対する具体的な答えでなければならない」と説明した。そしてその答えは人によって異なり、著作や子育てなど自らの仕事を通して実現される「創造価値」、自然や人とのふれあいの中でもたらされる「体験価値」、自らも飢えているのに餓死寸前の同僚にパンを

与えるような「天使の行為」を選択する自由の「態度価値」に分けられ、その三つの価値のいずれかによって人生をいつでも有意義なものにする事ができると主張した。

フランクル自身も、他の人々が人生の意味を見いだすことを援助することが自分自身の仕事であると信じる「創造価値」、過酷な早朝労働の最中に妻の眼差しを思い浮かべて「愛による愛の中の被造物の救い」を感じた「体験価値」、そして過酷な労働に疲れ果て飢え病に冒されていても苦難を静かに引き受け跪いて祈る「態度価値」を実践して、苦しい収容所生活を生き残ったのであった。戦後、米国に渡り死刑囚刑務所を訪問して講演を続けたフランクルは言う、「あなたがどれほど人生に絶望しても、人生の方があなたに絶望する事はない。」

二万人近い犠牲者を産み、被災後一年半を経ても未だ34万人の避難者の苦しみと荒れ果てた故郷を残している東日本大震災からの復興活動に際して、生き残った我々はもう一度「人生は我々に何を求めているか？」と各自に問い直してみる必要があるのではないであろうか。

参考文献

1. NHKテレビテキスト「100分 de 名著」フランクル『夜と霧』2013年3月
2. Viktor E. Frankl (1905~1997) : “Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager”, 1947

執筆者紹介

福本 一郎

生物機能工学専攻教授（平成27年3月退職）。専門領域は、医用生体工学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『夜と霧 新版』 Viktor E. Frankl著 池田香代子訳 みすず書房 2002年 1,620円

『NHKテレビテキスト「100分 de 名著」－フランクル『夜と霧』』 諸富祥彦著
NHK出版 2012年 566円

『Trotzdem Ja zum Leben sagen : ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager』 Viktor E. Frankl著 Kösel 2012年 2,447円

[ブックガイド目次へ](#)

DVD『ハンナ・アーレント』

マルガレーテ・フォン・トロット監督／ボニーキャニオン

本作は、昨年（2014年）の「大ヒット」映画で、評判は聞いていた。そして、これを見た人は何がしかの発言をしたくなるようで、ネット上には映画評があふれている。原稿一本書くぐらい、これをテケトーにコピペすればしまいじゃ、という下心からDVDを見た。

アドルフ・アイヒマンはナチ政権下で、ユダヤ人を強制収容所に送る重要ポストにあり、ドイツの敗戦後逃走したが捉えられ、イスラエルで裁かれる。有名な「アイヒマン裁判」である。

ドイツでハイデガーに師事し、ナチの台頭後アメリカに亡命した著名な哲学者ハンナ・アーレントはこの裁判を傍聴し、「ニュー Yorker」誌にレポートを連載する。レポートの内容は世間の大変な不評を買い、激しい（今どきの言葉で言えば）バッシングに合う。映画は、この裁判を巡って、自らの信念に忠実であろうとするハンナの直面する困難と苦悩を描いたものだ。

派手なアクション・シーンや、はらはらドキドキのサスペンスこそ無いが、映画としての見どころが沢山ある。まず、ハンナがくゆらす煙草のけむり。深い思索に沈み込み、眠るでもなく起きるでもなく、体を横たえ、タバコの灰は落ちるような落ちないような…。また、度々催される家族のパーティーでの口論のシーン。これは口論というより親しい友人とのかなり緊張感のある恒例の議論らしい。当時の知識人の集まりとはこういうものか。そして繰り返される夫婦の愛の会話の交歓。結婚許可証にユーモアは必修科目なのだろう。活動家だった夫は、今やハンナを守る砦である。脳溢血で倒れるアクセル・ミルベルクの演技は、実際に経験した人だとしか思えない程リアルなものだ。時折挿入されるマンハッタンの美しい夜景。そして、とりわけ惹かれたのは、ハンナがイスラエルの田舎道をバスで移動するシーンである。揺られながら窓から外を眺める時の表情は物憂げでありながら決意を秘めている。ハンナを演じるバルバラ・スコヴァは、まるでハンナ本人のように見える。残念ながら、私はハンナに会ったことは無いのだが。

さて、すっとばけるのはこのぐらいにして、表題の「悪の凡庸さ」について説明しよう。裁判において人々を困惑させたのは、アイヒマンが全く罪を自覚せず、自分はただの役人であり自発的な行為は何一つ無い、と主張したことである。ほ

とんどの人は、これは醜い言い逃れであり、彼こそ真の悪魔であると断じた。だがハンナはレポートで、彼は国家の忠実な下僕として命令を遂行しただけであり、罪の意識が無いのは本当だとした。彼はただの役人にして、殺人工場への運搬人あるいは技師にすぎない。普通の人が自分の行為の結果について思考を停止し、無自覚に任務を遂行することこそ悪の本質であり、その向こうに人間の皮を被った異形のモンスターが居るわけでない。世界最大の悪は、ごく平凡な人間が動機も信念も邪心も悪魔的な意図も無しに行うものであった。ハンナは、それを「悪の凡庸さ」と呼んだ。

これは、多くの人びとの反発を招いた。家族や友人を皆殺しにされ、かろうじて収容所から逃げ延びた経験をもつ者達が、この考えを受け入れられないのは当然だろう。(ハンナはそう主張しているのではないが) アイヒマンに自らの行為の責任が無いとすれば、一体地球上の誰に責任があるのか。

また、ハンナは、ユダヤ人グループのリーダーが、結果として、多くの同胞の犠牲に関わったことに言及した(それが彼女の理論の肝ではあった)。特にこのことが同胞達の逆鱗に触れ、共に戦い心を許しあった友人たちも、ことごとく去って行く。ついには大学の職を辞するよう勧告されるが、激しく反発する。

罪を憎んで人を憎まず、の伝統がある日本人にとって、ハンナの考え方はむしろ理解できるものであるかもしれない。目前の罪を棚上げにし、罪の構造を理詰めで(煙草のけむりをくゆらせながら)考え抜く態度は、主知主義と捉えられなくもない。だが、ハンナは、自分の存在をかけて、この未曾有の災厄の本質を次世代に伝えようとした。映画の最後でハンナが大学で行う講義では、危機的な状況においても考えぬくことの大切さ、それが破滅を回避する唯一の手段であることを説き、多くの学生が拍手で応えた。だが、教室に残った旧友からは、ハンナに非常に厳しい言葉と共に絶縁が静かに告げられる。ハンナは、自分は今とても疲れている、と繰り返すのが精一杯だった。

それにしても、このアーレント教授の、学生にもものを伝えようという気迫は圧倒的である。伝えたいことがある、ということ以上に伝えることを可能にするものはない。コピペがどうしたとか適当なことを言ってる場合ではないのだった。

執筆者紹介

原 信一郎

基盤共通教育部教授。専門領域は、代数的位相幾何学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

【DVD】『ハンナ・アーレント』 マルガレーテ・フォン・トロッタ監督 ポニー
キャニオン 2012年 4,026円

[ブックガイド目次へ](#)

『人の砂漠』

沢木耕太郎著／新潮社

本書は沢木耕太郎がまだ二十代の頃に著したルポルタージュであり、八編が収められている。それぞれの取材対象は以下の通り。

- ・栄養失調で亡くなった“ひとり暮らし”のおばあさん（「おばあさんが死んだ」）
- ・障がいを抱え他に行く場所のない元娼婦たちのコミュニケーションでの生活（「捨てられた女たちのユートピア」）
- ・本土とは違う論理と時間が流れる南の辺境、与那国島に暮らす人々（「国境の視えない共和国」）
- ・北海道の北端のロシアとの境界で拿捕覚悟の漁を続ける人々（「ロシアを望む岬」）
- ・鉄屑の仕切り屋とそれをめぐる人々と屑の構造（「屑の世界」）
- ・先物相場師たちの栄光と挫折（「鼠たちの祭り」）
- ・“不敬行為”で人生が大きく変わってしまった人々（「不敬列伝」）
- ・街ぐるみ相手に孤独な詐欺をはたらいた女性（「鏡の調書」）

いずれも、社会の辺境でもがき、あるいはいきいきと生活する人々に焦点を当て、その世界に自らを投じなければ得られないような体験を記して、大変読み応えがある。しかし、著者と対象者の間には一定の距離感があり、決して熱くならず対象者と並走して行く、独特のスタイルがある。

最初の「おばあさんが死んだ」で始まるルポルタージュは、一九七六年の冬、七十二歳で栄養失調で亡くなった女性の人生を追ったものだ。

女性のうめき声を近所の人が聞き、病院に運ばれるもまもなく亡くなった。最後の言葉は「おかあちゃん」であったと言う。残された著しく汚い部屋には、不可解な英語交じりの十冊のノートと、ミイラ化した兄の死体があった。女性は、亡くなった兄と一年半余り暮らしていた。

ノートに書かれている言葉は、なにかの恐ろしい呪文のようで、和製ホラー映画に挿入される一節のようである。

「四八・六・六（水）STOP STOP EXHAUST 永久断絶 総全面拒否 STRAIGHT
ニ自我道ヲ行ク」

「四九・六・二九（土）ETERNITY」

「四九・七・四（木）細胞ノ死滅 POISON化ハ永年蓄積遂ニ癌化シ 諸症状ヲ起シ生命ヲ終ル」

なぜ餓死に至るまで食事を取らなかったか。なぜ病院に行くことを拒絶し、病院では医師に対して激しい悪態をつき続けたのか。他に身寄りではなかったのか。日記の言葉の意味は何か。

著者は、謎を解いて行くというより、ただおばあさんを理解したい衝動にかられ、引っ張れば途切れてしまいそうな細い糸をたどって、暗く深い闇に分け入る。

彼女は歯科医であって、それなりに学問があった。その技術を持って各地を転々とするが、生活は裕福なものではなく、隣人の尊敬を集めるものでもなかった。最後に職を離れてからは、人付き合いもせず、生活保護も拒否し、出納帳でもある例のノートに克明に出費のみを記して暮らしていた。

彼女についての情報の断片を集めても像を結ばない。その事がかえってこの女性の人生を象徴しているかのようである。兄の方は何を思って暮らしていただろう。兄が亡くなって、妹がそれを隠していた理由は？遺体の傍らで寝起きしていた形跡がある。ノートの最後の記述は、

「四九・一〇・二（水） 祭花キフ 五〇〇円」

であった。「美しかった」兄とは、誕生日が七ヶ月しか変わらないことが後でわかる。

そもそも、当時まだ二十代の著者は、正気とは思えないこの人物の何にこれ程惹きつけられたのか。どうしてこの人の「死に躓いた」のだろう。この「ブックガイド」を手にする学生さんたちも二十歳前後だけど、こんなおばあさんに興味持てるかな？昨今では、グローバル化した労働市場で勝ち抜くことができる人物が強く求められているが、この物語の中心は、それとは程遠い、身の回りあるいは自分のみにしか興味を寄せない、貧困の只中にいた人物であり、およそ私達との接点が無いようにも思える。

しかし、「彼女は私であったかもしれない」あるいは「いつか彼女は私になるかもしれない」と想像する。彼女の偏屈さは私の偏屈さ。彼女の孤独は私の孤独。この事件は、ただの猟奇的な事件ではなく、普遍性のある、人の生に繋がっている気がする。書名『人の砂漠』というのは、大体そういう意味かとも思う。

執筆者紹介

原 信一郎

基盤共通教育部教授。専門領域は、代数的位相幾何学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『人の砂漠』 沢木耕太郎著 新潮社（新潮文庫）1980年 810円

[ブックガイド目次へ](#)

『経済のこと、よくわからないまま社会人になってしまった人へ』

池上彰著／海竜社

『図解 自分の気持ちをきちんと伝える技術』

平木典子著／PHP 研究所

『ゆとり世代を即戦力にする 50 の方法』

井上健一郎著／高橋書店

このブックガイドをお読みになっている皆様に、お勧め致します。
「OASIS (オアシス) 文庫に来ませんか。」

OASIS文庫は、本学の総合研究棟1階のエレベーター前にある「学生支援センター」の中にあります。白い4段の書架2台に入っている分の本だけの、ささやかな文庫のことです。大学関係者でしたら、どなたにでもお貸しします。数えてみたら、現在貸し出されている本を除いて、184冊の本がありました。

文庫の持ち主は、私、大河内です。昨年6月～12月までは、「大河内文庫」と呼んでいました。しかし、そもそも「大河内」という苗字がものものしいイメージなので、何だか和緩じの本が横積みになっている感じがするでしょう。そこで、この2月からは、「OASIS文庫」と呼ぶことにしました。それには、次のような経緯があります。

実はこの1月、ある保護者の方が、

「先生のいらっしゃる場所というのは、つまり、大学においてOASIS (オアシス) のような役割をしているということですね。」

と、おっしゃったのです。私は、飛びつくように答えました。

「そうです。おっしゃるとおりです。」

私は2014年4月、学長特命アドバイザーとして本学に着任し、「学生支援センター」に置かれている「学生なんでも相談窓口」の相談員として、仕事を始めました。センターにはカウンターがあって、内側に立ってみると、カフェの女主人に変身した気がして嬉しかったものです。そこで早速、学生支援課にお願いして、湯沸しケトルや各種のお茶を用意していただきました。

一方、私の前職は高専教授（言語系国語）でしたので、担任をしたクラスに置いていた本も多数持っていました。それらを再び学生に提供しようと考えて、書架を1台設置していただきました。これで、今日流行のブックカフェが出来ました。そして、このスペースを、私はOASIS（オアシス）と名付けたいと思っていたのです。

五月病とは、よく言ったものです。ゴールデンウィークが終わった頃から、相談に訪れる学生が多くなりました。中には「生き方が見つからない」と悩む学生もいて、相談員の私の経験だけでは補いきれない、と思いました。現代は、価値観も生き方も多様化している時代です。多様な価値観や生き方を幅広く知るには読書が一番、と私は考えます。そこで、売店の文信堂書店を始め、長岡や新潟の書店めぐりをして、いろいろな本を買集めました。新聞記事から見つけた興味ある本の書名を打ち込んで、アマゾンで購入した本もあります。2台目の書架を、揃えていただきました。センターのスペースから考えて、それ以上は、書架を置くことができません。私は、この2台の書架の本を「大河内文庫」と仮に名付けて、貸し出しを始めました。

OASIS文庫から貸し出された本の一覧表

貸出月	書名	著者名	備考
2014年 6月	経済のこと、よくわからないまま社会人になってしまった人へ	池上 彰	
6月	図解 自分の気持ちをきちんと伝える技術	平木 典子	
6月	10倍好かれる話し方	青空 球一	
6月	脳からストレスを消す技術	有田 秀穂	
6月	「自分の木」の下で	大江健三郎	図書館にあり
6月	「新しい人」の方へ	大江健三郎	
6月	一冊の手帳で夢は必ず叶う	熊谷 正寿	
6月	社会人学入門	浅野 智彦	
6月	脱コンビニ食	山田 博士	
6月	ゆとり世代を即戦力にする50の方法	井上健一郎	

6月	偏愛マップ	斎藤 孝	
6月	経済のこと、よくわからないまま社会人になってしまった人へ	池上 彰	*
6月	伝える力	池上 彰	図書館にあり
7月	10倍好かれる話し方	青空 球一	*
7月	恋することと愛すること	遠藤 周作	
7月	研究者という職業	林 周二	図書館にあり
7月	みんなのNPO	S・バックリン& アソシエイツ、 枝廣 淳子 (訳)	
8月	20代から身につけたいドラッカーの思考法	藤屋 伸二	
8月	書いて稼ぐ	鳩よ!編集部	
9月	東大名物教授がゼミで教えている人生で大切なこと	伊藤 元重	
9月	貢献する気持ち	滝 久雄	
9月	遙けき国 ガーナで	黒羽根洋司	
9月	図解 自分の気持ちをきちんと伝える技術	平木 典子	*
9月	大学4年間でやっておくべきこと	森川 友義	
9月	20代にしておきたい17のこと	本田 健	
10月	ゆとり世代を即戦力にする50の方法	井上健一郎	*
10月	すっきり!からだにいい習慣	石川 恭三 (監修)	
11月	LUNCH PASSPORT		*
11月	言いたいことが言えない人のための本	畔柳 修	
2015年 1月	LUNCH PASSPORT		
1月	アサーティブ 自己主張の技術	大串亜由美	
1月	頭がいい人の聞く技術	樋口 裕一	
1月	アサーション 入門	平木 典子	図書館にあり
1月	7つの心のブレーキを外せばうまくいく「すぐやる」習慣	古川 武士	
1月	伝える力	池上 彰	*、図書館にあり

一覧表をご覧ください。文庫開設の6月は、貸出数が最も多かったです。相談希望者の来ないときには、お茶を飲み、落ち着いて読書をしていく人もありました。まさに、ブックカフェです！また、意識したわけではないのですが、図書館の蔵書と重なっていないのです。文系の私の選書の特徴が出たことは、良かったと思いました。9月、そして2015年1月は相談希望者が多い月でした。来室者数に比例して貸出数が増えているのは、意図に添った現象となっています。

一覧表のうち、学生に2回以上貸出された本は、以下の6冊です。(備考欄に*印をつけたもの)

1. 『経済のこと、よくわからないまま社会人になってしまった人へ』 池上彰
2. 『図解 自分の気持ちをきちんと伝える技術』 平木典子
3. 『ゆとり世代を即戦力にする50の方法』 井上健一郎
4. 『伝える力』 池上彰
5. 『10倍好かれる話し方』 青空球一
6. 『LUNCH PASSPORT』

ある学生が、「(OASIS文庫のなかで) 人気のあるものは、実用書・自己啓発書ですね。こういうの、図書館にあまりないので。」と言っていました。

さて、ここでは、太字で記した1～3の3冊について少し書きます。

『**経済のこと、よくわからないまま社会人になってしまった人へ**』 池上彰

この本は、2004年・海竜社刊ですから、10年以上前の本と言うことになりますが、古びていないのです。それは、著者が「お金と賢く付き合おう」と読者に呼びかけて、「買う」「投資する」「借りる」「世の中をつかむ」「備える」「納める」という6項目を立てて述べているからです。池上の解説は、「すつんと入る」とよく言われますが、「丁寧で、わかりやすい」ということです。

『**図解 自分の気持ちをきちんと伝える技術**』 平木典子

2007年・PHP研究所刊の本です。私はこの本の購入当時、担任をしており、個人的にはアサーションスキルについて集中的に学んでいた折でしたので、同一の

テーマの本を10冊近く持っています。「アサーション」とは、互いの違いを認め、気持ちの良いコミュニケーションを交わすための考え方です。良好な人間関係を作るのに、大切なスキルです。

人との付き合い方に悩む学生に、私はこの本を先ず薦めます。図解が楽しく、深刻になる傾きから救われるように思えるからです。大人の私であっても、他人の不条理な「怒り」などに触れる場面はあり、そんな時に、あの「図解」を思い浮かべて、冷静さを保つことがあるからです。

『ゆとり世代を即戦力にする50の方法』井上健一郎

これは、新しい本です。2013年・高橋書店刊です。実はこの本の青色の帯には、「できる社員に育てる！！」というキャッチフレーズが書かれています。つまり、社員教育をする側に向けて書かれた本なのです。

私は、始めにこの本を就職で悩む学生に読ませて、彼に言いました。

「自分が、どのように上司から見られているかわかったでしょう。弱点を知って補ってみては、どう。」

また、同じ本をある職員の方にも読んでいただきました。彼は、言われました。

「彼らが、どれくらいわからないのかが、よくわかりました。」

というわけで、一石二鳥？の本となりました。

いかがですか。軽い話ばかりになりましたが、哲学書や、私の研究分野（芸能史・公益学）の本、趣味の俳句の本もあります。どうぞ、お越し下さい。

執筆者紹介

大河内邦子

学長特命アドバイザー。学生支援センター：学生なんでも相談窓口相談員。鶴岡高専名誉教授。専門領域は、国文学、日本芸能史、公益学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『経済のこと、よくわからないまま社会人になってしまった人へ』池上彰著 海竜社 2004年 品切

『図解 自分の気持ちをきちんと伝える技術』平木典子著 PHP研究所 2007年 1,296円

『ゆとり世代を即戦力にする50の方法』井上健一郎著 高橋書店 2013年 1,188円

『伝える力：「話す」「書く」「聞く」能力が仕事を変える！』池上彰著 PHP研究所（PHPビジネス新書）2007年 864円

『10倍好かれる話し方』青空球一著 彩図社 2013年 1,296円

『LUNCH PASSPORT』ハイングラフィック

ブックガイド目次へ

『ローマ人の物語』

塩野七生著／新潮社

『コンスタンティノーブルの陥落』

塩野七生著／新潮社

『竜馬がゆく』

司馬遼太郎著／文藝春秋

『坂の上の雲』

司馬遼太郎著／文藝春秋

別に就職活動のテクニックのノウハウ本の事では無い（そういう本も役には立つが、付け焼き刃だと採用担当者にウンザリされる）。採用試験が進んで面接の段階になると、「大学時代に読んで印象に残った本は何ですか」という質問を受けることは大いに想定される。そのときの回答として：

「本はあまり読みませんでした」（……論外）

「太宰治の走れメロスです」（中学生かよ）

「僕は友達が少ない、です。」（ここでライトノベルを出すか）

「クラム・ハモンド・ヘンドリクソンの有機化学です。」（ウヘッ、マジか、こいつ○○○○か）

などでは、採用担当者に良い印象は与えられないだろう。やはり採用担当者に『ほう、やるな』と思わせるような本を読んでおきたい。

採用担当者をびびらせる5399ページ耐久読書

『ローマ人の物語』

ハードカバーで15巻、文庫本で43巻。読み切っていれば自慢して良い。塩野七生氏は中高年（会社の重役クラスの年齢）に最も受けが良い作家の一人なので冒頭のような質問をする採用担当者ならばこの作品の名前を知ってはいると思われるが、読み切った人間は少ないかもしれない。ちなみに筆者の研究室の学生はこれまでに3名が読了している。

文字通り「ローマ人」の物語でローマ建国から、王政時代、共和政時代、帝政時代、と続き、キリスト教の国教化や東西分裂、西ローマ帝国の消滅は駆け足で通り過ぎ、6世紀の東ローマ皇帝ユスチニアヌスによるローマ征服（奪還？）をもって物語が終わる。当然、ポエニ戦争、ユリウス・カエサル（シーザー）、アントニウスと

クレオパトラ、アウグストゥス、五賢帝といった世界史の教科書で見た事項や人物について、たっぷりとページを使って記述されている。その他、膨大な数の人間が登場し、とても名前が覚えきれない、と思うかもしれないが、大丈夫。登場する頻度と重要性には強い相関があるので、重要人物であればイヤでも頭に残る。

冒頭の質問に対しこの本の名前を挙げると、次に来る質問は当然「どういう所が印象的でしたか（≒本当に読んだのか?）」となる。数え切れないほど有るが、筆者ならば以下の四点あたりを答えるだろう：

- 1) 第二次ポエニ戦争でカルタゴの将軍ハンニバルが戦象部隊を率いてアルプス越えを敢行し、イタリア半島に侵入してローマの軍団を撃破しながらも、本国に呼び戻されてザマの戦いでローマのスキピオ・アフリカヌスに敗れるまでが非常にドラマチックでした。
- 2) ユリウス・カエサルの人、政治家そして人間としてのキャラクターが非常に魅力的で、まさに英雄というのはこういう人間のことを謂うのだと思いました（著者の塩野七生氏が歴史上最も愛している人物なのだから、そのように記述されるのも致し方ないが）。
- 3) アウグストゥスの所を読んで、カエサルと比べると地味ながらも、大国を安定的に統治するのに必要な政治家の資質とはなんと高度で複雑なものか、と戦慄しました。そして長寿もまた重要な資質です。
- 4) ローマ法の考え方として、「新しい法律を制定したとき、その内容に古い法律と整合性がとれないところがあった場合には新しい方の法律を優先する（法の改正はしない）」、という話が再三書かれており、これは非常に合理的であり、大帝國を統治するためにどうしても必要だったのだらうと思いました。

英単語で歴史を意味するhistoryはhis-storyの事だとされている。確かに歴史は物語だと思う。

上の本はどうしてもしんどい、という向きには

『コンスタンティノーブルの陥落』

この本は252ページほどの作品で、文章のレベル（面白さとか難しさとか）は『ロー

マ人の物語』と変わらないが、それほど時間をかけずに読み通すことができるだろう(この本も筆者の研究室で流行った)。冒頭の質問に対しては『『コンスタンティノーブルの陥落』です。『ローマ人の物語』を読みたかったのですが、あまりにも大部なので、とりあえずコンスタンティノーブルから読んでみました。』と答えてみるか。

西暦395年、帝国は東西に分裂し、476年西ローマ帝国が消滅する。一方、コンスタンティノーブル(現イスタンブール)に都する東ローマ帝国は以後千年近く命脈を保つことになる。

本書には東ローマ帝国の勢力の消長を示す図版が掲載されている。上に書いたようにユスチニアヌス帝によりローマ(東ローマ帝国)は一度は地中海を己の内海として取り戻したかに見えたが、それも長くは保たず、次第に領土を蚕食され、滅亡の年1453年にはコンスタンティノーブルの町一つとペロポネソス半島の一部およびエゲ海のいくつかの島以外は周り全てをオスマントルコ帝国によって押さえられて切ないほど小さくなっており、加えてオスマン帝国の首都はバルカン半島内陸部(つまりコンスタンティノーブルから見てヨーロッパ側)のアドリアノーポリ(現エディルネ)に置かれているという状態になっていた(ちなみにこの年はイタリアのルネッサンス期にあたる)。そしてオスマントルコの若きスルタン、マホメッド2世の「あの街をください」という言葉から、コンスタンティノーブルの攻防戦が始まる。

オスマントルコ側の侵攻の気配に対しコンスタンティノーブル側も手をこまねいていたわけでは無く、皇帝自らフィレンツェに赴いて援軍を要請するなど外交努力を続けていたが、キリスト教国側の動きは鈍く、コンスタンティノーブルに対する海と陸からの攻撃が始まってしまう。

コンスタンティノーブルはバルカン半島の東の角に位置し、南がマルモラ海、東がボスフォロス海峡、北が金角湾と三方を海に囲まれた小さな半島、というか岬の上に都市が建設されている。幅が数百メートルの幅しかない金角湾の入り口には鋼鉄の鎖が渡され敵の艦船の侵入を防ぎ、内陸側の半島の付け根では深く広い堀と3重の防壁を持つテオドシウスの城壁が敵兵の侵入を拒んでいた。当初ト

ルコ側は戦艦を陸に揚げ山越えをさせて金角湾に侵入させたり、坑道を掘って城壁内に侵入を試みたりするも効果が上がらず、千年の都たるコンスタンティノープルを攻めあぐねていたが、やがて兵力に物を言わせた力攻めの中、防御側に生じた綻びにつけ込み城壁内への侵入に成功する。落城を悟った最後の東ローマ皇帝コンスタンチヌス11世は真紅のマントを脱ぎ捨て、衣についていた皇帝の印をはぎ取ると、剣を抜いてトルコ兵の中へ突入していったとされる（まるで映画みたいだ）。

戦争である以上、殺し合いはあるが、それでものんびりした面もあったようだ。戦闘中にヨーロッパ側の補給船がコンスタンティノープルに入れたり、落城の最終局面でも脱出船が市民を乗せてヨーロッパ側に逃れたり、また、捕虜となり奴隷とされても身代金を払えば自由民に戻れているようで、凄惨な皆殺しではなかったことに少しほっとする。

面接での「どういう所が印象的でしたか」に対する回答例としては；

- 1) 西ヨーロッパがいわゆる中世の暗黒時代を経験しているときに、変容しているとはいえ古代ローマから連なる帝国が千年も命脈を保ったこと、
- 2) 東ローマ皇帝の最期の様子、
- 3) 西方のキリスト教国の動きが政治的な思惑やキリスト教の宗派の問題（カソリックとギリシャ正教）と相まって非常に鈍いこと、といったところか。

学会でこの町を訪れ、テオドシウスの城壁に登ったとき、城壁から見下ろす東ローマ帝国兵と見上げるオスマントルコ兵の戦（おのの）きやトルコ側から発射される大砲の轟音を想像し当時の恐怖を思った。

現代人が持っている坂本竜馬のイメージの原点

『竜馬がゆく』

留年して、自分は社会に出てやっつけられるのでしょうか、と自信を失った学生が筆者の研究室に来た。休みがちな学生で心配したが、筆者の所では読書を推奨しておりその学生もその影響で本を読み始めた。就職活動中、冒頭の質問に「竜馬がゆく、です」と答えたところ、「難しいの読んでいるね」と言われ内定をもらえた。

これで自信を回復したようで研究も順調に進み、B4の秋には学会にも参加して、ややヒヤヒヤさせられたものの無事卒業していった。

戦国時代、土佐（高知県）には戦国大名の長宗我部氏が居たが関ヶ原で西軍に付いたため国を召し上げられ、その後には山内氏が大名として入った。同時に山内氏の家臣達も土佐入りしたわけだが、前から居た旧長宗我部氏の家臣達がどこかへ去っていた訳では無い。結局、山内氏の家臣は上士、旧長宗我部氏の家臣は下士（郷士）となり、凄まじい身分差別が幕末まで続くことになった。坂本竜馬は下士出身でその理不尽な差別の中で育った。

竜馬は少年時代はあまり利発ではなかったとして描かれている。やがて剣術の才能が認められ、生家が裕福だったこともあり、剣術修行のため江戸へ下る。江戸で桂小五郎、勝海舟など色々な人に出会い、また黒船来襲にも居合わせる。二度目の江戸遊学から土佐に戻った後、時代が急速に動き出す中、脱藩を執行し所謂志士となる。しかし他の志士が議論や武力闘争に走るのに対し、竜馬は経済こそが近代化への道だと考え、商社亀山社中を起こし、犬猿の仲だった薩摩と長州を経済力（つまり金の力）を使って同盟にまで持ち込む。その他、次の時代の青写真となる船中八策を書いたり、大政奉還の成立に尽力したり、教科書の明治維新の頁で見るとかなりの数の項目にこの人物が関わっている。その人となりは男性にとっても女性にとっても非常に魅力的な人物だったらしい。人間、生まれて来たからにはこれくらい縦横無尽に暴れてみたいものだと思う。最後に志し半ばで暗殺者の剣に倒れるが、それもまたドラマチックだ。

竜馬が登場する小説やマンガは数多あるが、それらの原点となっているのがこの作品だろう。筆者は高校時代に父の本棚にあったハードカバー版でこれを読み、感動し興奮したが、当時この感動を共有してくれる者が周りにはおらず残念な思いをした事をおぼえている。

我々の父祖達は常に一所懸命だった

『坂の上の雲』

司馬遼太郎氏も中高年に受けの良い作家の一人であり、その作品群の中でも本

作の評価は特に高いので、冒頭の質問に対し、この作品の名前を答えれば、担当者がノッてくれる確率は高いだろう。

少し前にNHKが数年かけてこれを原作とするドラマを放送した。概ねよくできたドラマだったと思う。ドラマが放送されていた頃、研究室の学生に、視ておいた方が良いぞ、と勧めたところ、何名か視た学生が居て「視て良かったです」というので、今度は原作を勧めておいたらハマっていた。ゼミの合間に「広瀬少佐は今どこにおいでか」「少佐は閉塞作戦において戦死されました」などという会話（互いに読書の進捗状況を比較している）が飛び交ったのが懐かしい（広瀬少佐については本書を読むか広瀬武夫で検索してみしてほしい）。

ストーリーは、日本陸軍の騎兵を育て、日露戦争でロシアのコサック騎兵を破ったとされる秋山好古、その弟で、連合艦隊参謀として日本海海戦を戦った秋山真之、同郷の友人で日本の近代文学確立に貢献した正岡子規の3名を軸として進行するが、本作品の真の主人公は明治の日本という国だと思う。日本人にとって日本国内だけで事足りていた江戸時代が終わり、帝国主義まっただ中の世界で海千山千の列強と渡り合わなければならなくなった明治時代、近代化を急ぎ、富国強兵を進め、西欧列強が自分たちに都合良く決めたルールを律儀に守りながら歩む我が国の姿は「健気」という表現が一番ぴたりするかもしれない。

物語は、上記三人の生い立ちから始まり、日清戦争、三国干渉、北清事変、日英同盟、と日本が遭遇する“対外的なイベント”が駆け足で描かれ、全体の1/3を過ぎたあたりから日露戦争に突入し、ぎりぎりのところで日本が勝利して終わる。日露開戦が避けられない状況となる中、明治の人々が国を守るために世界中を奔走する姿やその過程での外交上の駆け引き（明治の政治家はこんなに優秀で、明治政府は諜報活動もできたのか）には感心するし、旅順要塞攻略戦（所謂「二百三高地」）、奉天会戦、日本海海戦での日本軍の奮戦には悲壮感を抱くとともに胸が熱くなる（戦いを望んでいないにもかかわらず、強大な敵と戦わねばならなくなり、覚悟を決めて全力を尽くして戦い、大きな傷を負いながらも、最後に辛うじて勝利する、という日本人の大好きなドラマのパターンの原型だよな）。菓の「ラッパのマークの正露丸」のマークがなぜラッパなのか、正露丸の名前の由来は何なの

か調べてみると面白いだろう。

ただ、いくつか首をかしげる部分もある。著者の司馬遼太郎氏の歴史観では、明治期の日本は立派だったが、氏自身が兵士として参加した大東亜戦争の頃の日本は“良くない日本”だったということになっているらしく、所々にそのようなバイアスを感じる記述がある。また、乃木希典司令官と伊地知幸介参謀長が兵を無駄に損耗する頭の固い無能な指揮官だった、という評価は本作で定着したとされているが、最近その評価には疑問が呈されている。当然のことながら本作は歴史書ではなく「小説」であるから、そのようなこともあるだろう。

日露戦争で勝利してしまったがために日本は調子に乗り、勝てるはずの無い大東亜戦争を引き起こして戦争の惨禍をまき散らした、とする言説がある。冗談では無い。負けていれば良かったとでもいうのか。負けていればロシア帝国は確実に朝鮮半島南端まで進出し、我が国は九州か北海道の割譲を要求されていたであろう（或いは国ごと併呑されたか）。あの当時、日本人は日本という国（家族、同胞、郷土、文化、歴史……）を守るために持てる限りの知恵を絞り全力を尽くしたことは間違いない。その後の歴史の進路に関しては結果論に過ぎない。そんな議論よりも、我々は、我々自身が卑怯者の子孫でも、臆病者の子孫でも、愚か者の子孫でも無いことをこの本から知るべきだ。

執筆者紹介

内田 希

物質材料工学専攻准教授。専門領域は、無機化学、計算機化学、熱化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『ローマ人の物語 [全15巻]』 塩野七生著 新潮社 1992-2006年 2,484-3,672円
『コンスタンティノープルの陥落』 塩野七生著 新潮社 1983年 2,160円
『竜馬がゆく 新装版 [全8巻]』 司馬遼太郎著 文藝春秋（文春文庫）1998年 各702円
『坂の上の雲 新装版 [全8巻]』 司馬遼太郎著 文藝春秋（文春文庫）1999年 各702円

[ブックガイド目次へ](#)

『水滸伝』と『楊令伝』

『水滸伝』

北方謙三著／集英社

『楊令伝』

北方謙三著／集英社

集英社文庫のこの2冊の本は、司馬遼太郎賞、出版文化特別賞を受賞しており、多くの読者の支持を受けている。『水滸伝』は19巻（各400頁弱、¥600）、『楊令伝』は15巻（各400頁弱、¥600）で、いずれも決して短編ではない。

『水滸伝』は、中国の宋時代末期において、腐敗政治によって混沌とした状況になった大国の宋に対して、「替天行道（天に替わって、世の道理を正す）」の志のもと、宋江と晁蓋という2人の頭領を含む108名の豪快、果敢な勇者たちの集団「梁山泊」の物語である。梁山湖に集結した梁山泊の面々が、きわめて多彩で斬新なアイデアを駆使して数々の戦いに勝利するものの、宋国側の童貫元帥の率いる最強軍団との激戦の末、梁山泊は没落する。この話の中では、北方謙三氏が表現する鮮烈、鮮明な人物像描写がきわめてすばらしい。寡黙で影のある武人の武松、味方からも嫌われるほど狡猾にして痛快な作戦を立てる軍師の呉用、清廉・美人しかも妖艶でもある二刀流剣士の扈三娘、体術の名手で知略家で旅芸人偽装も可能なハンサムボーイの燕青等々、北方マジックで登場人物がきわめてユニークに脚色され、かれらの大胆にして絶妙な絡み合いは、いやでも読者を強制的に話の中に取り込んでしまう面白さがある。また、戦闘描写のみではなく、政事や民政管理、法整備、資金・資源・武器・食料の資源調達などの経済管理の話も面白くまとめてあり、巷で流行っているノウハウ本や啓発本を優にしのげる啓蒙力のある本でもある。『楊令伝』は、梁山泊没落の際、頭領・宋江が宋軍に捕獲されることを阻止するため、その命を絶つ役を仰せつかった楊令が、宋江から「替天行道」の旗を託され、この物語が始まる。この顔面に赤い痣を持つ楊令は、かつて剣・槍・櫓・体術の達人の王進に師事し、2代目の頭領であり、梁山泊内の最強軍団・黒騎兵隊の隊長でもある。ここでも、北方謙三氏は、楊令を寡黙であるが比類稀なきヒーローとして鮮烈に描写している。楊令は宋国側の宿敵童貫元帥を打ち取るものの、宋側の秘密情報機関・青蓮寺の総師で狡猾な計略者でもある李富が送りこんだ刺客によって、きわめて巧妙に毒殺される。ここで『楊令伝』は終焉を迎えるが、宋国側の童貫元帥の子飼いの岳飛をヒーローにして、『岳飛伝』として、今でも話は

継続している。

私は、『水滸伝』19巻、『楊令伝』15巻を自室に常備し、1週間ぐらいの出張のときは2～3冊は持参し、仕事の合間、乗り物の中で楽しい時間を過ごしている。ちなみに、現在、3回目の『楊令伝』9巻の189頁を読んでいる。最期までに何回完読できるかを1つの楽しみにしている。皆さんも是非読んでみてください。きっとハマるだろうし、気づくと自分自身の存在が本の中にあり、梁山泊の面々と喜怒哀楽を共にしていることに、「はっ!？」とするでしょう。また、ここから人生の糧を得る人もいると考えます。

執筆者紹介

田辺 郁男

機械創造工学専攻教授。専門領域は、機械加工、工作機械、複合材料

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『水滸伝 [全19巻]』 北方謙三著 集英社（集英社文庫）2006-2008年 各648円
『楊令伝 [全15巻]』 北方謙三著 集英社（集英社文庫）2011-2012年 各648円

[ブックガイド目次へ](#)

『未盗掘古墳と天皇陵古墳』

松木武彦著／小学館

古墳や遺跡が好きなので、この種のテーマの本をたまに読む。考古学や古代史ファンというのは多いようで、書店では新書や文庫本で「〇〇の謎」など古代史関係のセンセーショナルなタイトルの本が並ぶ。そういった本の多くは、素人が読みやすく、わかったような気分させてくれる。しかし内容的には、まじめにその分野の研究を積み重ねている専門家から見るとおそらくとんでもないことが書かれているものも多いのではないかと内心思ってしまう。

そのような中で本書は、現役の大学の考古学の先生が自身の研究経験に基づき古墳の発掘について一般向けに書いた本である。タイトル、装丁ともにまったく地味で、書店に山積みされることはないが、新しい内容と著者のメッセージがたっぷり詰まった本である。この分野の専門家の方には常識的なことなのであろうが、古墳の発掘はどのように行われてきたか、史実の解明にどのように貢献してきたか、古墳の発掘が抱える問題点などを、研究者として古墳の発掘に携わってきた著者が、素人に媚びることなく語っている。

タイトルにある未盗掘古墳とは、墳墓として完成以降一度も盗掘を受けていない古墳のことである。天皇陵を含め現存するほとんどの古墳は盗掘を受けているとのことであるので、未盗掘古墳の発掘に携われることは一人の考古学者の研究人生のうちで何度もあることではないらしい。当然、未盗掘古墳の数は今後増えることはない貴重な研究対象でもある。著者は2度未盗掘古墳の発掘を経験していて、本書にはその発掘過程が詳述されている。発掘作業は根気と技術のいる作業であり、大学の研究室総出で長期にわたり慎重に行われる。途中、思い通りにいかないことや、様々な障害にも直面する。発掘現場には大学院生も加わり、そこから将来の考古学者も育つ。発掘が佳境に入り、千数百年の間手つかずのタイムカプセルである石室に到達する。読んでいて、まるで自分が発掘作業に立ち会っているかのようにぐいぐい引き込まれた。ひとつの未盗掘古墳が発掘されると、多くの事実が明らかになる。新しい事実が明らかになるたびに古代史は少しずつ塗り換えられている。発掘技術も進歩を重ねているらしい。当然ながら、考古学は実証的で日進月歩の学問であることを、素人ながら感じることができた。

古墳を発掘するということは、古代人の埋葬施設を暴くことである。目的は学

術調査であるが、副葬品を盗み出す盗掘と結果的に行っていることは同じである。また、未盗掘古墳の処女発掘は一度限りであり、技術的に不用意な発掘作業をしてしまうと有機物の痕跡などを見つけることができず貴重なタイムカプセルが台無しになる。なぜ古墳を発掘するのか、という著者にとって自身の研究の否定にもなりかねない重いテーマについて、著者が自問し答えを探している過程が多く、のページを割いて述べられている。専門分野は違えど、頷くことが多かった。

本書は考古学の研究の現場を一般の人に見せてくれる書であると同時に、学生時代から大学の研究室で真摯に研究に取り組んできた著者の半生記でもある。そのいずれも事実と実体験のもつ説得力にあふれ、心地よい読後感を覚えた。

執筆 者 紹 介

下村 匠

環境社会基盤工学専攻教授。専門領域は、コンクリート材料、コンクリート構造。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『未盗掘古墳と天皇陵古墳』 松木武彦著 小学館 2013年 1,620円

[ブックガイド目次へ](#)

『アマテラスの誕生 -古代王権の源流を探る』

溝口睦子著／岩波書店

いまでは天照大神（アマテラスオオミカミ）は天皇家の皇祖神として伊勢神宮に祭られている。本書では、実はアマテラスは初めから皇祖神だったのではなく、アマテラスの前に別の皇祖神がいて、途中からアマテラスに代わった、ということを中心として語っている。本書は同著者の〔1〕に基づいている。本書を読む前には、私も皇祖神は最初からアマテラスだと思っていた。天武天皇が壬申の乱に勝利して天皇の地位につき、国家の基盤作りのため中央集権体制を強化する。そこで、天皇家の権威を高めるために古事記を編纂し、その中で女神アマテラスを皇祖神として、その孫ニギハヤヒの命を高天原から葦原の中つ国に降臨させ、その子孫が初代天皇の神武である。天皇家が天から命ぜられてこの国を治める絶対的な存在であることを示している。これが普通に知られているアマテラスであろう。しかし、本書ではアマテラスの前に皇祖神タカミムスヒという神がいたとして、皇祖神は途中でタカミムスヒからアマテラスに代わったとしている。

タカミムスヒ？初めて聞く神名である。いや、そういえば、古事記上巻の冒頭で2番目に現れる神が高御産巢日（タカミムスヒ）だった。それ以降、古事記ではタカミムスヒはしばらく現れず、忘れた頃にときどき出てくる。古事記を読むときに気をつけるとおもしろいと言われることに、古事記の中で少しだけ現れて、それ以降ほとんど出てこない神に注目することだという。少しだけ出てくるなら大して重要な神ではなさそうだから無理して古事記に載せる必要は無いと思うが、そうではないらしい。古事記の編者が消し去りたいと思っていても完全に消し去って無視することができない神がいるらしい。例えば、本書のタカミムスヒもそうであり、ニギハヤヒ、ヒルコ、ツクヨミもそうである。この三神に対する興味深く考察した本がある〔2〕、〔3〕、〔4〕。

アマテラスについては私の実家には「天照皇大神」の掛け軸があったが、子供の頃にはよくわからなかった。本書によると、明治政府は明治時代初期からアマテラスを利用して日本の国体の観念を国民に植え付ける思想教育を始めている。その影響で庶民の家にもアマテラスの掛け軸があったのだろう。私の父母は昭和初期の生まれであるが、小学校で歴代天皇の名前を覚えさせられた。「ジンム・スイゼイ・アンネイ・イトク・・・」。いまなら「ピカチュウ・カイリュウ・ヤドラン・

ピジョン・・・」といったら失礼か？子供たちはすぐに記憶してしまっただろう。天孫降臨神話によって天皇を権威付けることは中央集権による国家統一に関して大きな力を持ったであろうと想像される。

アマテラスは古事記の中で実に多くの神話の中に登場する。弟スサノヲと対決するウケイ神話、岩窟に閉じこもってしまう天岩屋神話、そして国譲りとそれに続く天孫降臨神話である。さて、ここが本書の核心部分であるが、著者は前者2つの神話と後者2つの神話は全く異質な神話体系であるという。これを「記紀神話の二元構造」としている。前者のウケイ神話ではアマテラスは弟をかばう心優しい神であり、また、岩屋に閉じこもってしまう気の弱い神であると著者は感じている。それに対して後者では絶対性・至高性を持つ神として国譲りを命じ、天孫降臨を命じている。これらは非常に対照的である。天岩屋前では八百万の神々が集まって歌い、アメノウズメの舞に喜ぶ。八百万の神々というのは神道的というかヤマト的である。絶対神というのはこれになじまない。著者は前者をイザナキ・イザナミ系神話といい、これは日本土着の四世紀以前からの神話体系であるという。それは縄文・弥生時代から続く神話で我々にも親しみのあるイザナキ・イザナミ、オオクニヌシ、スサノヲ、アマテラスなどの豊かな神話を含む。これらは南方系の神話であるらしい。一方、後者の天孫降臨神話は五世紀に北方ユーラシアから導入されたとしている。

五世紀に東アジアは激しい動乱の時代にあり、どの国も国力を高めることが重要な課題であった。そのため、統一王権を権威付け、人心をまとめる思想的武器として天孫降臨神話が必要であった。それは当時の流行のようになり日本にも導入された。そして、そのときには至高神はアマテラスではなく、タカミムスヒであった。その頃、アマテラスは地方の神であり、伊勢神宮も地方の神社であった。タカミムスヒは天皇に直属する勢力が信奉した神であった。

そのタカミムスヒが途中からアマテラスに代わった。タカミムスヒは五～七世紀の皇祖神でアマテラスは八世紀以降の皇祖神である。皇祖神を交代させたのは天武天皇である。天武天皇は当時大陸からの文化が日本に押し寄せるのに対抗してヤマト的なものを重要視していた。タカミムスヒが北方から由来して、特定の

氏が信奉した派閥色の強い神であったのに対抗して、すべての人々に古くからなじみの深いアマテラスを中心として挙国一致体制を整えようとしたのであろう。天武天皇の業績が〔4〕に詳述されていて勉強になる。

いまから考えてみると、日本の最高神がアマテラスでよかったと私は思う。伊勢詣での人気もアマテラスだからこそであろう。本書の後書きで著者は次のように述べている。

歴史の変化に翻弄されたアマテラスには今度こそ誕生した
ときの素朴で大らかな太陽神に戻って欲しい。

- 〔1〕『王権神話の二元構造』、溝口睦子著、吉川弘文館
- 〔2〕『ニギハヤヒ「先代旧事本紀」から探る物部氏の祖神』、戸矢学著、河出書房新社
- 〔3〕『ヒルコ 棄てられた謎の神』、戸矢学著、河出書房新社
- 〔4〕『ツクヨミ 秘された神』、戸矢学著、河出書房新社

執筆者紹介

中川 健治

電気電子情報工学専攻教授。専門領域は、待ち行列理論、ネットワーク特性評価、応用確率論。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『アマテラスの誕生：古代王権の源流を探る』 溝口睦子 岩波書店 岩波新書 2009年 842円

『王権神話の二元構造』 溝口睦子著 吉川弘文館 2000年 品切

『ニギハヤヒ：『先代旧事本紀』から探る物部氏の祖神』 戸矢学著 河出書房新社 2011年 1,836円

『ヒルコ：棄てられた謎の神 増補新版』 戸矢学著 河出書房新社 2014年 1,836円

『ツクヨミ：秘された神』 戸矢学著 河出書房新社 2007年 1,836円

ブックガイド目次へ

『イワナの謎を追う』

石城謙吉著／岩波書店

『エッダ 古代北欧歌謡集』

谷口幸夫訳／新潮社

『アイスランド サガ』

谷口幸夫訳／新潮社

『ヘンリー4世 第1部、第2部』

シェイクスピア著、中野好夫訳／岩波書店

『ワイトゲンシュタイン全集1』

奥雅博訳／大修館書店

『ミリンダ王の問い インドとギリシャの対決〔全3巻〕』

中村元、早島鏡正訳／東洋文庫 7、15、28、平凡社

『ミリンダ王―仏教に帰依したギリシャ人』

森祖道、浪花宣明著／Century Books -人と思想、清水書院

かっこいいお姉さん

『イワナの謎を追う』

学生生活をしていたころ、よく大学の書店に行った。かなり大きな書店で、当然のことながら専門書が充実しており、一般書もかなり置かれていた（マンガは無かったと思う）。レイアウトは市内の書店と同様で、入り口のレジの近くに新刊やベストセラーを平積みしている台があり、常時大量の本が積まれていたと記憶している。店内を一回りしてめぼしい本が無かったので研究室へ帰ろうと出口へ向かったところ、トレンチコートを着た女性が平積み台の所で一冊の新書を手に取って見ていた。女性はタイトルと帯の文言を読むと、さっとレジへ行って支払いをし、本をショルダーバッグのポケットへすんと入れて店を出て行った。その一連の動作がスマートに決まっていたので（女性がクールビューティだったこともあり）、どんな本を買っていったのかと興味を持って自分も手に取ってみたのが標記の本だった。

北海道にはオシロココマとアメマスとよばれる2種類のイワナが生息している。この本はそれらの生態が互いにどのような関係にあるのかをフィールドワークを通じて明らかにしていたもので非常に面白かった。化学科に所属していた自分にとってはアウトドア系の研究の進め方は新鮮に感じた。読み進む内に中学生の頃、

小学校の同窓会で近郊の山に登り、その山中の小さな湖で友人がオショロコマを釣り上げたことを思い出した。この記憶と、オショロコマとアメマスは棲み分けをしており、オショロコマはアメマスの上ってこられない上流に棲んでいる、という本書の内容とが一致した。

サイボーグ009より

『エッタ 古代北欧歌謡集』

石ノ森章太郎氏の作品の「サイボーグ009」の中に「エッタ（北欧神話）編」というエピソードがある。009たちが北欧神話のような世界に迷い込み、神々の黄昏を体験するような内容だったが、自分にとっては内容そのものよりも、「北欧神話」と総称されるかなりのボリュームの物語が世の中に存在する、という事実の方が印象に残った。それからこつこつと情報を集め（当時インターネットはまだ存在していない）、標記の本のタイトルを知った。市内の書店には無いようだったので、就職活動で東京へ行く友人に頼んで八重洲のブックセンターで買ってきてもらった。多分、副題に問題があったのだろう、友人が言うには、本は音楽関連の棚にあったそうである。

叙事詩「ニーベルンゲンの歌」やワグナーの「ニーベルングの指輪」のような体系立ったものを期待したが、内容は断片的な短い説話の集合体だった。その中では特にヴァイキングたちの警句をまとめた「オーディンの箴言」（「性根のまがった哀れな男は、手当たり次第に何でも嘲る。自分にも欠けた点がないわけではないのを、知ればいいのに、それには気がつかない」とか、「友だちには友だちらしくして、贈り物には贈り物のお返しをすべきだ。笑いは笑いで、嘘は嘘でうけとめるべきだ。」とか）が気に入った。

後年、スウェーデンのウプサラを訪ねたとき、郷土博物館でシグルズ（ジークフリート）の竜退治の話である「ファーブニルの歌（エッタの説話の一つ）」を影絵芝居でやっていて、それをスウェーデン人の観客の中、ただ一人の日本人という状況で見る機会があった。スウェーデン語ができなくてもかかわらず内容が理解できたときには「古典」というものの意味と谷口幸夫氏の翻訳の正確さを思った。

そしてその後、ストックホルムで一番大きい書店に行き、店員に英語で『エッダ』はどこにありますか、と尋ねた（スウェーデンでは英語が良く通じる）。店員はすぐに筆者が日本人だと分かったようでちょっと驚いたように「日本語のですか？」ときいてきたが「いいえ、スウェーデン語のものをお願いします」と答えるとすぐに書棚の前へ案内してくれた（このやりとりを、場所を八重洲ブックセンターに、質問者を金髪碧眼のスウェーデン人に、エッダを古事記にして、日本語と英語を入れ換えて再生すると状況として結構笑えると思う《すみません、こじきハドコーニありますか？・・・》）。そのとき買った『エッダ (Eddan)』は今も筆者の書棚に宝物のように鎮座している。

食費を

『アイスランド サガ』

学生時代、週末は書店巡りをしていた。駅前通を南に歩くと大小7、8軒の本屋が点在しており、それぞれに特徴のある品揃えをしていた（現在ではその大半が閉店してしまっているらしいが.....）。ある日、JR駅から地下鉄一駅分南の書店に入ったときに標記の本を見つけた。学生にとっては高価で、普通は図書館かお金のことを気にしない好事家を買うものなのだろう。上記の『エッダ』を入手して以降、北欧神話関係の本を集めていた筆者にとってはどうしても手元に置きたい本であり、そしてこの機会を逃すと二度と手に入らなくなる本であることを直感した（発行部数は千部そこそこか?）。2週間くらい食費を削る覚悟をしてこの本を購入したが、その決断は間違っていなかったようだ。現在この本をネットで検索すると絶版になっており、中古が元値の数倍の値段で取引されている。

内容は、ヴァイキングたちの一代記やいろいろな一族の物語で、それぞれかなりボリュームがある。巻頭に収録されている「エギルのサガ」にはエギルという名のアイスランド生まれの一人のヴァイキングを中心に彼の祖父から息子達までの物語が描かれている。ノルウェーを統一したハラルド美髪王に戦士として仕えながら最後は敵対してしまった伯父ソーロールブ、やはり王と対立してアイスランドへの移住を決断した祖父クヴェルドウールヴと父スカラグリーム、そして主

人公である戦士にして詩人のエギル。このサガでは彼らの生き方とともにヴァイキング時代（9世紀から11世紀ころ）の北海を取り巻く国々の事情がよく判る（文章はかなりタリイ）。「ヴォルスンガサガ」はオーディン（北欧神話の主神）の孫のヴォルスンとその子孫達の物語でやがて英雄ジークフリートの誕生へとつながる。当時日本語でヴォルスンガサガを読めて購入可能なのはこの本しか無かったはずだ。ヴォルスンガサガのスウェーデン語版は二十年後ストックホルム訪問時に歴史博物館の売店で購入することができた。

総じてヴァイキングたち（武装農場主にして“強行貿易”を行う航海者）のprimitiveなメンタリティが印象的だった。この本を読みヴァイキングのことを知った後、「ヴァイキング」を安易に「海賊」と訳している文章を見ると、それはちょっと違う、と思ってしまう。

デートのときに

『ヘンリー4世』

学生時代、デートの待ち合わせ場所を、地下街コンコースの地下鉄南改札口前、としたことがあった。約束の時間より早く着き、少し時間をもてあましたので本でも見るかとすぐ横の本屋に入った。最初SFの新刊を探したが、ここでちょっとしたイタズラを思いつき文庫本を一冊買って待ち合わせ場所に戻った。当時はずいぶんSFを読んでおり、彼女にもそんな話をしてきた。彼女がやってきて本を読んでいる筆者を見ると開口一番「SF？」ときいてきた。それに対し自分は澄ました顔で「シェイクスピア」と答えた。彼女は一瞬唖然とした表情をしたが、頭の回転の速い女性だったのですぐにこれが筆者の仕込みだと気づき、顔をクシャッとさせて笑った。

この作品にはヘンリー4世の王太子（後のヘンリー5世）の悪友としてサー・フォルスタッフが登場する。イギリスのトリックスターの原型なのだろう。非常に破天荒な人間ながら現在でも大変人気があると聞く。日本の文学では対応する人物を探すのは難しいようだ（日本人はまじめすぎる）。16世紀の英国の戯曲が21世紀（筆者が読んだのは20世紀だけど）の日本で読まれている。これはシェイクスピア

の作品が時と国境を越えて生き残るだけの普遍的な価値（面白い！）を持っている証拠だろう。シェイクスピアの著作は娯楽作品である。別に堅くもなともなく人間くさくてむしろ柔らかい（ちょっと訳本の言葉が古くさいが）。

イタズラに使った本はその後面白く読んで、今も筆者の書庫にある。

先輩のこと

『ワイトゲンシュタイン全集1』

学生時代に所属していた研究室の2期先輩にSさんという人がいた。博覧強記の読書家かつディレクターでいろいろなことを教えてもらった。その内容は勉強から、酒、遊びに及び、研究室の大テーブルでぶっ続け六時間以上明け方までジュットランド海戦（シミュレーションウォーゲーム：差し渡し1mほどの六角形の「戦闘海域」に英独の戦艦を描いた駒を数十枚配置して艦隊運動をさせつつ砲火を交換し、サイコロで損害を判定する）を戦ったのは良い思い出。そのSさんが学位をとり、研究室を離れるに当たって、処分が面倒くさかったのだろう、好きにしろ、といって大量の本を研究室に置いていった。筆者を含む後輩らはそれぞれに面白そうだと思う本を貰い、残りは古本屋に売って飲み会の資金にした。そのとき貰った中の一冊が標記の本である。

この第一巻は「論理哲学論考」という前半部分と「草稿」を集めた後半部分から成っており、「論理哲学論考」では“哲学的諸問題”を論理的に取り扱うための“定義”や“定理”をユークリッド原論のように列挙していつている（証明は書いて無いが）。曰く、「1 世界とは実情であることがらの全てである」とか。万人に分かる教科書では無い、とは著者も書いているが、これで論理世界は構築できるのだろうか。若くていろいろと悩んでいる年頃だったら、そのさも意味ありげな文言にはまってしまっていたかもしれない。ただ、「論考」にも「草稿」にも「神」という単語が入り込んでおり、少し興が削がれた。キリスト教文化圏の哲学では致し方ないのかもしれないが。

本当に難しい本

『ミリンダ王の問い インドとギリシャの対決』

大学院生の頃、学位論文の研究とは別に宗教やら神話やらに興味を持って本を読んでいたことがある（現実逃避ともいう）。そんな中、インド哲学とギリシャ哲学の出会い、とかいうキャッチコピーを持つこの本の存在を知った。

以前、研究に必要なため学生に分子軌道法の本を読ませたが、難しい、難しいと不平をいうので、本当に難しいというのはこういう本のことをいうのだ、と標記の本を貸してやったことがある。学生は読もうとしてその難しさに凹んでいた。

紀元前4世紀、マケドニアのアレクサンドロス大王がアジアへの大遠征を行った。宿敵ペルシャ帝国を倒した後も東征を続け、最終的にはインダス河流域まで到達した。その過程で各地に植民都市アレクサンドリアを建設し、部下には現地女性との結婚を奨励して彼の帝国の一体化と維持を図ろうとしたが、彼の早すぎる死後、その大帝国は分裂してしまう。分裂のどさくさの後、東方で生き残った植民都市がグレコ・バクトリア王朝（アフガニスタンあたり）やインド・ギリク王朝（パキスタン北部あたり）として自立した。ミリンダ王とは、紀元前2世紀頃のインド・ギリク王朝の王メナンドロス1世のことである。

ギリシャ的バックグラウンドを持つ王はインドの賢者とよばれる者達に形而上学的問いを発するが、満足する答えが得られず仏教に対し否定的な考えを持っていた。その王が尊者ナーガセーナの存在を知って、500人のギリシャ人を引き連れて会いに行き、「いかにして、あなたは尊師として知られているのですか？尊者よ、あなたはなんとという名なのですか？」という問いから問答を始める。尊者は例を挙げつつ次々と問いに答えていき、262の問い（伝わっていない問いを加えると304）に答えが与えられると、王は感服し仏教に帰依した。要するに問答の形を取った仏教哲学の経典である。

問いと、それに対する答えが与えられても、理解する、ということとは別物だということがよくわかる（この本の中でデカルトの「吾思う故に吾あり」が思い切り否定されているということを知った）というのを解説書『ミリンダ王—仏教に帰依したギリシャ

人』を最近になって読んでようやく知った)。筆者自身、全部を読み通して理解するだけの情熱と知的体力は持っていなかったが、今本を開いてみると、所々に印がつけてあり、それらは最初に読んだときに納得した、或いは印象に残った問答だったと記憶している。

追記：研究室で「この本は難しい」と紹介したところ、学生らが興味を持ち図書館から借りてきて読んでいます。さて、彼らは理解するだろうか。

執筆者紹介

内田 希

物質材料工学専攻准教授。専門領域は、無機化学、計算機化学、熱化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『イワナの謎を追う』 石城謙吉著 岩波書店 岩波新書 1984年 品切

『エッダ：古代北欧歌謡集』 V. G. Neckelほか編 谷口幸男訳 新潮社 1973年 2,808円

『アイスランド サガ』 谷口幸男訳 新潮社 1979年 品切

『ヘンリー 4世 第1部・第2部』 William Shakespeare著 中野好夫訳 岩波書店(岩波文庫) 1969-1970年 品切

『ウイトゲンシュタイン全集 1 - 論理哲学論考/草稿1914-1916/論理形式について』 L. Wittgenstein著 奥雅博訳 大修館書店 1975年 4,320円

『ミリンダ王の問い：インドとギリシアの対決 [全3巻]』 中村元、早島鏡正訳 平凡社(東洋文庫) 1963-1964年 2,700-3,132円

『ミリンダ王：仏教に帰依したギリシャ人』 森祖道、浪花宣明著 清水書院 1998年 918円

[ブックガイド目次へ](#)

万葉集はちょっとすごいと思う

『新編日本古典文学全集(6～9)―萬葉集(1～4)』

小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳／小学館

『日本語の奇跡：「アイウエオ」と「いろは」の発明』

山口諭司著／新潮新書

『額田女王』

井上靖著／新潮文庫

『天の川の太陽 改版 上・下』

黒岩重吾著／中公文庫

『サラダ記念日』

依万智著／河出文庫

『英語でよむ万葉集』

リービ英雄著／岩波新書

『万葉の人びと』

犬養孝著／新潮文庫

万葉集のすごいところその1：量がすごい。

収録されている歌は4516首（小学館版：写本によって異同があるのかな）。これは古今和歌集の4倍強に当たる。現在は活字で印刷されているので解説付きでもハードカバー4冊で済むが、オリジナルの形態は「毛筆手書き」の「巻物」（だから文字通り巻第1から巻第20）であり、全巻そろいだと、保管するためには引越し用の段ボール箱くらいの入れ物（木箱とか厨子とか）が必要なはずで、総重量は10kgを越えたはずだ（と、小学館版の巻頭解説に書いてあった）。それほど嵩張るにもかかわらず（火事や戦の際などに担いで逃げるのはちょっと困難）1200年の時を越えて現在に残っているということは（成立は八世紀後半ころ）、どれほどの写本（当然手書き）が作られ、どれほど大事に保存されてきたのか、と思うとその情熱に畏怖すら感じる（基本的に日本人は恐ろしく物持ちが良いけど）。

万葉集のすごいところその2：上は天皇から下は庶民の歌まで収録されている。

他の文化圏では、詩歌などというものは王族、貴族のものであり、日々の生活に追われる庶民からは遠いものだったろう。よしんば庶民にも詩があったとしても同じ歌集や詩集には収録されなかったはずだ。一方、万葉集の最終編者とされる大伴家持は、詠み人の身分に拘らず「歌」そのものの価値をみて収録している。

そしてこのことは、我々日本人の先祖は千数百年前から天皇も貴族もそして庶民ですらも同じ形式で一定レベル以上の歌を作り交換し合う文化を持っていたことも意味している。

万葉集のすごいところその3：日本語で書かれている。

日本人が文字（漢字）の存在を知ったのは弥生時代の中頃（二千年くらい前）だろう。大陸渡りの鏡や皇帝からもらった金印に刻まれていた文字を見て、便利なもの（アプリ）だ、と気がついたはずだ。ただ、残念なことにそのアプリは大陸のOS（漢文）上で使うことが前提だった。仕方なく日本人はそのOSごとアプリを導入し、以来日本の公文書は漢文（だんだん日本風のなんちゃって漢文ないしはその訓読体になるが）で書かれることになった。この、公文書を漢文で書く習慣はついこの間、20世紀の前半まで続いた。

しかし、日本人の日本人たる所以の一つは日本語を使うところにある。声に出すだけで消えて行ってしまう日本語を何とか形に残せないか、という欲求から日本人は漢字導入後の早い段階から漢字に借音（しゃくおん：オリジナルの読みの音だけ使う）と借訓（しゃくくん：オリジナルの意味に日本語の読みを当てはめる）という新しい使い方を編み出し、日本語を文字で書き留める試みを始めた（片仮名、平仮名の登場はこのずっと後）。この使い方は古事記にも見られるが、大々的なものは万葉集の万葉仮名であろう。これは、現在でいえば、コンピュータ用の機械語でラブレターを書く、とかいうレベルのとんでもない試みであったと思うが、古代日本人はそのとんでもない試みを兎も角もやってのけたことになる。

ただ、この万葉仮名は、片仮名、平仮名出現以前のプロトタイプの悲しさか、150年もすると（平安時代前期）読めなくなってしまう（デタラメ漢文にしか見えない）が、中に天皇の名前が見えているので廃棄するわけにも行かず、解読の勅命が下る。以来、解読の研究は現在でも続いており、まだ読んでいない歌（難訓歌）も全体の1%未満ながら存在している。万葉仮名と難訓歌の例を示すと、

『莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣吾瀨子之射立為兼五可新何本』

『莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣 わが背子が い立たせりけむ いつかし 嚴ぬかたのおほきみ檀が本』額田王

卷第1の9

(????????????? 我が君が そばに立たれたという 大きな檀の木の下：現代語訳は小学館版に準拠。一部筆者。以下同)

未解読部分は12文字あり第1、第2句に相当しているが、説はいろいろあるものの結局読めていない。第3句以降の万葉仮名もよくも書いたものだと思うし、よく読み解いたものだと思う。未解読部分については、古代朝鮮語(?)で読める、という言葉説が流行ったことがあるが、その後徹底的に批判され現在では否定されている。

万葉仮名、片仮名、平仮名については山口謠司氏の『日本語の奇跡-「アイウエオ」と「いろは」の発明』が読みやすくて面白い。

万葉集のすごいところその4：全然堅くない。日本人の感性の原点。

古典だ、文法だ、という受験かよ、と思って本を開く気も起きないかもしれないが、内容は至って日本的、というか日本人の感性そのものである。以下に挙げる歌を音読してみよう。音読してこそ歌の良さを感じることができる。

卷第一の冒頭に納められている歌は雄略天皇（記紀ではエピソードの多い天皇）の御製で、

『籠こもよ美籠み持こもち 堀ふくし申みもよ美堀み申ふくし持もち この岳おかに菜摘なます兄 家聞かかな名なのら
さね 空あみつ大和の国は 押おしなべて吾わこそ居おれ 敷しきなべて吾わこそ座ませ 吾わ
こそは告つらめ 家いをも名なをも』雄略天皇 卷第1の1

である。これを現代語訳をすると、

(籠も美しい籠を持ち 竹べらも美しいへらを持ってこの丘で若菜を摘んでいる娘

さん あなたはどこの家の娘さんですか？ お名前は？（そらみつ：大和の枕詞）
この大和の国にはことごとく私が君臨しているのだよ すみずみまで私が治めて
いるのだよ 私の方こそ家も名前も言っちゃうよ）

となって、これはどう見たって女の子をナンパする歌でしょ（天皇が欲望と権力
に任せて野にいる少女を強引に攫うのでは無くて、歌を贈っている点にも注目）。

万葉集の中で最も人気のある歌とされる額田王の

『あかねさす ^{むらさきの}紫野行き ^{しめの}標野ゆき ^{のもり}野守は見ずや 君が袖振る』額田王 巻第
1の20

（あかねさす：紫の枕詞） あゝ紫草の野を行き その御料地の野を歩いてると
き 野の番人は見ているではありませんか あなたが袖をお振りになるのを）

には ^{おおあまのみこ}大海人皇子からの返しの歌があり、それが

『^{むらさき}紫草の にはへる妹を 憎くあらば 人妻ゆゑに われ恋ひめやも』大海人皇
子 巻第1の21

（紫草のように美しい貴女が もし憎かったなら いまは人妻の貴女を どうし
て恋しく思ったりしましょうか）

である。一見不倫関係のどきどきする歌のやりとりに見えるが、状況はそれより
も複雑で、まず、この二人は一時は恋愛関係にあり、額田王は大海人皇子の娘を
産んでいるが、その後は大海人皇子の兄の天智天皇の後宮に入っている（つまり
額田王の現夫は天智天皇）。そして、これらの歌は秘めやかに交わされたものでは
無く、天智天皇臨席の宴の場で読み上げられたとされている（このとき3名とも
おっさん、お婆さんの年齢）。なんちゅうか大人の関係というか……この後、壬
申の乱が起こって大海人皇子は天智天皇の息子（つまり皇子の甥）と戦って敗死
させており、さらに皇子と額田王との娘がその甥の妃になっていたという関係な

ので、全然笑えない大人の関係の上に上記の歌がある。

余談ながら、この辺の事情の詳細は井上靖氏の『額田女王』か黒岩重吾氏の『天の川の太陽』を読むと良いだろう。井上氏の作品は文学的で演劇を観ているような感じだし、黒岩氏の作品は文章にやや趣を欠くものの記述が詳細で大河ドラマのようだ。

また、コミカルな歌で、

『来むと言ふも 来ぬ時あるを 来じと言ふを 来むとは待たじ 来じと言ふものこ おおどものさかのうへのいらつめ』 大伴坂上郎女 巻第4の527

(来ようと言っても来ないときがあるのに 来ないって言ってるのを来ると思って待ったりはしません 来ないって言ってるんだから)

なんてものもある。これは言葉のリズムを楽しむ歌であり、現代のコピーライターだって似たような文句を考えそうだが、現代語よりも古語の方がシャープな感じがする。

海外へ出て活躍する技大卒業生に贈るには次のような歌が良いだろうか。

『大船おおふねに 真楫まかじしじ貫ぬき この吾子わがこを 唐国からくにへ遣やる 齋いわへ神たち』藤原太后(光明皇太后) 巻第19の4240

(大船に櫓をいっぱい取り付けてやり、この愛しい子を、唐国へやります。神々よ、守りなさい)

これは、甥の藤原清河が遣唐大使に任ぜられたときに贈ったもので、遣唐使は本当に命がけだったからこのくらい強い歌になったのだろう。

映画「二百三高地」の主題歌となったさだまさし氏の「防人の詩さきまりのうた」の本歌は防人の歌では無く、雑歌ぞうかの中に入っている(防人の歌の中で探したが良いものが無くふと見つけた雑歌をモチーフにした、と本人が語っていたのをラジオで聴いた)。

『鯨魚取り 海や死にする 山や死にする 死ぬれこそ 海は潮干て、山は枯れすれ』作者未詳 巻第16の3852

(<鯨を捕る：「海」の枕詞> 海は死にますか 山は死にますか 死ぬからこそ 海は潮が引き 山は枯れるのです)

ここからあの名曲になるのだから、作詞家の才能というものはすごい。

音読をしてみると我々の先祖は、日本語では5音節と7音節を主体にして言葉を組み合わせると心地よい、ということに気づき自分の気持ちを表す歌にしていたことが判る。千年以上の時を隔てた俵万智氏の『サラダ記念日』だって舞台と小道具が違うだけでその感性は万葉集と違いは無いと思う。

日本人の感性そのもの、と書いたがその感性は別に日本人のドメスティックな精神世界に限局された独りよがりのもでは無く、英語にも翻訳され詩として評価されている。もちろん、5・7調、7・5調の響きは消えてしまうが、それは日本人が翻訳物の海外の詩集を読むのでも同じこと。リービ英雄氏の『英語でよむ万葉集』で取り上げられている歌は、英語にするとなるほどこうなるのか、と感心するし、上の雄略天皇の歌の英訳はそのストレートさが笑えた。

古文なんてわかんないよ、と思うかもしれないが、古語ではあってもやはりそれは日本語であり、我々はこれらの歌を詠んだ人々の言語のDNAを引き継いでいることは間違いない。読もうと思えば気合いで読める。文法やら何やら難しいことは解らなくても歌はわかる。全部読むなんて無謀な挑戦を勧めているわけでは無いが、ばらばらとめくって気に入った歌（必ずある。何しろ4516首も有るのだから）をいくつか覚えておくと、ちょっとかっこいいし、単身で長期にわたって海外に出たときには心のよりどころになってくれるだろう。

でも、まあ、そうはいつでも、やはり、いきなり『万葉集』を開くのはちょっとだけハードルが高いかもしれない。万葉集の有名な歌や良い歌を解説した本もたくさん出ているので、そういうのから入るのも有りだと思う。筆者は1年間一人で米国に滞在したときには犬飼孝氏の『万葉の人びと』を持っていった。

執筆者紹介

内田 希

物質材料工学専攻准教授。専門領域は、無機化学、計算機化学、熱化学。

- 『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
- 『新編日本古典文学全集（6～9）-萬葉集（1～4）』小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳 小学館 1994-1996年 4,608-4,814円
- 『日本語の奇跡：「アイウエオ」と「いろは」の発明』山口謠司著 新潮社（新潮新書）2007年 734円
- 『額田女王』井上靖著 新潮社（新潮文庫）2010年 907円
- 『天の川の太陽 改版 上・下』黒岩重吾著 中央公論社 中公文庫 1996年 1,153-1,234円
- 『サラダ記念日』俵万智著 河出書房新社（河出文庫）1989年 475円
- 『英語でよむ万葉集』リービ英雄著 岩波書店（岩波新書）2004年 842円
- 『万葉の人びと』犬養孝著 新潮社（新潮文庫）1981年 品切

[ブックガイド目次へ](#)

私の人生をV字回復させてくれた本

『得手に帆あげて 新装版』

本田宗一郎著／三笠書房

『「福」に憑かれた男』

喜多川泰著／総合法令出版

『下町ロケット』

池井戸潤著／小学館

『「手紙屋」：僕の就職活動を変えた十通の手紙』

喜多川泰著／デイスカヴァー・トゥエンティワン

とてもつらくて、落ち込んでいるとき、V字回復させてくれるきっかけをくれるのが読書です。あの時、その本が私の手元にあったのは、本当に偶然なのですが、自分の過去を思うと必然であるように思います。今日は、私の人生の凹みをV字回復してくれた本をみなさんに紹介し、今後の人生の糧にさせていただければと思っています。

1冊目は、自分が大学4年生の時に読んだ 本田宗一郎著『得手に帆あげて』です。恥ずかしながら、私の家は家業の不振のため、当時非常に貧乏で、特に大学に入学してからはいつも学費が納期直前まで払えず、ぎりぎりの生活を送っていました。当時は、バブル全盛期。周りの学生たちはみんな羽振りが良くて、飲み会や合コンに明け暮れていたのですが、私は週に2日間の徹夜のモスバーガーの掃除と4件の家庭教師を掛け持ちしながら、片道2時間半近くかかる千葉のど田舎から早稲田大学に通学していました。なぜ自分だけこんなに貧乏で苦勞しなければならぬのか？周りの人々の境遇をうらやんだこともあるし、親への恨み節も出るものです。そんなある日、母親が持っていたこの本を長い通学時間の暇つぶしとして読みました。

本田宗一郎という人が世界のHONDAを創立するまでの苦勞が対談で語られているのですが、今でもその中の一説を覚えています。「若い時の苦勞は買ってでもするものだ。」若い時は自ら苦勞すればするほど、その苦勞はその人を育てることが書いてありました。その1節が、当時の自分のハートに火をつけたのは言うまでもありません。自分の不幸を親のせいや家のせいにするのは簡単です。でも、今の苦境を自分で残り超えてこそ、そこに自分の成長があるのだという考えは、前の見えない自分の人生を考える上で大きな勇気をくれたものです。あと、この本の表紙は大変イカしています。宗一郎氏が、仮面ライダーばりのバイクに子供

のように嬉々としてまたがっている姿の写真。この旺盛な好奇心、いつになっても衰えないチャレンジ精神にも魅了されました。また、HONDAを世襲制にしなかった理由も潔さを感じました。彼の精神は、当時の自分のカンフル剤となったことは、間違いありません。

2冊目の本に出合ったのは、技大に来て数年が経過した頃でした。私は、博士課程を終了後、新潟の県立高校の理科教諭として6年間務め、その後、長岡技術科学大学の助教として研究者に戻ってきました。しかし、研究の現場を離れて、再び研究の道に戻った時は、後悔の連続でした。高校教員という職業は私の天職で、人を教育することは素晴らしく、自分がこの職業を選んだことに喜びを感じていました。しかし、それを辞めて大学に戻ってきたのは、新潟県における野生動物と人間の共存のため、自分が果たす役割がまだあると思ってのことでした。平成18年にクマの大量出没が生じ、新潟県のクマ捕獲頭数は、全国第3位でしたが、新潟県はクマの管理計画すら持っていなかったのです。私は生態学者として、このような無責任な管理体制の中で野生動物が殺されていく、しかも、動物の被害が減らない現場を変えたいと思っていました。しかし、研究の道に戻ってきたからといってその道は順風満帆ではありませんでした。サル被害が大きい新潟県で、サル被害の対策を浸透させるためには、住民への正しい鳥獣被害に関する啓発活動は欠かせません。夜、勉強会と称して中山間地域の集落の公民館を回り、年間数十回にのぼる講演会活動をしていました。しかし、研究者としては、そんなことをやっても業績はあがりません。しかも、既存業務を増やしたくないという気持ちを持っている行政担当者は、被害対策をやるように働きかける私を煙たく思っている人間も多く、実際の現場は困難を極めました。誰も応援してくれないし、何も前に進まない閉塞感にさいなまれ、なぜ天職である高校教員を辞めてしまったのかということの後悔し、泣き続ける日もありました。

そんな時、知り合いの友達よりもらった喜多川泰著『福に憑かれた男』という本が手元にありました。これは、福の神派遣協会より派遣された新米福の神が、主人公に人生の試練を与える物語です。福の神は、試練を与える代わりに、それを乗り越えるのに必要な人との出会いをプレゼントします。そうして、自分の力

で、その試練を乗り越えさせることで、人を成長させるのが福の神の仕事なのです。一方、貧乏神は、その人間に分不相応なラッキーを与えます。たとえば、宝くじに当たるなど。そういうことを繰り返すと、その人間はどんどんラッキーに頼り、本人が成長しなくなってしまうのです。この本を読んで、今、自分はたくさんの試練を福の神にもらっているのでは？と考えるようになりました。つまり、この試練を乗り越えればさらに成長し、次の段階に進めるはずだと思っても居ても立っても居られなくなり、AmazonでNPOの立ち上げに関する本を30冊くらい買い漁り、自分が解決すべき問題について、新しい団体を立ち上げようと決心しました。それから月日が経ち、今年ようやくその目標を達成しました。あの時、あの本がなかったら、辛かった境遇を嘆き、後悔ばかりしていたと思います。辛い時こそ、福の神がくれた試練（プレゼント）と考え、これを乗り越えることが、人を大きく成長させるということにこの本が気づかせてくれたのです。それ以降、「反省はしてもいいけど、後悔はしない」という言葉を自分の座右の銘にしています。

他にも学生の皆さんに紹介したい本があるのでせっかくだから紹介します。池井戸潤著の『下町ロケット』です。半沢直樹で大ブレイクしましたが、この本は彼が直木賞を取った記念すべき作品で、ものづくりに携わる人には、一度は読んでほしい作品です。中小企業が作ったある部品がなければそのロケットは飛ばない。技術力を武器に闘うモノづくり企業の物語です。とても元気をくれます。是非、だまされたと思って読んでみてください。もちろん半沢シリーズも元気をくれるので私は大好きです。

それから、うちの研究室に来る新入生全員に必ず配る本は、喜多川泰著『手紙屋』です。これから就職するにあたり、働くということはどういうことなのか？その意味を問う本なのですが、物語としての完成度も高く、とても好きな本です。2時間くらいで読める非常に読みやすい本なので、就職活動の移動時間に是非読んでほしいと思います。

良い本との出会いは人生を変えます。たくさんの良書にであうため、私は書籍代だけは惜しまないようにしています。是非、みなさんもたくさんの良書に出会い、それを糧にして実りある納得した人生を歩んでほしいと思います。

執筆者紹介

山本 麻希

生物機能工学課程准教授。専門領域は、動物生態学、野生動物管理学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『得手に帆あげて 新装版』 本田宗一郎著 三笠書房 2000年 1,512円

『「福」に憑かれた男』 喜多川泰著 綜合法令出版 2008年 1,404円

『下町ロケット』 池井戸潤著 小学館 2010年 1,836円

『「手紙屋」：僕の就職活動を変えた十通の手紙』 喜多川泰著 ディスカヴァー・トゥエンティワン 2007年 1,620円

[ブックガイド目次へ](#)

『モンテ・クリスト伯』

アレクサンドル・デュマ著、山内義雄訳／岩波文庫

『モンテ・クリスト伯Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』

アレクサンドル・デュマ著、松下和則、松下彩子訳／集英社

「巖窟王」のタイトルでも知られる『モンテ・クリスト伯』は、幾度となく映画化・舞台化されたデュマの名作であるが、宝塚歌劇百周年記念公演シリーズの幕開けとして宙組の鳳稀（おおき）かなめ&実咲凛音（みさき・りおん）によって2013年春に上演され好評を博した。しかしこの「巖窟王」が本当に起きた事件を元に作られたということを知る人は少ない。1807年のパリに住んでいたフランソワ・ピコーという若い靴屋が、身よりのない金持の娘マルグリットと結婚することになり、嬉しさのあまり同郷の友人ルーピャンの経営する喫茶店でその婚約について話した。かねてからマルグリットに心を寄せていた彼は嫉妬に駆られ、この結婚式中止させようと、悪友のアントワーヌ・シャンパール・ソラリと共謀して、ピコーを当時ナポレオンに追われ亡命中のルイ18世の密偵であると密告したため、ピコー青年は秘密裏に捕縛され消息を絶ち7年の歳月が過ぎ去った。1814年ナポレオン帝政が崩壊した頃、ピコーはようやく出獄できた。彼は同房のイタリア人司教をよく世話していたため、死に際に莫大な財産を遺贈された。その財宝を利用して復讐を企て、まずシャンパールとソラリを惨殺した。さらにルーピャンの娘を誘惑して妊娠させ、その結婚式の夜に屋敷に放火して全焼させたのみならず、息子ウージェーヌに押し込み強盗を教唆実行させて懲役刑20年とした。妻であったマルグリットも相次ぐ子供達の不幸に打ちひしがれて命を落とし、遂にはルーピャン自身もピコーに殺されてしまう。しかし逆にアントワーヌはピコーを誘拐して洞穴に監禁し食事も与えなかった。ピコーは動けなくなったところを、眼をえぐられ腹を割かれて殺されてしまう。犯人アントワーヌはイギリスに渡り1828年この事実を聴罪司祭に話して死んだが、その記録は警察庁の古記録保管所に保存され十年後に発表されたものを、デュマが入手して小説化し、当時のベストセラーとなったものである。

「モンテクリスト伯の言葉」

*「私の行動の真実をお知らせしましょう。この世には幸福もあり不幸もあり、それはひとつの状態と他の状態との比較に過ぎないということなのです。

極めて大きな不幸を経験した者のみ、極めて大きな幸福を感じることができるのです。生きることのいかに楽しいかを知るためには一度死を思ってみる必要があります。そして人間の英知は次の言葉に尽きることを忘れないで下さい。

待て、そして希望せよ！ (Attendre et Espérer!)」アレクサンドル・デュマ著、山内義雄訳『モンテ・クリスト伯』岩波文庫

* 「囚われの身の辛さも二人で分けあえば半分になるだろう。二人で一緒に嘆くならば、それはほとんど祈っているようなものだ。二人で一緒に祈れば、それは神への感謝に近いものだ。」(p164) 「学ぶことと知ることとは別だ。世の中には、物知りと学者とがいる。物知りをつくるのは記憶で、学者を作るのは哲学なのだ。」(p189) 「人生において重大な関心事といえば、ひとつしかありません。すなわち死です。」(p432) 「蠟燭も人間の生命と同じである。人はその生命を伝える方法は、まだ一つしか見つけてはいない。そしてこの方法は神から授けられているのである。しかし生命を奪う方法は、無数に発見した。その最高の仕事のために、悪魔が幾分か人間に手を貸しにやって来たことは事実である。」(p463)

アレクサンドル・デュマ作、松下和則彩子訳『モンテクリスト伯Ⅰ、集英社版世界文学全集24』

* 「すべての不幸にはふたつの薬がある。つまり時と沈黙だ。」(P107) 「老人達にとっては、死が一時自分のそばを離れて、他の老人を襲ったときほど、恐ろしいことはない。」(P399) 『モンテクリスト伯Ⅱ、集英社版世界文学全集25』

* 「精神の傷というものは、人の眼にこそ触れないが、決して傷口が塞がらないという特色を持っている。つねに苦痛を伴い、人の手が触れるとすぐに血を流し、心の中でいつも生々しく、口をぱっくりとあけているものだ。」(P139) 「この世には、幸福も不幸もないのです。あるのは一つの状態と、もう一つの状態との比較だけです。極度の不幸を味わった者だけが、この上もない至福を感じ取ることができるのです。」(P484) 「人間の叡智は次の二つの言葉でいいつくされるって。－待て、そして希望を持て！」(p485) 『モンテクリスト伯Ⅲ、集英社版世界文学全集26』

執筆者紹介

福本 一郎

生物機能工学専攻教授（平成27年3月退職）。専門領域は、医用生体工学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『モンテ・クリスト伯 改版 [全7巻]』 Alexandre Dumas著 山内義雄訳 岩波書店（岩波文庫）2007年 821-929円

『モンテ・クリスト伯 [全3巻]』 Alexandre Dumas著 松下和則、松下彩子訳 集英社（世界文学全集 24-26巻）1980年 品切

[ブックガイド目次へ](#)

『風と共に去りぬ』(世界文学全集 別巻1・2・3)

マーガレット・ミッチェル著、大久保康雄、竹内道之助訳／河出書房新社

2014年で創立百周年を迎える宝塚歌劇は、宝塚音楽学校（二年制定員40名）を卒業した生徒達のみで構成される5組（雪組・月組・花組・星組・宙組）各80名の独身女性だけの劇団員（宝塚ジェンヌ）により演じられる、歌・踊り・芝居を総合した世界初の“歌劇”であり、ムーランルージュの“レビュー”、ブロードウェイの“ミュージカル”と並ぶ人類最高の総合芸術である。これまで約100名のトップを含む4400名の宝塚ジェンヌが演じてきたこの歌劇は、1500回の上演と通算観客動員数400万人を記録した「ベルサイユの薔薇」（1974年初演）や、1182回の上演で266万人の観客を集めた「風と共に去りぬ」（1977年初演）を始めとして、百年間で計750万人の観客を動員してきた。特に後者は今なお世界中で多くの人に愛されているベストセラー小説であり、映画版の大ヒットでも有名なMargaret Mitchellの名作「風と共に去りぬ」(Gone with the wind) を、宝塚歌劇がミュージカル化したもので、米国唯一の内戦（The Civil War）であり1861年から1865年までの5年間に南北両軍計62万人（比較:第二次大戦では40万人）の同胞の血を流した南北戦争を舞台に繰り広げられる、ドラマティックでスケールの大きい舞台は好評を拍し、五組すべてと各組選抜の合同メンバーによる再演を重ねてきた。2002年には1994年以来12年間レットを演じて最高の男役との評価を得てきた専科の轟悠（とどろき・ゆう）と宝塚歌劇の歴史上最高のダンサーである朝海（あさみ）ひかるがスカーレットを演じて高い評価を得た。そして2014年1月には宝塚始まって以来の美人男役トップの月組龍真咲（りゅう・まさき）がスカーレット・オハラを演じ、轟悠のレットと最高のコンビで宝塚歌劇百周年記念公演の一環として梅田芸術劇場で上演された。

宝塚歌劇「風と共に去りぬ」の粗筋

〔第一部〕スカーレット・オハラは愛するアシュレと結婚できなかつた腹いせに、アシュレの妻メラニーの兄チャールズと結婚するが、間もなく死別しアトランタへやって来た。チャリティーバザーの夜、ダンス相手の女性を競り落とすイベントで、喪中のスカーレットに法外な値を付けた男こそが、レット・バトラーであった。南軍の兵士として出征したアシュレが一時帰還したとき、スカーレットは白い腰巻きのサッシュを贈ると共に自分の想いを告白するが、彼は“メラニーを頼む”

と告げるのみであった。劣勢の南軍に北軍が迫り、アトランタが戦場になったため、スカーレットはアシュレとの約束を守って妊娠中のメラニーらと共に故郷タラへの疎開を決意する。燃えるアトランタの町からスカーレット達を荷馬車で避難させたのはレットであった。その途中でレットは南軍に志願しその場から戦場へ赴く。やがて南軍は敗北。荒れ果てたタラを見て、スカーレットはこの土地を守り抜くと決意する。「神さまが証人だわ。神さまを証人にしてあたしは誓う。あたしはヤンキーなんかには屈服しやしない。どこまでだって生き抜いて見せる。そして戦争が終わったら、もう二度とひもじい思いなんかするものか。そうだ、うちの人たちにだって、ぜったいにそんな思いをさせはしない。よしんば、そのためには、盗んだり人殺しまでしなければならぬとしても、神さまを証人にして、二度とひもじい思いなんかするものか。」^{注1)}

“As God is my witness. As God is my witness, the Yankees aren't going to lick me. I'm going to live through this, and when it's over, I'm never going to be hungry again. No, nor any of my folks. If I have to steal or kill—as God is my witness, I'm never going to be hungry again.”^{注2)}

注1) マーガレット・ミッチェル著 大久保康雄、竹内道之助訳「風と共に去りぬ」、河出書房新社刊世界文学全集別巻2 ミッチェル、p99、1960

注2) Margaret Michelle: “Gone with the wind”, Warner Books, New York, p421, 1993

[第二部] スカーレットはレットと結婚していた。敗戦で無気力となったアシュレを自分の経営する雑貨店に雇っていたが、スカーレットと二人で抱き合う姿を奥様方に目撃されて町の噂になる。激高したレットはスカーレットを強引に2階へ連れて行こうとするが、スカーレットは足を踏み外して転落し大怪我を負う。強い後悔と不安にかられたレットはメラニーに、スカーレットを心から愛していると告げる。メラニーは流産し死期を悟り、スカーレットにレットの真意を告げて息を引き取る。その言葉によってスカーレットは、それをレットへの愛情に気付き彼に告白するが、時既に遅く彼はひとり去っていくのだった。「今は考えまい。考えようとしても、今はとても考えられない。明日、タラで考えることにしよう。明日はまた明日の日が照る。」[“I'll think of it all tomorrow, at Tara. I can stand

it then. Tomorrow, I'll think of some way to get him back. After all, tomorrow is another day.” p1024]

この有名な最後の独白の邦訳では、原文にある“some way to get him back（彼を取り戻す手だて）”という句が、省略されているため、スカーレットはレットと決別し独立した人生をタラで一人歩む様な印象を受ける。これではこの作品は悲劇で終わってしまう。しかし思い込んだら一途に自らの人生を切り開いて行く激しい気性のスカーレットには、あらゆる手管を駆使して愛する男を取り戻すように積極的に努力してゆく人生の方がより相応しいと思われる。原作者もおそらく、ハッピーエンドに繋がる期待と余韻を残して筆を置いたのであろう。

「風と共に去りぬ」はマーガレット・ミッチェルの生涯唯一の作品であり、米国建国以来最高の国民的文学である。それは丁度「源氏物語」、「平家物語」が日本人の感性と思考の形成に寄与した“民族の宝”であるのと同様に、歴史が短い多民族国家である米国人の心をついにするとともに、“アメリカ人氣質”の存在を世界に印象づけた。

神ならぬ身の“人”がつくった国も、また人と同じく過ちを免れない。広島長崎、ソソミ村、アフガニスタン、バクダッド、シリアでの一般市民虐殺は米国の歴史上の汚点となっている。しかしまた一方ではベトナム反戦運動・環境保護運動・ウォータゲートなど、文明人の理性と良心に突き動かされた地球環境や人権擁護運動もまた同じ米国のなし遂げた功績である。さらに電話、自動車、飛行機、コンピュータ、インターネットなど人類の科学の大部分を産み出し、人類史上始めて月に人を送った米国は、また徳川幕府の鎖国を排して日本の眼を世界に開いてくれたのみならず、第二次世界大戦中の困難な時期にクラーク・ゲーブルとビビアン・リー主演の絢天然色映画“Gone with the wind”を世に問い、戦後はGHQを通じて世界ではじめて戦争放棄を詠った日本国憲法第九条の制定を助けてくれた素晴らしい国と言わざるを得ない。

我々はこの古くからの友人を大切にすると共に、またそれ故にこそ、いたずらに事大主義者とならず、幕末の小林虎三郎が火事見舞いに来た河井継之介に「今は何も差上げるものとしてないが、せめてものお返しに貴殿にご意見を差上げよう」

と厳しい意見をした如く、真の友人として友が誤った道に進まぬよう諫言すべきであると考え。レッド・バトラーも以下の様に、南北戦争の本質を見抜き、リンカーンの「奴隷解放」という正義の御旗の陰に潜んだ人の醜さをえぐり出している。

「戦争をしているばかりに、雄弁家どもがどんな景気のいい標語をあたえようと、どんなに崇高な目的をこじつけようと、戦争にはただ一つの理由しか絶対がありません。それは金銭です。戦争はすべて実は“金の奪いあい”です。けれども、それを悟っている人はほとんどいません。彼らの耳は、太鼓やラッパの音、銃後にあつてただ大言壮語する雄弁家どもの美辞麗句などでふさがっているのです。景気の良い呼びかけが「キリストの墓を異教徒より救え！」となることもあれば、「ローマ法王を打倒せよ！」となることもあり、時には、「自由のために！となり、また「綿花、奴隷制、州権のために！」となることもありますね」^{注3)}

注3) マーガレット・ミッチェル著 大久保康雄・竹内道之助訳「風と共に去りぬ」、河出書房新社刊
世界文学全集別巻1 ミッチェル I、p289、1960

日本国憲法前文第一段には「われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。」と宣言している。人類の福祉のためにのみ存在する工学を担う若きエンジニア達も、「風と共に去りぬ」の中で“正義の戦争など存在しない”ことを主張したミッチェルの人間愛と叡智を学んで欲しいと願う次第である。

執筆者紹介

福本 一郎

生物機能工学専攻教授（平成27年3月退職）。専門領域は、医用生体工学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『風と共に去りぬ』 Margaret Michelle著 大久保康雄、竹内道之助訳 河出書房新社（世界文学全集 別巻1 - 3）1961年 品切

『Gone with the wind』 Margaret Michelle著 Warner Books 1999年 品切

[ブックガイド目次へ](#)

『なれる! SE 2週間でわかる? SE入門』

夏海公司著/アスキー・メディアワークス

書名にある「SE」とは、システムエンジニア (System Engineer) のことです。すなわち、この本は、2週間という短期間でシステムエンジニアになるために必要な知識と技能を習得できるよう、平易な語で書かれ、良く構成された入門書で…はありません!

電撃文庫というレーベルから想像がつくと思いますが、気軽に読めて、ラブコメ要素とか萌え要素とかが適度に入っている小説、要するに「ラノベ」です。ただし、普通ラノベと言うと、題材となるのが、妹だったり、幼なじみだったり、ツンデレな同級生だったり、メガネっ娘な学級委員長だったり、ドSな先輩だったりするわけですが、この小説では、情報システム開発会社 (システムインテグレータ、SIerとも呼ばれる) で働くSEが題材になっています。

主人公は、新卒で入社したばかりの桜坂工兵。度重なる就職失敗の果てにたどりつき採用されたのが、この物語の舞台となるシステム開発会社「スルガシステム」です。期待に胸をふくらませて初出勤すると、いきなり遭遇したのが、部署の入口に倒れている人。別に殺人事件などではなく、単に徹夜明けでオフィスで寝ていただけなのですが。その人が、部署のリーダー (システムエンジニアリング部長) にあたる藤崎伊左次です。さらに、工兵のOJT (オン・ザ・ジョブ・トレーニング) 担当、すなわち上司となる室見立華は、ラポールでネットワーク機材とケーブルに埋もれて (やはり徹夜明けで) 寝ています。室見は、中学生にしか見えない顔立ち・体形にもかかわらず、ネットワーク構築の技術はピカイチ、いつも会社に泊まり込んでいるワーカホリックなスーパーエンジニアです。さらに、社長であり、この会社で唯一の営業担当でもある六本松健造は、SE部隊の都合など考えずに、あいまいな要件、無理な納期で仕事を取ってきます。当然、SE部隊にそのしわよせが来て、残業・休日出勤の嵐、その上、年俸制なので残業代や休日出勤手当もありません。

そんな会社を舞台に、社長が受注して来た無茶なSI案件を工兵と室見とがドタバタ劇を演じながらこなして行き、工兵がSEとして成長して行く様が描かれています。ここまでの記述でわかる通り、会社としては世に言う「ブラック」企業です。工兵も、当初は、とてもやって行けない、すぐに辞めようと、考えます。しかし、

室見の厳しい指導と高度な要求（無茶ぶりとも言う）に応えようと努力を重ねるうち、SEの仕事に魅入られて行くのです。

初めて自分でルータの設定を考え、検証環境でネットワークの疎通を確認した時、「つな……がった？工兵は喘いだ。一瞬遅れて、ざわりと鳥肌が立つ。なんとも言えない感覚が意識を満たした。背筋がぞくぞくする。うわ、やばい。なんというか、これは——『気持ちいいでしょ？』振り向くとすぐ傍に室見の顔があった。」さらに何件もの無茶な案件をこなし、2週間が経った時、工兵は室見から一緒に仕事をしていける仲間として認められます。2週間で辞めようと心に決めていた工兵は考えます。「果して自分はこの会社でやっていけるのか、ITという業界で生きていけるのか。」「本音のところではもう分かっているのだ。この会社に入って以来、数限りなく体験してきた修羅場、鉄火場。それらをギリギリのところできくりぬけている快感。本番システム切替え時のひりつくような緊張感。」「今更自分は他の仕事に満足できるのか？こんな世界を経験して、これだけスリリングな毎日を過して。九時に出社し、ルーチンワークをこなして五時に退社する。そんな職場に居続けられるのか？」そして、この会社で働き続けることを決意します。

この『なれる！SE』、実はシリーズもので、現在12巻まで刊行されています。ここで紹介した1巻はまさにSEの初歩の初歩に関するエピソードですが、巻ごとに、「運用構築」、「提案活動」、「プロジェクト管理」、「客先常駐」などのテーマに応じたエピソードが描かれています。あくまでもフィクションではありますが、顧客の無茶な要求、急な仕様変更、無理な納期、トラブルの続出など、実際にSEとして働いている人にとっては「あるある」と感じられる、現実的な事案を軸にストーリーが展開されています。主人公たちの勤務状況も含め、IT業界の実態がかなり良く描写されているので、IT業界を目指す皆さんには、心の準備のためにも、ぜひ一読をお勧めします。ただし、上司が中学生体形の美少女だったり、運用担当の女性社員にいきなり惚れられたり、客先の敏腕（女性）課長がツンデレだったりすることは、現実にはありえませんので、これらの点はあくまでも「お話」と思って読みましょう。

執筆者紹介

湯川 高志

情報・経営システム工学専攻教授。専門領域は、知識処理、テキスト処理、並列コンピューティング。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『なれる！SE－2週間でわかる？SE入門』夏海公司著 アスキー・メディアワークス（電撃文庫）2010年 637円

『なれる！SEシリーズ』夏海公司著 アスキー・メディアワークス（電撃文庫）2010-2014年 572-637円

[ブックガイド目次へ](#)

『ひみつの王国：評伝石井桃子』

尾崎真理子著／新潮社

ブックガイドの原稿を書くのはこれで3回目です。毎回、どんな本をとりあげるか悩みます。過去2回は自分自身がおもしろいと思い、なおかつ大学生のみなさんに読んでもらいたい、もしくは興味を持ってもらえるのではと思った小説や随筆を選びました。今回も、初めは大学生が主人公の小説について書いていました。北村薫の『空飛ぶ馬』『夜の蟬』『秋の花』（いずれも東京創元社）などの初期の作品です。これらもおもしろいので、是非読んでみてください。しかし、その原稿を書いている途中にこの本を読んだら、こちらを薦めたくくなりました。でも評伝はその人を既に知っている読者にとって興味深いものです。長岡技大生に向けてのブックガイドに載せてもいいのかしら。そんな迷いも石井桃子の作品を再読してゆくうちに消えていきました。石井桃子の翻訳や小説も一緒に薦めてしまえばいい。というわけで、これから少しの間、私の好きなものにお付き合いください。

石井桃子は明治40年（1907）に浦和に生まれ、平成20年（2008）に101歳で亡くなりました。絵本『ピーターラビットのおはなし』（福音館書店）の翻訳者、また戦後ベストセラーになった『ノンちゃん雲に乗る』（岩波書店：石井桃子集1）の作者といえ、思い当たる方も多いかもかもしれません。今回この評伝を読み、日本女子大学で英文学を学んだ後に菊池寛の下で文藝春秋社の編集の仕事に就いた頃や山本有三や吉野源三郎と新潮社で働いていた戦前の時代のこと、終戦直前から戦後にかけて宮城県で農業をおこなっていたことなど、これまで作品から垣間見えていた石井桃子の生涯がくっきりと浮かび上がってきました。

なかでも「クマのプー」と石井の出会いは鮮やかです。石井は菊池の紹介で犬養毅の漢書を整理するために犬養家に通っていました。昭和8年（1933）クリスマス・イブの夜、犬養毅の孫の康彦に贈られた洋書“The house at Pooh corner”を手にとった石井は翻訳して康彦とその姉の道子に語りはじめました。すると姉弟はストーブの前できゃあきゃあと笑いころげまわり大騒ぎとなります。

プーの話の切望していたのは子どもだけではありませんでした。結核で亡くなった親友、小里文子も見舞いのたびに石井が話してくれるのを心待ちにしていました。文子との交流は石井の小説『幻の朱い実』（岩波書店）に詳しく描かれています。

戦後になると石井は岩波書店の編集者となり「岩波少年文庫」を創刊し、続い

て「岩波の子どもの本」という絵本を出版します。その後の海外留学を経て、翻訳、創作、児童文学の研究、家庭文庫つくりと広範囲に活動してゆきます。

このように、この評伝には明治から平成までの百年間、一人の女性の真摯に生きてきた道が描かれているのです。

<大人になってからのあなたを支えるのは、子ども時代のあなたです>これは石井がよく語っていた言葉だそうです。確かに、石井桃子という人がいなければ、私の世界は今とは違うものになっていた、と思います。子どもの頃、くりかえしくりかえし石井桃子訳の絵本や童話や石井が創刊した岩波少年文庫を読みました。大人になってからも自分の子どもに読み聞かせました。それらが私の中にしみ込み、今の私や私の家族を形成していると思うのです。

これまで読んできた本の中でも、多くの人が石井桃子や岩波少年文庫について言及していました。映画監督の宮崎駿は『本へのとびら』（岩波新書）で岩波少年文庫と石井桃子について熱く語っています。江國香織は洋梨やさやえんどうを食べるたびに石井桃子訳の絵本の文章を口ずさむと『絵本を抱えて部屋のすみへ』（新潮社）で述べていますし、恩田陸も岩波少年文庫を愛読していたことをエッセイ『小説以外』（新潮社）に書いています。北村薫の小説『リセット』（新潮社）には、まるで石井桃子のような人が登場します。生物学者、福岡伸一の『せいめいのはなし』（新潮社）の奥付には「献辞 パートンの黄色い本に」と記されています。これはパートン作、石井桃子訳の『せいめいのれきし』（岩波書店）のことです。石井桃子の百年は豊かな地下の水脈となり、多くの人々を潤しているようです。

学生のみなさん、将来子どもが生まれて本を読んであげたいな、と思った時、数多く出版されている児童書の前で、どれがいいかと迷うかもしれません。でも大丈夫。「石井桃子」の名前が入っている本なら絶対におもしろいです。間違いありません。

執筆者紹介

安原 明子

本学学術情報課学術情報係長。担当事務は図書館資料の経理等。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ひみつの王国：評伝石井桃子』尾崎真理子著 新潮社 2014年 2,916円

『空飛ぶ馬』北村薫著 東京創元社（創元推理文庫）1994年 734円

『夜の蟬』北村薫著 東京創元社（創元推理文庫）1996年 626円

『秋の花』北村薫著 東京創元社（創元推理文庫）1997年 670円

『ピーターラビットのおはなし 新装版』Beatrix Potter著 石井桃子訳 福音館書店（ピーターラビットの絵本1）2002年 756円

『石井桃子集1－ノンちゃん雲に乗る』石井桃子著 岩波書店 1998年 3,132円

『The house at Pooh corner』A.A.Milne著 Puffin Books 1992年 890円

『幻の朱い実 上・下』石井桃子著 岩波書店（岩波現代文庫）2015年 1,318-1,512円

『本へのとびら』宮崎駿著 岩波書店（岩波新書）2011年 1,080円

『絵本を抱えて部屋のすみへ』江國香織著 新潮社（新潮文庫）2000年 767円

『小説以外』恩田陸著 新潮社 2005年 品切

『リセット』北村薫著 新潮社（新潮文庫）2003年 680円

『せいめいのはなし』福岡伸一著 新潮社 2012年 1,512円

『せいめいのれきし』Virginia L. Burton著 石井桃子訳 岩波書店 1964年 1,728円

ブックガイド目次へ

『ポンド氏の逆説』

チェスタトン著／東京創元社

さてお立合い。御用とお急ぎでない方は、ゆっくりと聞いておいで見ておいで。手前ここに取りいだしたるは、「ポンド氏の逆説」なるいっぼう変わった物語。欧州は英国の産、G.K.チェスタトンなる御仁の手になるこの本、8つの短編がおさめられております。

チェスタトンといえば逆説逆説と代名詞のようにいうけれど、この短編集、いずれもそんなじょそこの奇をてらった話とはわけが違う。何しろこのチェスタトン、とびきりひねくれたおっさんだから発想が尋常じゃない。世間一般と違った言動をして粋がりたがる人間は星の数ほどあれど、彼ほど世間の凝り固まった偏見をきれいにひっくり返してみせる者はいない。一見つじつまのあわぬ事柄を、ものの見事に成立させてみせるのが彼の技の見せ所。

至って紳士的な官吏たる主人公のポンド氏が時として放つ奇怪な発言の数々、一端をお目にかけてしんぜよう。

「二人の意見が完全に一致したから、一人がもう片方を殺す事件が起こった」だの、「黒々と書ける赤鉛筆のようなもの」だの、常人にはわけのわからぬ命題ばかり、よくもひねり出したもんだ。

第一話からして、囚人の「死刑執行停止」を通達する伝令が道中で死んでしまったから囚人が釈放されたというんだから驚きだ。おっと、豆鉄砲をくらった鳩みたいな顔をしちゃいけないよ、「死刑執行」令状をもった伝令が道中で死んだから釈放されたと勘違いしちゃいけない。何とも面くらう話だが、その先に待つものはこれまた何とも人を食った種明かし。

逆説のエッセンスをギュッと極限まで煮詰め、諧謔のスパイスをたっぷり効かせて仕上げた味わい深さ。逆説とは何ぞ、パラドックスとは何ぞとおっしゃる方にも一度手に取っていただきたい。

癖は強くてすると飲み込むとはいかないが、分量自体はごくあっさり、たまのひととき浮世を離れて、思う存分狐につままれてみるのも悪くない。訳が古いのもまた一興、いやいやそもそも原文も技巧的、それだけに幻惑の効果が増しているというもの。

さてお立合い、この本の効能が分かったら遠慮は無用だ、どしどしお読みあれ。

執筆者紹介

小林 晶子

本学学術情報課情報サービス係。担当事務は、学術雑誌・電子ジャーナル調整等。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『ポンド氏の逆説』 G. K. Chesterton著 中村保男訳 東京創元社（創元推理文庫）
1999年 品切

[ブックガイド目次へ](#)

『吉祥天女』[全2巻]

吉田秋生著／小学館文庫

「女であるということが時々どれほどの屈辱をもたらすか、あなたたち男にはわからないでしょう」この名セリフとともに1980年代に一世を風靡し、大賞を受賞し、映画やドラマにもなった作品である。この物語の主人公小夜子は女系の旧家令嬢で類まれな美貌の持ち主である。まだ高校生であるが、刃物のように伶俐で家の財産を狙う男たちには容赦ない。それでいて、心に傷をもった女子高校生にはこの上なく優しい。主人公を取り巻く男たちは次々と謎の死を遂げ、物語のところどころでそれらが小夜子による殺害であることが示唆されるが、最後まで真相は明らかにならない。一見ミステリー小説のようではあるが、読者が殺人犯にたどりつくまでの面白さが目的ではなく、作者の意図するところは、もっと別のところにあるように思う。それはこんな場面からわかる。小夜子にプライドを傷つけられた男が性的暴力による復讐を企てている。それを知った別の男はこんなセリフを語る。「オレはつくづく女に生まれなくてよかったと思うね。本来、こうあるべきだと思う相手から突然反撃されると、そんなに腹の立つものかね？」実は、冒頭のセリフとこのセリフの二つが、この作品が女性の圧倒的的支持を受けた理由なのである。前者はすべての女が経験しながらも言語にすることが難しかったセリフ、後者は男の本音はこういうものなのだと女たちが信じているセリフだ。作者はこの二つのセリフを登場人物に言わせたいために、この作品を書いたのではないかと思う。

セクハラという言葉が日本社会に登場して25年たった。25年前というと、ちょうど本作品が出版された年である。片仮名でセクハラと書くといかにも軽い印象になってしまうが、本質は性差による人格の愚弄と否定である。日本がこの点において最も遅れを取っている国であることは、男女参画共同という用語が存在することからもわかる。「女性が輝く社会」に至っては噴飯ものだ。25年を経ても、社会における性意識は微塵も変わることなく、昨年も都議会におけるセクハラヤジが問題になった。「これぐらいはユーモアの範疇だ」「この程度で目くじらを立てるのは」と弁護するように男性の意識はまったく変化おらず、女性の意識だけが変化した。ジェンダー研究の牟田和恵氏は、男性の無神経さは「地位のある中高年男性に構造的にビルトインされたもの」とであると述べている。都議会のヤジ

場面で被害者の議員は笑って受け流そうとしたが、このように相手のメンツに配慮し、その場を丸く収めようとするのは、男性社会で働く女性が身につけてきた悲しい処世術であると牟田和恵氏は述べている。そして、男はメンツをたててもらっていることに気付かず、「こうあるべきだと思う相手（女）から突然反撃されると」逆上し、持てる全権力を行使して相手を潰そうとするものである。そのような経験は働く女性ならば誰でも経験をしているので、身の処し方を知っている。例えば、媚を売り、愛嬌を振りまく方法。弱いことを演出し同情を買う方法もある。この2つを併せ持つのが、評論家メイ・ロマ氏の言ういわゆる「ヲタサーの姫」（「世界のどこでも生きられる」）である。「ヲタサーの姫」とは、そこそこ頭は良く、仕事に対して有能でも「一緒に仕事できて、嬉しいです」と控えめで、男性の存在を脅かさない。基本的に服装はダサく、ぽっちゃり体型で、決して美人ではないのに（あるいは美人ではないがために）女性慣れしていない日本のエリート男性に最も好まれると言う。弱さをアピールして生きていくという点では、「注射アイドル」というのが最近登場したが、舞台上で注射を打たれ泣き顔を見せるというものだ。彼女たちいわく「可愛いと思われたい」のだそうで、ここまで来ると世も末だ。

小夜子はすらりとした美女であり、頭脳も明晰で近寄りやすい。媚も売らずヲタサーの姫にもならず、生きるために「闘う」という方法を取った。闘えばその先には手ひどい敗北しかなくても、小夜子の誇り高さは闘うことしか選ばなかった。80年代にもヲタサーの姫はいたと思うが、当時の女性は闘う小夜子を支持したのだろう。それにしても小夜子が次々と男たちをやり込めていく姿は、読んでいて決して痛快なものではなく、おどろおどろしい怨念を感じ後味が悪い。評論家の呉智英氏は本作品を「虚しさと浄化」と要約しているが、浄化というものを私自身はまったく感じなかった。小夜子は最後には打ちのめされ、結末の見えない暗黒の物語になっているが、小夜子ほどの知恵者であれば、もっと胸のすくような勝ち方ができるだろうにと思ってしまう。いや、まてまて。女が本気で闘いを挑んだら、空恐ろしいものになることを作者は暗示したのかもしれない。

執筆者紹介

柴崎 秀子

基盤共通教育部教授。専門領域は、第二言語習得研究。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『吉祥天女 [全2巻]』 吉田秋生著 小学館 (小学館文庫) 1995年 627-648円

[ブックガイド目次へ](#)

男の白鳥は美しいか

『Matthew Bourne and his Adventures in Dance : conversation with Alastair Macaulay』

Matthew Bourne and Alastair Macaulay 著 / Faber and Faber

DVD 『Swan Lake : Matthew Bourne』

kultur Video

DVD 『Billy Elliot』

Universal

DVD 『リトル・ダンサー』

スティーヴン・ダルドリー監督 / ジェネオン・ユニバーサル

バレエの専門書である。しかも、洋書で厚さ6センチ、700ページを超える大著、電話帳のようなボリュームである。このような本を本学の学生が読む機会は、まづないと思われるので、あえて紹介することにした。

筆者マシュー・ボーンは英国の振付家で、現代バレエだけでなく古典作品を独自の解釈で振付し、多くの作品を世に送り出してきたが、代表作は何と言っても「Swan Lake」つまり白鳥の湖である。「なんだ、有名じゃないか、誰でも知っている」と思うなかれ。舞うのは男の白鳥である。面白おかしいグランディエーバやモンテカルロと間違えないで頂きたい。こちらは真面目な芸術である。バレエ作品多しといえど、この作品ほど好悪が分かれるものはない。魅了され虜になる人がいるかと思えば、絶対に受け入れられない、許せない、なぜ古典バレエの名作中の名作をこんな風にしてしまうのかと強い嫌悪を示す人もいる。現代バレエにおいてインパクトの強さでは断然トップだろう。なにしろ白鳥たちは全員白塗りの男性、上半身は裸、下半身は羽根のような翼のような不思議なコスチュームをつけている。つまり、ダンサーたちの筋肉がこのバレエの衣装なのだ。本著は、このような作品を世に送り出したボーンの本格的なバレエ理論と芸術論である。アラステア・マカレイとのインタビュー形式で記述されているが、シェイクスピアに始まるイギリスの舞台芸術の伝統と歴史があるからこそ、現代の「Swan Lake」が生まれたことが良く分かる。

古典の「白鳥の湖」は、悪魔によって白鳥に化身されたオデット姫と王子とのロマンスがテーマである。第二幕で王子は黒鳥をオデット姫と誤解し愛を誓い、第三幕で絶望したオデット姫は自死するという悲劇、または誤解が解けてハッピーエンドという二種類の物語になっている。マシュー・ボーンの「Swan Lake」では王子が主役と言ってよい。物語は王子の孤独から始まり、それは白鳥との出会

いにより愛と歓喜に変わる、しかし、王子は白鳥を裏切り、最後は狂気の中で死を迎えるという王子の内面が物語の中心である。宮廷の中で退屈な生活を送っている王子は宮廷の外にも出てみるが、そこで見たものは人々の嘲笑と蔑みであった。すべてに絶望し、湖に投身しようとするが、その時突然、目の前に美しく大きな白鳥が現れる。彼は白鳥の群れを率いるリーダーのようでもあり、象徴のようでもあり、もしかしたら白鳥の王子かもしれない。雄々しく誇り高く、王子を誘うようであるが、一歩でも近づこうものなら手ひどく拒否する。それでも、王子は白鳥に強く魅了され、徐々に白鳥も心を許し、ついには愛に至る。第二幕では黒づくめの男が登場するが、王子が恋した白鳥に酷似していたため、王子は白鳥を裏切り、この男に恋してしまう。ここまでのストーリーは古典とほぼ同じだが、第三幕は大きく異なる。寝ている王子の枕元に亡霊のように次々と白鳥たちが現れる。眠っている王子は気付かないが、舞台を見ている聴衆にとっては次第に数を増していく白鳥は怖い存在だ。この場面について、著者はイギリスの映画監督ヒッチコックの「鳥」に触発されたと述べている。それはこのような場面だ。主人公の女性が小学校のジャングルジムを背に煙草を吸おうとしている。最初はカラスが一羽ジャングルジムに止まるが、女性は気がつかない。そのうちに二羽、三羽と止まり、次々と増えていく。女性がふと振り返ると、ジャングルジムはカラスで真っ黒になっている。映画の中の人物が気付かず、映画を見ている者が気付くという手法は見事で、観客の恐怖を掻き立てる名場面である。ポーンはこれをバレエで演じて見せた。

ラストシーンはバレエ史上ないほどの悲劇である。白鳥たちの怒りは、王子と王子を愛した白鳥の両方に向けられる。彼らは王子を容赦なく叩きのめし、王子を助けようとする白鳥を喰い殺す。ここでの白鳥たちは美しい鳥ではなく、動物的本能に満ちた野生である。動物であるがゆえに、純粋で妥協がない。ポーンは白鳥を暴力的で美しく力強く描いて見せている。

白鳥の描き方だけでなく、ポーンの独自の考え方も本書からわかる。バレエは非現実の世界を創り出すもので、通常、聴衆がうっとりするような容姿のダンサーが舞うものだ。ところが、この作品にも登場する多くの人物はいわゆる美男美女

ではない。酒場のシーンに出てくる人々は、何となくどこかで見たような人ばかりだ。この点について、ボーンは「観劇している一人ひとりにとって、舞台上の人物の誰かが自分の投影であるという作品にしたい」と述べている。

孤独な王子と母親である王妃との冷たい親子関係も今日的なテーマである。また、王子のスキヤンダルを追うパパラッチが登場するが、現代のイギリス王室とメディアの関係を示唆するものであるように見える。白鳥と王子の関係は男性同士の愛であるが、古典バレエには同性愛をテーマにした作品はないように思う。

このように、ボーンの作品は興味が尽きないが、いくらバレエの専門書を読んでも、実際の舞台を見なければ意味がない。バレエなんて一生見に行かないという人はDVDの「Swan Lake」を見てはいかがだろう。それも抵抗があると言う人は、BBCが制作した映画「Billy Elliot」(邦題：リトルダンサー)をお薦めする。多くの賞を取った秀作で、イギリスの片田舎にある炭鉱で育った少年がバレエダンサーになっていく物語である。少年は早くに母を亡くし、父親と兄は貧しい鉱山労働者で、芸術や文化にはおよそ縁のない生活環境である。ある日、ふとしたことから少年はバレエに興味を持ち、こっそり練習に通うようになるが、それは父親の激怒をかう。「バレエなんて男がするもんじゃない。恥ずかしい。」「なんで、男がバレエをやってはいけないんだよ。」という二人のやり取りは、まさに男性バレエに対する社会の両極端な見方を象徴するものだ。映画は二人の相克が中心であるが、ついに、父親は少年の情熱に負け(あるいは愛情ゆえに)、家中の金目のものを質に入れ、少年にロイヤルバレエのオーディションを受ける機会を与える。そこからストーリーは一気に飛び、大人になった主人公がマシュー・ボーンの「Swan Lake」の舞台裏で出番を待っている場面が変わる。息子の晴れ舞台を観るために父は生涯で初めて劇場に足を運ぶことになる。チャイコフスキーの壮麗な音楽とともに、主人公が力強い跳躍で舞台に踊り出るショットで映画は終わる。ストーリーもテーマも音楽も秀逸だが、客席で見ている父親の表情が良い。役者というのはこのような表情ができるものなのかと、何度見ても胸を熱くする。つまり、映画は男のバレエを全面的に支持し、肯定しているのだ。男の白鳥、大いにけっこうではないか。

執筆 者 紹 介

柴崎 秀子

基盤共通教育部教授。専門領域は、第二言語習得研究。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『Matthew Bourne and his Adventures in Dance : conversation with Alastair Macaulay』 Matthew Bourne, Alastair Macaulay著 Faber and Faber 2011年 3,703円

【DVD】『Swan Lake : Matthew Bourne』 Kultur Video 2012年 3,868円

【DVD】『リトル・ダンサー = Billy Elliot』 スティーヴン・ダルドリー監督 ジェネオン・ユニバーサル・エンタテイメント 2013年 1,543円

[ブックガイド目次へ](#)

『フェッセンデンの宇宙』

E・ハミルトン著、中村融編訳／河出文庫

『The Best of Edmond Hamilton』

Edmond Hamilton and Leigh Brackett Hamilton (editor)／Phoenix Pick

研究室の学生の井上瑛恵さんに紹介されて、読んでみました。私は知らなかったのですが、どうやらSFの古典で有名らしく、最近流行？の科学者倫理的にも興味深い作品でもあるとのこと（井上さん談）。ネットでは「名作中の名作」とか、本書のあとがきでも「いわずと知れた名作」との評判です。本書は作者エドモンド・ハミルトンの短編集となっており、『フェッセンデンの宇宙』の「初出ヴァージョン（1937年）」と「改稿ヴァージョン（1950年）」それぞれの翻訳が、最初と最後に載っています。個人的には、改稿ヴァージョンの翻訳が読みやすいと思うので、おすすめです。また、あとがきにも書かれていますが、改稿ヴァージョンのほうが「科学者の倫理」というテーマが見え易い気もします。いずれにしろ、短編ですので両方を読んでも時間はかかりませんから、読み比べても良いでしょう。

さて、ストーリーについてです。科学者フェッセンデンが、なんと実験室で小さな宇宙を創ることに成功します。彼の友人で本編の語り手ブラッドリーは、驚嘆しながらも「フェッセンデンの宇宙」に魅入られます。しかし、科学者というよりも創造主のように振る舞うフェッセンデンに対して違和感を、そして彼の行動に強い怒りを感じ……。オチは少し捻ってありますが、現在では良くある感じなので正直「ふーん、なるほど」という程度です。

しかし、いろいろと考えるポイントがあり、最近流行？の科学者倫理も本作の大きなテーマになっています。本書では、「フェッセンデン＝マッドサイエンティスト」vs.「わたし（ブラッドリー）＝常識人」という役柄が、極端に書かれているので分かりやすいですが、現実はもっと曖昧でしょう。ふと考えてみると、「自分もフェッセンデンと同じことをしているのでは？」とってしまいます。

嘘をつくというのはそもそも論外ですので、巷で騒がれているような研究倫理とは趣が違いますが、もっと曖昧な境界を持つ科学者倫理の教科書として使えそ

うな小説です。少しネタバレになってしまいますが、私はフェッセンデンよりも、故意ではないとはいえ、結果的には放火・殺人に関与しておきながら真相を隠し、まったく反省の色が感じられない主人公？のブラッドリーも、よほど倫理的にどうかと思うのですが・・・。

ひょっとして翻訳で脚色しているのかもと思い、英文の原著も購入して確認してみました。ちなみに、原題は「Fessenden's Worlds」で、宇宙=the universe, the cosmosではなくworlds、しかも複数形になっているのがポイントですね（本編を読めば分かります）。やはり原著でも「わたし（ブラッドリー）」のちょっといかなものかと思われる行動はそのままでしたので、作者エドモンド・ハミルトンが意図的にそのように書いている気がします。そうすると、どちらが一体まともなのか？、誰もまともではない？、そもそもまともとは？と、本当のオチはなんだろうと考え出してしまいます。

そういえば、本作の語り手ブラッドリーがgrandiose metaphor（直訳すると、非現実的で大げさな例え話？）と言っていた「実験室の中に宇宙を創る」は、当プラズマ物理学研究室でも研究テーマの一つとして取り組んでいます。しかし、まだまだ「フェッセンデンの宇宙」には遠く及ばないので、がんばろうと我に返りました。フェッセンデンの実験装置がとても欲しいのですが、本編の最後には壊れてしまいます。「ああ、せっかくの装置が壊れちゃって、もったいない」と思うのですが、「きみの科学的好奇心なんかそ食らえだ（原文ママ）」とブラッドリーに怒られてしまいそうです。

初出から半世紀どころか70～80年も経っているのに、科学者倫理的な問題は未だ解決されず、現在の社会現象とマッチングします。古典ですから、内容に少し古いイメージがあるのは否めませんが、昔から変わらぬ問題を提起してくれます。短編ですので読み終わるのにはあまり時間がかかりません。しかし、むしろ読み終わった後、あれこれ考えるのに時間がかかる小説です。

執筆者紹介

菊池 崇志

原子力システム安全工学専攻准教授。専門領域は、核融合、粒子ビーム物理学、プラズマ科学。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『フェッセンデンの宇宙』 E. Hamilton著 中村融編訳 河出書房新社（河出文庫）
2012年 1,026円

『The best of Edmond Hamilton』 E. Hamilton著, Leigh Brackett編 Phoenix
Pick 2010年 1,931円

[ブックガイド目次へ](#)

『夜会 vol.3 KAN (邯鄲) TAN』

中島みゆき著／角川書店

『夜会 vol.4 金環蝕』

中島みゆき著／角川書店

『夜会 vol.5 花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせし間に』

中島みゆき著／角川書店

『夜会 vol.6 シャングリラ』

中島みゆき著／角川書店

「夜会」とは、25年程前から半定期的に上演されている、中島みゆきが演じるほとんど一人芝居のコスプレショー。作詞・作曲・演出・主演まで全て中島みゆき本人が手掛けている。これまでに13作品を発表し、18度の長期公演を行った。つまり5公演は再演。

コンセプトは「言葉の実験劇場」。初期は、希薄なストーリー性の下、既存の曲を様々な情景で歌うといった感じで、なんだコスプレしたかっただけか、と思われていた。本人も、真昼間から演じるのはさすがに恥ずかしいらしく、午後8時に開演するのが恒例となった。その後、徐々にストーリー性を重視するようになり、そのため書き下ろし曲が大半を占めるようになってきている。

ここで紹介するのは、そのシナリオ本。推薦書というよりも、言葉を大切にしている中島みゆきの葛藤を読み取ることのできる貴重な資料としての紹介。

中島みゆきの書く歌詞は非常に聞き手に伝わりやすい。比較的単純な構成の曲が多い上に、ご丁寧にも同じフレーズを何度も繰り返してくれることが多いせいもあるけれど。

エッセー本も数冊出している。「オールナイトニッポン」のノリで、少し笑いをとろうと努力していることが伺えるものの、基本的に非常に読みやすい。

だが、「夜会」の中島みゆきはそうではない。一体誰が何をしているのか、どのように話が続いているのか、一度観ただけではわからないことばかり。最期はそれなりに盛り上がるように構成されていて、本人もこれでもかといわんばかりに熱唱するので、観客はそれなりに満足して家路につく。けれども細かいところでもかなりひっかかる。熱狂的なファンであればあるほどひっかかる。ひっかかってもなす術はない。交流サイトや巨大掲示板でああでもない、こうでもない議論するのがせいぜい。そうこうするうちに、1年程経つとDVD（初期はビデオ）を

出してくる。何度も見直せるのは有難いがひっかかるところはやっぱりひっかかる。それでは、と出版したのが、これらのシナリオ本。どうだ、細かいところまでしっかり書いてあるぞ、との意気込みが伺える。が、読んだ方は、そんなことまで観ただけでわかるか、と有難さよりも不満たらたら。さすがに本人もこたえたのか、vol. 7からは4冊ほど、丁寧にも小説として世に送り出した。けれど読み手の感想は変わらない。ならお前ら自分で勝手に解釈しろ、と、最近の3作品はシナリオ本も小説も出さなくなってしまった。しかし、余計に理解し難いストーリー展開の作品が出来上がる事態が続き、翌年あるいは数年後に、仕方なく、わかりやすく改変したつもりで再演されている。

そのような経緯で書かれたこれらのシナリオ本。暇があったらばらめくってみてください。なるほど、と納得してはいけません。そんなのわかるように演じてはいません。別に読むことを無理には薦めません。これらのシナリオ本は、言葉（+曲）で伝えることには長けている中島みゆきが、言葉以外の武器も手に入れたとき、人にものごとを伝えることがいかに困難な作業になってしまうかということを実証する資料として貴重なのです。

執筆者紹介

北谷 英嗣

基盤共通教育部教授。専門領域は、物性基礎論、統計力学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『夜会vol.3-KAN（邯鄲）TAN』中島みゆき著 角川書店 1992年 品切

『夜会vol.4-金環蝕』中島みゆき著 角川書店 1993年 品切

『夜会vol.5-花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせし間に』中島みゆき著 角川書店 1994年 品切

『夜会vol.6-シャングリラ』中島みゆき著 角川書店 1995年 品切

ブックガイド目次へ

『ブラウン神父の童心』

G. K. チェスタトン／創元推理文庫

『ブラウン神父の知恵』

G. K. チェスタトン／創元推理文庫

『ブラウン神父の不信』

G. K. チェスタトン／創元推理文庫

『ブラウン神父の秘密』

G. K. チェスタトン／創元推理文庫

『ブラウン神父の醜聞』

G. K. チェスタトン／創元推理文庫

『The Complete Father Brown』

G. K. Chesterton / Penguin Books

まず、少なくともこの1年、読書らしい読書をしていなかったことを白状します。そこで、学生のとて読んだ本からの紹介です。

ブラウン神父シリーズは、シャーロックホームズとほぼ同時代、ロンドンとその周辺を舞台とする推理小説。奇想天外なトリックと機知に富んだ内容は、シャーロックホームズものと双璧をなすと言われています。

賢い人間は木の葉を森に隠す。森が無い場合は自分で森を作る。では死体を隠したいと思う者はどうするだろうか（チェスタトン）

皆さんは、このような引用をどこかで耳にされたことがあるかもしれません。「折れた剣」（童心）の中で使われている一節です。本稿ではタイトルで掲げた、情景を思い浮かべる面白さと難しさについて、自らの体験を通して本シリーズを紹介したいと思います。

以下は「大法律家の鏡」（秘密）からの引用ですが、この情景が容易に思い浮かびますか？

（庭のイルミネーションが趣味の法律家の屋敷で、一同が前庭に出たところの描写。時間は日没後）

警部があとをついて行ってみると、生垣のかげの奇妙な階段は、暗く寂しい庭の上につき出た半壊の橋のような構造物に通じていた。その構造物は、ちょうど建物の角をまわる具合に築かれていて、赤い灯、青い灯のちかちかする裏庭を眼下に見晴らせるようになっていた。どうやら、芝生の上に張り出した^{せりもち}迫持を利用して展望台のようなものをこしらえようという着想が、工事なかばで放棄されたものらしかった。

英国に住んだことのある人なら容易に分かるのかもしれませんが、行ったこともない私には全く想像が付きませんでした。挿絵などは一切ないので…。そもそも、「前庭」からして私にはピンと来ません。そこで先ず考えたことは、映像作品を探してみることです。1974年にイギリスでテレビドラマ「Father Brown」として13話放送されていることが分かり、DVDも出ているのでさっそく観てみました。確かに情景は分かりますが、今度は思い浮かべたイメージと違いすぎるのでそのギャップに悩んでしまいました。主演のケネス・モアのイメージも創元推理文庫のカバーに描かれているブラウン神父のイメージと全然違うし、そもそも、小説で読んだときの面白さが全然感じられなかったんです。結局、どうしても情景を見ておきたい部分だけ観て、DVDを観るのは止めてしまいます。2013年にもBBCでドラマが放送されてDVD化されているそうなので、こちらは少し期待しています。

次に始めたのが、味のある中村保男の訳と、原文を読み比べてみることでした。内容は分かっているので、分からない単語が多少あっても気にしません。情景の話とは少し離れますが、こちらのほうは読んだ実感が増し、実りある結果になりました。例えば、原文では意外とシンプルな表現になっていることに気づかされます。

「手早いやつ」（醜聞）における一文

問題の、人目につきやすいふたりの人物がこのホテルに足を踏み入れて、いあわせた人たちすべての注目を浴びた時刻よりも三十分早く、やはりふたり連れ、これはいかにも目立たない人物が同じホテルにはいって、だれの注目もひかなかった。

Half an hour before those two conspicuous figures entered the hotel, and were noticed by anybody, two other very inconspicuous figures had also entered it, and been noticed by nobody.

先に到着した二人とは、私服の警部と、僧服を着たブラウン神父のこと。この一文は、「だれの注目もひかなかった」の表現が面白いのでよく覚えていました。英語だと意外と自然な（おそらく自然な）、表現になるんですね。

時代や文化的な違いこそあれ、現代の日本でも、というより長岡でも、似たような体験ができるのが以下です。

「狂った形」（童心）の出だしの部分から

ロンドンから北に走る大路には、ずっと田舎^{いなか}の奥深くまでつづいているものがある。こういう道路は、町並みがまばらになり、家々が間遠^{まどお}になっているのに、その道筋だけはいつまでも通っているという、いわば街頭^{ほけもの}の化物である。一かたまりの店があるかと思えば、つぎには柵をめぐらした畑が、馬小屋に付属した小牧場があり、その隣には有名な宿屋が立ち、またそのつぎには菜園か苗木の栽培場その隣は個人の大邸宅であり、そのおつぎはまた畑、それからまた宿屋……といったぐあいなのである。

Certain of the great street roads going north out of London continue far into the country a sort of attenuated and interrupted spectre of a street, with great gaps in the building, but preserving the line. Here will be a group of shops, followed by a fenced field or paddock, and then a famous public house, and then perhaps a market garden or a nursery garden, and then one large private house, and then another field and another inn, and so on.

前半の巧みな訳文と、「柵をめぐらした畑」や「馬小屋に付属した小牧場」、「苗木の栽培場」などの原文での表現に納得させられます。

最後は、「グラス氏の失踪」(知恵)から、原文を読む前から想像ができてしまった一節です。

(トッドハンターという青年の婚約者がハンターの部屋のドア越しに「二つか三つかだ、ミスター・グラス」などの争うような声を聞いたにもかかわらず、ドアを開けるとグラス氏が居なくなっていた事件。神父による謎解きの部分)

[ネタバレ注意]

「実際のところこのかたは、こう言っていたんでしょ。 — 《ワン、ツー、スリー、ミスッタぞ、グラスを一つ (一個おとしたぞ)、ワン、ツー、またミスッタぞ、グラス》とこんなふうだね」

“What he really said was: ‘One, two and three — missed a glass; one, two — missed a glass.’ And so on.”

執筆者紹介

鈴木 泉

情報・経営システム工学専攻助教。専門領域は、知能処理、画像認識。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ブラウン神父の童心』 G. K. Chesterton 著 中村保男訳 創元社（創元推理文庫）
1982年 713円

『ブラウン神父の知恵』 G. K. Chesterton 著 中村保男訳 創元社（創元推理文庫）
1982年 648円

『ブラウン神父の不信』 G. K. Chesterton 著 中村保男訳 創元社（創元推理文庫）
1982年 713円

『ブラウン神父の秘密』 G. K. Chesterton 著 中村保男訳 創元社（創元推理文庫）
1982年 648円

『ブラウン神父の醜聞』 G. K. Chesterton 著 中村保男訳 創元社（創元推理文庫）
1982年 626円

『The Complete Father Brown』 G. K. Chesterton 著 Penguin Books 1987年 3,197
円

【DVD】『Father Brown』 BBC

ブックガイド目次へ